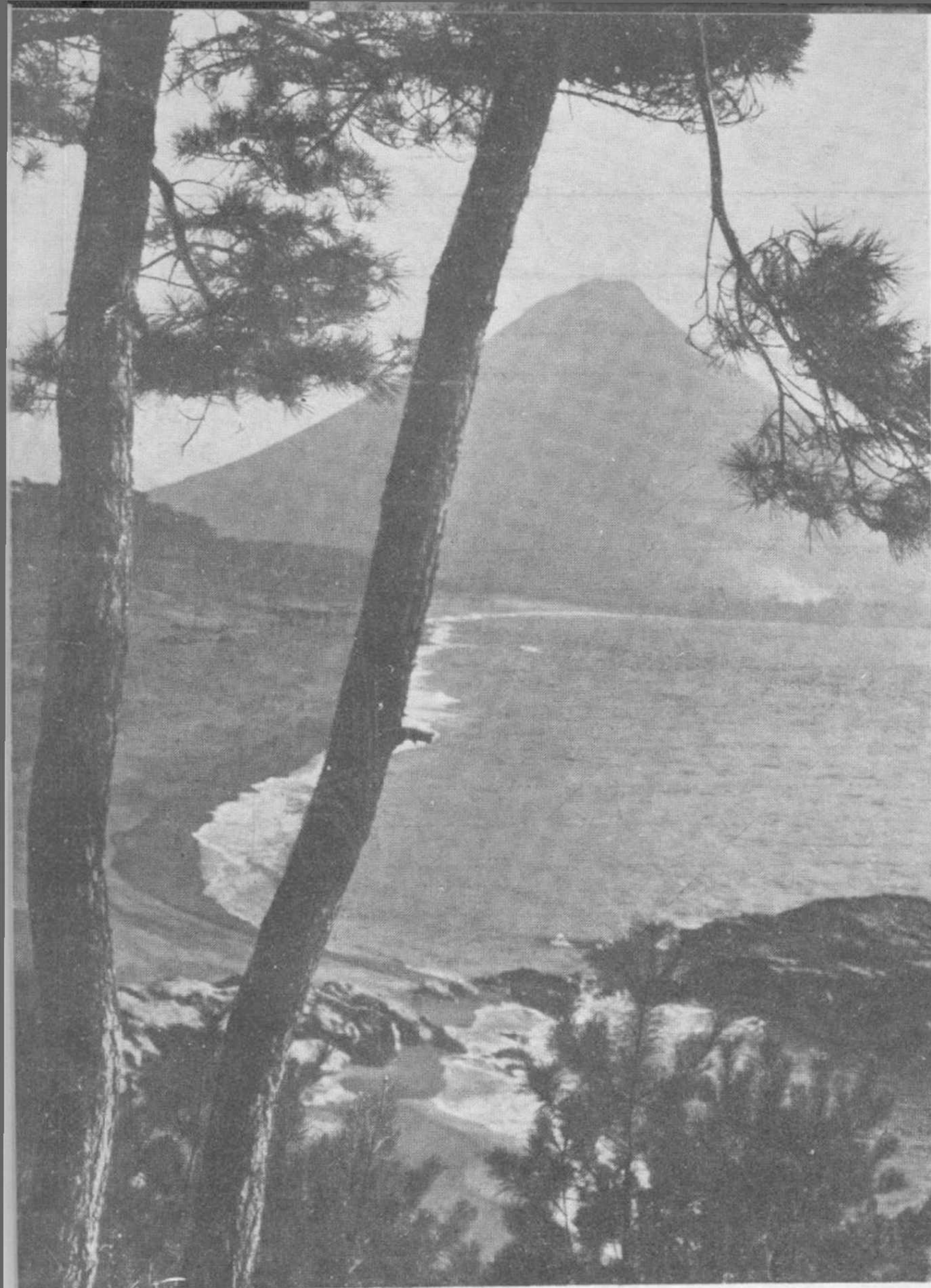
XXIII-Kongreso

エスペラント研究

JARO XVII N-RO 3



MONTO KAIMON-DAKE

# REVUO ORIENTA

1936

MARTO

PANA ESPERANTO-INSTITUTO

LA REVUO ORIENTA 目　次　JARO XVII, N-RO 3, MARTO, 1935

JARO XVII, N-RO 3 MARTO, 1936

LA REVUO ORIENTA

# エスペランチストの數は年々増大してゐる

## アクチーヴァなエスペランチストの數は年々大して増減しないが

我國のエスペランチストの總數を調査するといふことは仲々六ケ敷いことである。尤も我國のエスペランチストの總數を見る目安としては學會の會員數が一應その基準にはなる。併し學會の會員數を何倍すれば全日本エスペランチストの總數が出るかは仲々難問である。

今學會創立當時から今日までの學會會員數の統計を桑原氏の調査によつてしらべてみると

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 1920 年(大正九年) | 1 月 | 400 名 | 1929 年 | 8 月 | 2181 名 |
| 1921 年 | 12 月 | 995 | 1930 年 | 1 月 | 2079 |
| 1922 年 | 8 月 | 1473 | 1931 年 | 9 月 | 約 1990 |
| 1923 年 | 8 月 | 2351 | 1932 年 | 7 月 | 1852 |
| 1924 年(大正十三年) | 1 月 | 約 2700 | | | |
| 1925 年 | 1 月 | 約 2300 | 1933 年 | 1 月 | 1495 |
| 1926 年(昭和元年) | 9 月 | 1821 | 1934 年 | 1 月 | 1231 |
| 1927 年 | 12 月 | 1682 | 1935 年 | 1 月 | 942 |
| 1128 年 | 5 月 | 2159 | 1936 年 | 1 月 1 日 | 1071 |

といふ結果になる。

この統計を見ると學會創立當時(1919 年 12 月)の會員四百名が事實上の第二年目 1921 年の終には既に約一千名になつた。その後次第に上昇して 1924 年まで約二千七百名に達し三千名に垂んとした。不幸 1923 年は關東の大震災のため東京におけるあらゆる文化運動は一時的に逼塞しエスペラント運動もその影響をうけ會員數が逆に漸減の狀態にむかひ 1927 年迄は減る一方であつたが 1928 年から再びもりかへしてきた。しかるに 1932 年を契機として再び減退の一路を辿り昨 1935 年には九百名餘になつてしまつた。(尤も本年一月には 1071 名であるが增頁のための會員增加によつて今日(二月中旬)は 1200 名を突破してゐると思ふ。)

併しこの統計だけを以て學會の會員數の正確な增減と考へ aktivaj esperantistoj の數も之に比例するものと推定しエスペラント運動の盛衰を云々することは早計である。猶この統計の示す會員數についてさへも十分研究の餘地がある。學會の古い會計簿やその他の帳簿の調査によつてもつと正確な統計を見る必要がある。といふのはここに示した會員數はその調査當時會員名簿に存在し雜誌を發送した會員の頭數であつて會費滯納者等をも含んでゐるからである。特に大正時代(1920-1925)は會費のとりたてがゆるやかであつたから會員は二千名をこえてゐても實際會費を支拂つてゐたものは千五百名内外であつた場合もあるのである。(例へば 1924 年本誌 188 頁の學會會計報告文中に「會員は二千三百名あるが過去一年の實績では會費を拂ふ人は千五百名足らずで……」と書かれてゐるのを見てもわかる)。

昭和時代は會費取立は嚴重になつた。それにも拘らず 1928 年から 1932 年迄は大體二千名内外の會員を擁してゐたことは相當の好成績であつた。 1933 年から會員數が急轉直下減少し

たのはその年から本誌の姉妹誌たる「エスペラント」誌が出現したからである。本文二十八頁の R.O. をもらつて會員になるよりも同じ費用で本文四十頁の「エス」誌を購讀した方がよいといふ考へであろう。故に 1933 年以後は aktivaj esperantistoj としては學會々員數に「エスペラント」誌の讀者を加算する必要がある。兩者合して二千數百名になる。尤も學會々員で「エス」誌をとつてゐるものも相當多いから結局二千名內外とみるべきであろう。こう考へて 1920 年から今日迄十六年間の統計をみてみると大體 aktivaj esperantistoj は二千名內外で殆んど增減のないことがわかる。

尤もこれは大ざつぱな大勢を示すだけであつてエスペラント運動といへども社會狀勢の變化に鈍感ではありえない。世間の景氣がよい時と惡い時とで會費の支拂振も大分ちがふ。1928年戰後の國際主義の發展と共に會員も每月百人二百人と增加したこともある。プロエス講座が數千部賣れる時代には又それ相當學會へ入會する人も多かつた。しかしここでは之等についてはのべる必要がない。

扨以上の推論によつて我國エスペランチスト中特に熱のあるエスペランチストの數は每年大した增減なくまづ二千名內外であるといつてよい。こう考へてみると我國のエスペランチストの總數も增減がないと考へるかもしれない。しかしそれは皮相の觀察である。

といふのは學會の昨年度中の新入會員は 215 人であつた。つまり會員の二割は每年大體新陳代謝するのである。しからば古い會員は學會をやめてからどうするか。これらの人々は全然エスペラントを放擲するのであろうか。否そんなことはない。彼等はいろんな意味で aktivaj esperantistoj の列を去るのである。しかしよし現役は去つてもエスペラントに對する熱情は捨てたわけではない。彼等は旣に現役を卒業して豫備役もしくは後備役に入つたのである。エスペラント熱がでてくれば何時でも動員できる人々である。

こう考へてみると現役にあるアクチーヴァなエスペランチストの數は二千名內外で常に大差ないかもしれぬが年々數百名の新會員がふえることを見るとやはり年々それだけの豫後備役にまわる人があるわけである。旣に學會ができて十六年にもなるからこういつた人々は旣に數千人はできてゐることと思ふ。

卽ち aktivaj esperantistoj の數は每年 konstanta であつても neaktivaj esperantistoj は年々增大してゆくわけである。

年々エスペランチストの數の增加してゐるよい證據は次の統計でもわかると思ふ。卽ち東京にひらかれた日本エスペラント大會の參加者の數が次の如く回每に增加してゐることである(他の土地での日本大會は地域的偏在その他のため比較できぬ。)

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 1920 年 | 40 人 | 1922 年 | 170 人 | 1932 年 | 366 人 |
| 1921 年 | 100 | 1926 年 | 200 | | |
| 1922 年(臨時) | 60 | 1929 年 | 280 | | |

又新撰エス和辭典が大正十五年初版發行以來この十年間に五萬册を賣りつくしたことは一人で二册以上買つた人もあるが一册の本が二三人の手を轉々したものもあることと思はれるからエスペラントを學習した人が五萬人あつたといふことは云へないことがないと思ふ。卽ち每年五千人の割である。

こういつた事實からみてもエスペラントを學んだ人が年々ふえてゆくことは明かである。勿論病氣とか老齡のためなくなる人もないではない。しかしそういつた人の數はさほど多くないから結局絕對數はドンドンふえてゆくのである。

學會創立當時は學會の會員でない人々でエスペラントが讀み書きできる人は殆んど皆無といつてよかつた。併し今日では學會々員になつてをらぬ人でエス語の上手な人が相當澤山居る(特に東京などにそういつた人が多い) といふ事實は明かに上の推論を裏書するものである。

近年學會の會員の減少のみをみてそれだけで我國のエス運動が衰微したのだと速斷したり學會の運動は大してエス運動に貢獻してゐないと斷定するのは正當な觀察といふことのできぬことは上述の說明でわかつたことと思ふ。

つまりエスペラント民衆は年々ふえてゆくのである。しかも aktivaj esperantistoj があまりふえない。これはどういふわけであろうか。

これには次の如き二つの重大な原因があると思ふ。その第一はエス語があまりに普及したためエスペランチストの腦裡から殉教者的な氣持がうすれていつたこと。

原則としてエスペランチストの數がふえればふえる程エスペラントを學習しようとする人はふえるし之を實用して利益をえようとする人もふえるがエス語の普及運動の第一線にたつて働こうといふ殉敎的な氣持をもつ人が少くなつてくるのはやむをえない。キリスト敎がキリストやその使徒によつて叫ばれた時代は皆命がけで其敎義の弘布に粉骨碎身した人が多い。併し地球の全表面にキリスト敎がひろまつた今日そのため命をすてて敎義に殉ずる人が何人あるかはうたがはしい。エス運動とても同じことが云へよう。

しかしエスペラントは何といつてもまだ宣傳の時代を脫却してをらない。たえず宣傳をわすれてはならぬ。しかし一部のエスペランチストに殉敎者的氣分がうすらいだからといつて悲觀する必要はない。これこそ却つてエス語の普及を裏書してくれる事實ではなからうか。むしろエスペラント大衆の增加としてよろこぶべきではないか。

第二の原因は我國知識階級の生活が經濟的に逼迫したことであるが之についてのべることは他日にゆづる。

既に前號でのべた如くエスペランチストの水準は年一年と向上しエス文獻は年一年と蓄積されてゆくのである。しかも上に論じた如く一方エスペランチストの數も年一年と增大してゆくのである。我々エスペラント運動の第一線に働くものはエスペラント運動の表面だけの地味さのみを見て悲觀する必要がない。又最後の勝利のおそきをなげきあせつてはならぬ。孜々として健實な一步一步の步みをつづけてゆくべきである。(J. O.)

# 來年の萬國教育會議には エスペラントを用ひたい

永田秀次郎(談)

時: 昭和十一年一月卅一日午前 六——八 時

所: 北陸線廻り上野行急行列車(雪のため遲延)二等車室にて

Intervjuinto: 矢島英男(東京鐵道エス會委員——北陸公務出張の歸途)

ああこれが國際觀光局からでたエス語書きの日本案內か。こういつた立派なものがドシドシ出なければいかん。印刷も仲々立派だ。が何だねエスペラント版の案內記はやはりここに

「Esperanto」と入れてをいた方が良いね。それの方がよくわかつてよい。

——この間矢島は日本案内"Japanujo"の反響について國際觀光局の供覽書類(本誌前號所載のもの)を示し且その他について話す——

成程こうでなくてはいかんよ。

皆エスペラントに反對する者はこんなことは知らんのだよ。ところで來年は萬國敎育會議が東京に開かれるのでわしもかねがね考へてゐるのだが是非一つエスペラントを會議の用語に入れたいと思つてゐるのぢや。それには賛成者がよけいなくてはこまるが皆に話してゐるのだがどうも外交官は賛成してくれん。今のところは敎育會議の使用語は英語と佛語に内定してゐるが何とかしてエスペラントを入れるようにせねばいかんと思ふ。折角日本で開く國際會議だからぜひエスペラントを入れる決議をしたいと思ふ。

——この間矢島は汎太平洋佛敎靑年會大會に於てもエス語が準公用語になつたことを話す——

わしの主張するようにこれからの國際會議は言葉のメートル法を使用せんけりやいかん。言葉のメートル法を主張するのには日本が一番よい地位をしめてゐるから先づ手始めとして日本で開く國際會議に主張してゆきたいと思ふ。わしが言葉のメートル法を說いても近頃の外交官はよい返事をせんのぢやよ。そこへゆくと故新渡戶博士はえらい。博士は國際會議は勿論、中等學校でエスペラントを入れることを考へて居られた。新渡戶博士の話ではもし中等學校でエスペラントを採用すれば外國語の重壓から生徒を解放してやることができる。一年からエスペラントを敎へて三年から英語を敎へることにするとその結果は一年から英語を敎へるよりも實力がつくと云ふ。あの數ケ國語に通じた博士でさへ外國語はむづかしくて分らないというのだから我々に判る筈がない。

會議等であの人は英語が上手だとほめられるのは實は御世辭で我々が丁度日本語を喋る外國人の日本語をきいてうまいとほめるのと同じだ。どうしても肝心のところがうまく出來ない。

來年の敎育會議は八月二日から一週間といふことになつてゐる。

——この間矢島は來年日本エス大會が東京で開かれることを話し且エス語發表 50 週年であることを話す——

來年は東京にエスペラント大會があるのか、それは猶更好都合だ。

敎育會議に參加するものはアメリカ、支那、ニユージーランド、オーストラリヤを始め數百人と豫想されて居る。參加勸誘の招待狀には是非英語と同文でエスペラントを使ひたいと思ふ。それから會議に使ふパンフレット案内や議事錄等にもエスペラントを使ひたい。此の機會に日本を紹介する案内記でも出せれば良い日本の宣傳が出來ると思ふ。

それからこの會議には全國の小學校長にも出席してもらはうと思つてゐるのでその招待狀にも同文のエス譯を入れて出したいものだ。

會議にエスペラントを入れる様に皆に說いてもおいそれとは共鳴してくれない。中にはまだエス語を思想問題とむすびつけたりする人もあるが實に笑止だよ。

メートル法採用の際にもこんなことを云つて反對した人があつた。メートル法はフランス革命の遺物だから絶對に反對だといつてね。アツハツハハ。エスペラントを思想問題に關聯させるのはメートル法が佛蘭西革命の遺物だといふ類だよ。これからはエスペラント卽ち言葉のメートル法採用の時代だ。英語やフランス語のできるものがエス語に反對するのだ。

とにかく日本でも觀光局で案内記を出すとか國際會議の用語はエスペラントでなければなら

ないと言ふことになれば一般の認識も高まり學習する者のはげみともなる。

——矢島は話はつきないが東京も近くなり氏の朝御飯の邪魔を大分したので汽車が浦和驛をすぎたところで引下ることにした。(文責記者にあり)

# エス運動は中央地方の相互認識から

原　田　三　馬

昨秋學會評議員久保貞次郎君が九州地方に中央と地方との聯絡のため地方運動の情勢視察を兼ね旅行された事は啻に沈滯勝なる中央及地方の運動に一服の刺激劑を與へた事となり我國エス運動史上に特記さるべきものだつたと信ずる。それに喜ばしい事は之を契機として各地方にエス運動への拍車と學會を支持せよの聲が勃然と頭を擡げた事である。

九州地方の同志諸君が特使を圍んで我國エス運動の動向と學會の現情に就いてより以上の認識を深められた事であろうし、それにも增して東京の同志諸君が地方に於て並々ならぬ情熱的苦鬪を續けられる涙ぐましい地方同志の活動の有樣に就いて深い同情と感謝と且將來への新しい運動動向のヒントを摑み得た事は二重の收穫であろう。

私は以前北海道の帶廣に住つてゐて同地のエス會の爲に働き昨春上京以來現在中央の一員として働いてゐるのであるが何かしら新しい興奮にかり立てられ久保君の報告に對し聊か屋上屋を架するの嫌ひもあるが今東京に來て昔地方にあつた時考へてゐた認識不足を是正し目下地方に働いてゐられる方々の參考にもと思つて禿筆をかした次第である。

此の文を書くに當つて豫め規則立つた問題に從つた譯ではなく只槪括的なありふれた中央と地方の nuancoj のちがひに觸れながら最近の感想を其の儘報告するに止めたい。

近年エス運動の沈滯の原因が那邊にあるかと云ふことを一槪に指摘する事は不可能である。勿論現時の社會的時流も大いに影響を持つてゐるだらうし又經濟生活も重大なる原因と考へられようが私は中央地方の相互認識の不足が沈滯の一因であると斷定したい。卽ち中央の地方に對する、地方の中央に對する認識の不足である。例へば地方の會員は學會に問合せをしても十分な返事をえられないとか講師派遣の便宜を計つてもらへないとか宣傳に力を入れぬとかを愚痴を云ふし中央は中央で會員が增加しなければ赤字の補塡も出來ないし機關誌の頁數の增加もすることはできないし講師派遣など勿論出來ないと口癖の樣に云ふ。こういふと如何にも啀合つてゐる樣であるが之もすべては認識の不足からくる氣持の相違で之が今度の特使派遣以來相互的に大いに認識を深めた事は我々同志諸君と共に眞に慶賀に堪えないと思ふ。

之は最近の話であるが地方の或同志から學會へ寄せられた手紙に「最近講習會を開いたがそれについて色々お世話下さつた方々にお禮をしたいと思ふが何分自分の今の狀態では出來ないので學會から適當な本でもこれらの人々に寄贈して貰えないだろうか」と書いてあつたとの事。なるほど話は至極結構なことである。しかし之は實に蟲のよい話で其の實本人は學會の會員でもなく學會の財的狀態など少しも御存じなく至極のんきな申出といふべきで寧ろ滑稽の感さへする。然しこの申出を考へ、靜かに私の步み來つた過去をふりかへつてみるならば昔の自分の認識もこういつた程度から離れるとも遠くない程度ぢやなかつたか。そして又この考へが地方會に働く一般同志諸君のそれともあまり懸け離れてゐないのではないかと考へてくる時私は思

はず慄然たらざるを得ない。全くそれは笑ひ事でも洒落でもないのである。學會の現狀はと云ふに僅か三人の事務の方々が朝から夜の十時頃迄自分の全生活を投げ出して全くそれこそ文字通り積極的に働いてゐる事など地方會の諸君はあまり知らない。我國エス運動の全責任を荷ひ海外との連絡、雜誌の發行、圖書の出版、それにこう云つた地方會の無鐵砲式注文に對する應待、講習會、それ大會と五人や六人で出來ない山積された事務の眞只中に働いて居られるので十分同情と敬意を拂つて戴きたいと思ふ。

そう云つた中に今度の久保君の九州地方の視察となり新しい然し當然來るべき問題を我々の眼前に提出したのである。邊鄙な地方會にゐては中央の同志に接する機會は全くないと云つてもよいほとで私は帶廣に於て 1932 年から 1935 年迄の三年の間に面接した東京の同志は塚田貞雄氏田中覺太郎氏の僅かに二名であつた。

年に一度位は學會で特使を派遣して貰ひ度いと云ふ事は地方會にとつては熱望以上の緊急事で特使一人が如何に地方の運動を刺激し活潑ならしむかは想像以上であると思ふ。現に久保特使を迎えた九州の或る地方會ではこれを機會に例會を始めようと決心されたと報ぜられてゐるではないか。他面學會にしても思ひは同じで年々僅か千名位の會員を目前にしては決して太平樂で居た譯ではないので其の原因が那邊にあるか、地方情勢の推移を見極める爲に是非共特使を派遣したいと云ふ事は實は地方會以上の希望であつたと私は今にして思ふのである。

如何にせん財政的に貧弱なる現在の狀態でどうしてこの希望が達成されよう。君に忠ならんとすれば親に孝ならずで地方會の不平も希望も只だ机上に眺めるのみで手の下し樣のなかつた今迄の有樣を今一度地方會の諸君は十分同情の眼を以て諒とせられたいと思ふ。こう云つた狀態の只中に奮然起つて私財を投じ學會特使の一役を買つて出た我々の最も尊敬する同志久保貞次郎君に我々同志は全く感謝の言葉もない。

普及宣傳といふことがどんなに金がかかるか一例を示せば代議士候補者にエス語に對する贊否の問合せを出すことにしても候補者一人當り、郵税のみで最低 4 錢 5 厘（1 錢 5 厘切手を返信ハガキに貼布し封書で發送）はかかる。だから候補者九百名に對しては郵税だけで總額四十圓を超過するのである。

一方學會の普通會費は 2 圓 40 錢であるから月額にして 20 錢である。しかるに機關誌の印刷費と發送費（郵税のみ）だけで每月一人當り 12-13 錢はかかるそうである。だから殘額は一人當り每月 7-8 錢である。千人の會員として七、八十圓にすぎない。これだけですべての事務費をまかなつてゆかねばならぬ。としたら上の候補者への問合せ代四十圓は學會の世帶にとつて如何に大金であるかがわかろう。しかも四十圓ではすまない。手紙の印刷費も封筒代も筆耕代もかかるのであるからまづ六十圓はかかろう。（この間學會でやつたのは幸ひ地方會の方々で負擔していただいから一部分だけ支辨することとなつたのでたすかつたが）。

學會がこういつた宣傳的の仕事を每月一回宛するとしたならば立ち所に經濟的にゆきつまることはこの一例でもわかろう。まして地方でエス語講習につくしてくれた人々へ書物を進呈することなどできよう筈はない。久保氏の如き篤志家なくしては學會から費用をだして特使派遣などは思ひもよらぬことだ。學會は金持から寄附金をもらつてやつてゐる慈善事業團體ではない。我々會員が零細な會費を醵出してどうにか維持してゐる團體なのだ。學會から少しでもせびりとろうといふ考へは天に唾する樣なものだ。

それで學會の現在の經濟狀態を以てしては宣傳普及といふことは不可能であるのでこの學會の手のとどかぬ方面をたすけるため久保氏が口火をきつて全國的に發起人をつのり『エスペラ

ント運動後援會』が生れることになつて我が運動の陣營に一抹の明さを增したことは嬉しい。

今年初頭學會がよびかけた機關誌增頁のための新會員增加運動に對して既に百四十名を突破する新會員を紹介されたことは地方會同志諸君の熱烈なる學會を支持せよの意氣を如實に物語る證左でありこれこそ相互認識の歩みよりでなくて何であろうか。

こういつた地方の同志の熱心な支持はやがて本年第二の巨彈エス運動後援會をして豫期以上の好成績を收めしめるであろう。

金澤の由比氏が本誌前號でエス運動は人の和をもつてせなければならぬといはれた。全くである。人の和は深い相互認識によつてのみ達せられる。

# 特使に托された九州各地方會の希望とそれに對するお答へ

學會事務部

久保特使九州訪問の際各地方會で申出でられた希望條項については久保特使より學會理事評議員合同會の席上開陳及説明された。その條項中あるものはすぐ實施され或物は追々實行にうつすことになり又或物は將來考慮することになつた。尤も一方の申出と他方の申出と相反するものも相當あつて之等は個人的意見の相違とみるより外仕方がないのもあつた。

右希望事項は、

1. R. O. 及び「エスペラント」誌の編輯について 20 個。 2. 出版事業に關して 12 個。 3. 會員のこと 6 個。 4. 財政上のこと 3 個。 5. 宣傳上のこと 15 個。 6. 組織について 3 個。 7. 地方會について 5 個。 8. 學會の事務上の事について 7 個で

合計 71 箇條であつた。

こゝに之等の全部についてのべないが大體一般的意見と考へられるものその他を示して（便宜數箇條を一箇條にまとめてのせることあり）且之に對する學會の事務擔當者としての簡單な御返事を申上げることにする。

1. R. O. 及 E. L. の編輯上の希望。

a. 「英語科問題」のパンフレツトがベタ組ではよみづらい。R. O. も同樣。（小倉）

もつともな意見です。併し行間を粗くしては紙數が多くなつて費用が嵩みます。R. O. 一册(32 頁)分の內容は九ポイント活字で組めば四六版で九十頁位の分量があるのです。それを 32 頁へ追ひこんだのですから無理です。R. O. は前月號から少しく行間をあらくしてよみやすくしてみました。

b. R. O. は親しみが少い。會員の聲等をのせること。（小倉）

之迄編輯者個人の色彩をなくすることに努力したのです。それで親しみのないものになりました。今後は編輯後記等を入れませう。會員の聲や質疑欄はあまり投書が來ないのでのせませんが來ればのせます。

c. R. O. を全部內地報導化せよ。（福岡）

これは一般會員 希望に反してゐます。これについてはいつかくわしくかきます。

ĉ. R. O. から內地報導を除くこと。(長崎)

c と全く反對の意見。どちらも急進的。

d. R. O. へは昔の如く讀物を入れよ。(長崎、大牟田)

こゝで云ふ讀物とはエス文の記事のことと思ふ。昔も今もかはりなくエス文讀物を入れてゐます。昔は讀物が面白かつたといふのは主觀的の考へ方によるのだと思ひます。これについては本誌前號 38-39 頁をごらん下さい。

e. 會員といふ意識よりも R. O. の讀者としての意識が大。(大牟田)

f. 「何故エス語をやるか」とか「如何にしてエス運動をするか」といふ原稿をのせよ。(大牟田)

g. R. O. の記事の水準を高くせよ。(大牟田)

ĝ. R. O. の記事はあの程度でよろし。(久留米)

h. Esperantologio の記事は R. O. へのせぬこと。(大牟田)

ĥ. 宣傳用パンフレツトを R. O. の中へはさむこと。(大牟田)

御申出は結構ですが——それだけ費用が嵩みますし且パンフレツト類を R. O. へはさむことは右印刷代の外に郵便料がかさみます。(R. O. は約束郵便で送料一錢の割です。パンフレツトを入れると送料は二錢になります。この爲月に十圓年に百二十圓送料がよけい入要)。

i. R. O. のエス文はよむ氣がしない。(熊本)

d. とやゝ似通つてゐます。同項參照。

j. R. O. と EL の合併は感心しない。(行橋)

ĵ. R. O. は讀物があつて內地報導もついてゐるといふのが望ましい。(鹿島)

注意:—EL 編輯上の注文はこゝには省く。

2. 出版事業についての希望

a. ザメンホフの著作を日本で復刻せよ。(福岡)

ザメンホフの著作のみならずすべて外國の著作の出版物を日本で復刻することはベルン條約違犯です之をなせば學會が出版法違犯で法律上の罪にとはれます。(もつとも先方の發行所と契約すればできますが先方ではザメンホフのものは一切權利を分讓しません。)

b. 岩波文庫式の廉價版を出すこと。(福岡)

學會發行エス文庫本は岩波文庫をまねたのです。しかしどうしてもあれ以上廉くうることはできません。

c. 讀物を澤山ふやすこと。(熊本)

大いに希望してゐますがヤツパリ賣れ行がわるいのでボツボツしか出せません。

ĉ. 地方の本屋に學會出版物を一通りおくこと。(熊本)

これも結構なことですが第一に費用がかさむ(全國の本屋へ學會出版物各種一部宛置くとしても一軒で原價で十圓位依托することになりますから全國一萬軒の本屋へおくと十萬圓の資本がないとできません)のでできませんが大都市の本屋で地方會指定のものには置いてもよいですが之迄地方の本屋へあづけるといつも金を支拂つてくれないので困ります。日本エス協會の時代に熊本市の某書店でそういつた回收不能のことがありました。學會になつてもちよいちよいそういつたのがありました。

d. 本を地方會に依托し賣ること。(宮崎)

結構ですが會計の方を嚴重にしていたゞきたいと思ひます。之迄本をお借しするといつても

ルーズになりがちであります。(そういつた實例は學會の帳簿には相當記載されてゐます。)

e. 外國書の値段の變動する理由。(宮崎)

外國書は當會で出版所へ交渉して値をきめます。先方で Respondkupono でうけとつてくれるものは Kupono 並になんとか都合しますがそうでないものは様々です。又先方との協定がしばしば變動することがありますので定價が變動します。早く買つた場合に損をするとは限りません。高くうつた時も學會が得をしたのではありません。それだけ先方へ支拂つたのです。

f. 出版物の定價を高くし體裁をよくすること。(別府)

キレイな豪華版をだしたいのですがそれではどうしても賣行がわるいですし學會としては一冊でも餘計に本を買つてもらひたいと思ひますのでツイ安くします。エス書を一二種しか出版しない本屋だと高い本を賣つてもうけねばなりますまいが學會の如く既に數十種も本をだしてゐるとどの本も買つてもらひたいと思ふものですから安くしたくなります。

g. レコードを出すこと。(行橋)

レコードは學會でうつたのでは手數がかゝりしかも地方の人にとつても 送料が高くつくから損です。やはりコロンビヤにうらせる方がどちらも好都合です。

3. 會員關係の事について希望

a. 入會者を R. O. 誌上に掲載のこと。紹介者の名ものせること。(小倉)

今年から實行します。

b. Jarlibro と Adresaro を出すこと。(福岡)、(大牟田)、(宮崎)、(行橋)、(飯塚)、(廣島)。

Jarlibro は出したいですが費用がかゝりますので一年おき位になつてゐます。本年は出します。R. O. を一號やめて出すのですとできますが。

Adresaro は種々の弊害があるといふ意見も多いので理事會で各地方會の意見をきくことに決定。目下意見があつまりつつあります。贊否半してゐます。學會々員外の同志全體の名簿を出すことは理事會で否決されました。

c. 終身會員を增加せしめよ。(久留米)

ĉ. 會員章をつくること。(大牟田)——實現の豫定。

d. 講習終了證書を賣ること。(大牟田)——近々實現。

4. 財政上のこと

a. 寄附をもらふこと。(小倉)、(熊本)

b. 寄附金募集係を金をかけて傭つてもよい。(熊本)

c. 宣傳後援會設立贊成。(長崎)、(大牟田)、(熊本)、(宮崎)。(醵金者に禮狀を出すこと。)

エスペラント運動後援會がいよいよ設立されます。詳細次號發表。 (次號完結)

# 中大路政次郎君のこことも

## 1.

中 野 壽 一

エスペラントが生れて半世紀、全世界のあらゆる土地にエスペラント運動のため闘つて死んだエスペランチストは幾百人もあらう。數年間の闘病生活中にてもエスペラントを使ひ、プロ

パガンドし、エスペラントで譫言し、書き殘された遺書に「エスペラント葬にして下さい」と書いてあつたと云つても特筆すべきことでないかも知れない。が現代のような世相の中にかくエスペラントを樂しみ、宗教し、哲學し、科學し、道德し、藝術した彼の生活の斷章を記し、彼の生活をエスペラントを抽出劑として、その ekstraktaĵo を分析し現代人の生活に問題となるべきものがあるならばとりあげてみるのも決して無駄なことでもなからうと思ふ。然し筆者は人間中大路政治郎を懷しみ、尊敬しながらも思ふ所のものを充分に表現すべく熟してゐないのが殘念である。又彼の死後幾何もない今日嚴密に檢討すべく餘りにも生々しい憶出が多すぎる。ともあれ生活、理想、情熱、健康等が渾然として一致しなかつた彼には、或時は辨證法的と言ふ言葉で何かなしに慰められてゐたことである。エスペラントを明るい情熱の光で照し理智的に抱擁し生活の最も小さなことどもにも密接につながらしてゐた彼は「あらゆる文化運動は時代と共に生きるべきである」と云ひ「エスペラント運動も亦時代の波に乘つてこそ眞の力ある運動となり實を結ぶものである」とよく語つてゐた。

筆者はまだその頃はエスペラントを知らず彼とは面識もなかつたがフランスの同志ペレルがやつて來た時の日記を見るとペレルが彼がサターノであることを知り二階の病室で仰臥してゐる彼と階下からの筆談では物たらなくなりおし上つて來て話したとある。彼ももと大津における中立的エス運動の中心として活躍してゐた。その後病狀の惡化とともに思想的にも轉向して一時サターノになつた。その後時代相の變化とともに彼のエスペラント運動觀も時代の波により全く右廻して國家主義的にと變化したことは「國家主義とエスペラント」なる小論文などにエスペラントが完全に國際語となる一段階として國家主義の正しい發展も必要であるとして、その後に世界語としてのエスペラントの役割があり、エスペランチスモの世界が來るだらうと論じてゐるが此處で詳細に紹介する自由を持たない。「現代の如き國家組織、社會機構では强いものが正しいのである」とよく彼が口にしてゐた。弱者は自然の力を利用する以外にその主張を貫徹することが困難であると云ふ考へからであらう。然し彼の生活態度、社會心は確固不惑のものであつた。他の純情を信じ、自己の純情をも信じ純情と純情との生活が人間最高の幸福であるとしてゐた。事實彼は純情の人であつた。



彼がエスペラントを學び始めた動機については聞き洩してゐるが語學的才能を多分に持つてゐた彼には語學的興味の方がより多く働いたのかも知れないが、ともあれエスペラントは鬪病生活時には死との鬪ひでもあつた彼の生活に於ける生の鞭だつたとも云へる。

彼が何時エスペラントを學び始めたかについては「大津へエス語が入つたのは私の知つてる範圍では二葉亭の世界語獨習が明治の終り頃私の兄の机上に繙かれてゐたのが最初ではなかつたかと思ふ。千布氏の全程が出てふとした機會でこれを手に入れた私がその時兄がすでに他界してゐたし世界語獨習だけでは手のつけようもないので大いに氣を强くして學習を始めたのが大正十年の末頃か十一年の始め頃であつたと思ふ」と滋賀エスペラント運動史を編んでゐる中村卯三氏への序の一節に書いてゐる。

シエラーが來朝した時病床の彼を見舞つた手紙に彼の息子惇君がシエラーと會話したことが書いてある。一九三〇年と云へば九歲の時である。子供の敎育に伸び伸びした方法でやつてゐた彼のことだから無理矢理に詰めこんだとは思はれない。小學校へ入學した頃からエスペラントの集會に出たり日本に來た外國人と彼に敎はつたエスペラントで會話したりして惇君は自然と

エスペランチスモを理解しエスペラントの勉學に興味を持ち、今は京都市立工業學校の二年生であるが暑中休暇などには獨りでエスペラントを勉强してゐる。筆者にも時々エスペラントで手紙をくれる。學課の英語にどんな効果があるか知らないが兎に角全甲の成績である。生來の才能もあるが彼が惇君にエスペラントを敎へるためるの、又敎へたがための科學エスペラント的と云へる勉强法が惇君の學問的才能を伸したのであると筆者は確信してゐる。

「葬式は金がかかるから絶對にやめて自宅で壁にザメはんの額をかけて其下へ骨を置いて中野君に撮してもらつた寫眞を額に入れて立てらかして下さい。式次は一燈園流が一番うれしくエスペラント葬にして下さい。佛エスの有志の方の御經はありがたく誰方もなければ心經朗讀一てんばりで結構。式の順序は山本さんと柴山さんとにあつかましいが御願ひ致したく、エスペーロ と タギーヂヨと心經朗讀とでよろしくやつて下さい。」これは彼の書き殘したものからの抜書きである。エスペラント葬とはどんなものかと問はれたら說明に困るが兎に角同志の手により彼の日頃の宗敎觀などに從つて遺言通りエスペラント葬なるものが行はれたのである。これには賛否こもごもの意見もあつたがとにかく現代の如く職業宗敎家の手で行はれてる葬式の莫大な浪費に對する一つの解決案を提示するものであらう。

彼の死は昨年十二月十三日の午前三時、享年三十三歳、告別式がザメンホフ祭の日であつたことは彼の靈の慰めともなつたことであらう。

エスペラント葬なるものについての報告的なものを書きたいと思つたが限られた紙數をすでに超過した、割愛せねばならないのが殘念である。

## 2. 中村卯三

中大路と私とは竹馬の友である。京阪電車の終點が札の辻であつた當時、其處より狹い道を下つた處が彼の家であつた。私とは幼時より共に學校に通つた。群を抜く頭腦明晰の持主で高等小學に進んで偶々英語教師が休講した際敎師に代つて講義をやつたと云ふ逸話は私達同窓には餘りにも有名である。語學に對する才能が惠まれてゐた。藏書家で有名な兄と淨瑠璃では當地で右に出ずるもののない父親を持つて、幼時惠まれた環境に育れてゐたが向學心故に家を飛び出して東京大阪等轉々として若い日の向學にいそしんだ。當時私も大阪にあつて中ノ島公園のベンチに一夜を明したが、くしきかな、同じ日同じ時刻遠からぬ同じベンチで彼も又ルンペンの一夜を夢みたとは後で大笑ひの種であつた。

想ひ出はつきないが、彼も兄が病死してからは立命館中學に學び卒業後直ちに京都三井銀行に奉職したが、夜間は立命館大學專門部に通學文字通り苦學力行したが、此頃すでに病魔が無理した彼の身に透入つてゐた。彼がエスペラントを學修し初めたのは丁度此頃のことである。私も大正十五年の夏久し振りに彼と想ひ出を語る機會を得て、ふとエス語に對する彼の熱情に動かされて學修を初めたが、當時すでに彼が二三の同志を指導してゐたのを幸ひに、共に大津エスペラント會を創立してエス運動への第一步を踏み出した。

憶へば其の前後十數年の間先覺者として其の圓滿なる人格、溫情溢るばかりの應接と懇切な指導に、事實大津エス界の重鎭であつた。嘗てエス運動華やかなりし頃同地の二百七十有餘の同志はひたすら彼を慕うて常に彼の門を訪れた。話一度エス語に至れば濃いまゆ毛をピリッと動かし病床を蹴て昂奮するといふ熱情の士でもあつた。

昨年六月彼の熱望して止まなかつた縣下エスペランチスト大會を催したが、情抑へ難く病を

おして參加、同志を激勵、其の秋名古屋大會直後、私達大會參加者が偶然彼の病床に相寄つたが之が却て例の昂奮を招き病を重くしたやうな氣がした。その後再びたたず。

彼は死の直前までエス語を語りエス運動に想ひをはせ遺書もエス語で一杯であつたことと、エスペラント葬のこと等は中野君の書かれたものでよんでいただきたい。

最後に憶ひ起せば昨年の縣下エス大會を機に大津エス運動史を編纂し、未だ其の刊行の運びに至らぬ今、心殘りであらう。其の輝やかしい彼の足跡を公表することを誓ひ、彼への手向けとしたい。

# 動詞 FARI の用法

## （2）

K. Ossaka.

§2 (b). „**Fari**"=formi 形成する

Kiel jam antaŭe menciite, „Fari" estas uzata kiel sinonimo de „formi":

La maro **faris** (=formis) tie ĉi malgrandan golfeton. (FK 43/-13)

海は入江になつてゐた。

En la sono *aŭ* la *a* kaj la *ŭ* devas esti aŭdataj klare ĉiu aparte, sed ili **faras** unu silabon. (LR 12/-4)

aŭ なる音は a と ŭ とは別々に明瞭にひびかせる、但し兩者は一綴になる。

Tio ĉi estas sole amo kaj dankemo, kvankam tiuj ĉi **faris parton de** tio ĉi. (BV 42/24) 是は結局愛と感謝である、尤も愛も感謝も是の一部を成すに過ぎぬのであるが。

§2 (c). „Tiom kaj tiom **faras** tiom"=formi, konsistigi. いくつといくつでいくつになる:

Kvin kaj sep faras (=formas) dek du. 五に七足すと十二 (F 41/22)

Sesdek minutoj **faras** (=konsistigas) unu horon, kaj unu minuto konsistas (=estas farata) el sesdek sekundoj. 六十分は一時間となり、一分は六十秒より成る (F 41/-9)

Mil jaroj **faras** miljaron. (FK 3/-8) 千年は一 miljaro を成す。

*Rimarko*: Laŭ „Fundamento": „jarmilon" (F 45/5)

Du botoj **faras** paron. (P 618) 靴は二つで一足になる（人も男女二人で一と夫婦、夫婦は一體の意の諺）

§2 (d). „Fari *ion* el *io*" en figura (precipe abstrakta) senco.

La konkreta senco de „fari *iun objekton* el *iu materialo*"（物を造る）, ekz.:

Oni intencis **fari** oron **el** plumbo=*turni* (aŭ *ŝanĝi*) plumbon *en* oro*n*. 鉛から金を造る=鉛を轉じて（變じて）金となす。

nun transiras al la figura senco abstrakta（何を何となす）:—

**Faru** feliĉon **el** la malfeliĉo=Turnu (ŝanĝu) la malfeliĉon en feliĉon. 禍を轉じて福を作れ。

*Rim.* „Fari" en tiu ĉi senco, kiam uzata rilate personon, signifas: „formi (aŭ konsistigi) personecon"（人物を作りあげる）。

La leĝo **faris** limakan iron el tio, kio devis fariĝi flugo de aglo. (Rt 17/2)
本來ならば荒鷲の快翔ともなるべき(颯爽たる)ものを法律など云ふものは之を變化(へんげ)さして蝸牛の歩み(のぐづ)にして了ふのだ。

Mi el nenio **faras** ĉagrenon. (F II 189/24)
私は何事にもくよくよせぬ。

**Fari** el muŝo elefanton. (P 1063) 針小棒大(蠅を象ほどに云ふ)。

Al mi donu la plezuregon, ke mi **faru** el li kaĉon! (Rt 70/21) 私に彼を膾にさせて(=粥にさせて、めちやくちやにたたき殺させて) 下さい(する快味を味はせてくれ)。

Enpuŝu la spadon al mi de malantaŭe en la ventron, por ke ne venu tiuj buboj kaj ne **faru** el mi objekton de sia mokado. (Rt 133/-2)
あの荒くれ共がやつて來ておれを物笑ひの種にせぬ樣、後ろからその劍をおれの腹に突きさしてくれ。

Kaj ofte la edzoj, per sia bruego, **faras** el si tion, kio ili estas. (GD 22/16) 夫などと云ふものはいたづらにわめき立て結局自業自得の身(現在ある如きもの)になり下るのですわ。

Mi estas pli feliĉa ol vi. La homo, kiun mi amis, ne **faris** el mi objekton. 私は貴女よりも幸福です。私が愛してゐたお方(亡夫)は私を物品化しなどなさらなかつたのですわ。(M 181/3)

Viro, eĉ plej bona, kutimigas spiriton sian al la krueleco, kaj fine li eĉ leĝon al si **faras** el tio, kion mem li abomenas. (IT 40/17)
男と云ふものはどんな善良な男でも吾が心を殘忍さに慣らしてしまひ、自らは嫌惡してゐる樣な事をば自らの掟にして了ふもの。

Nur la dubo malbonon povas **fari** el la bono. (IT 99/-4) 善から惡を作り出すのは疑心より外にない。

Sed la forto de la beleco pli **faros** el la virto malĉaston, ol la forto de la virto egaligos al si la belecon. (H 77/12) 節操の力が美をおのれの位まで引き上げるのより、美の力が節操を不德に化する方がたやすいのだ。

Sendube via gloramo **faras** por vi el Danujo malliberejon; ĝi estas tro malvasta por via spirito. (H 58/-6) あなた樣の高名心を以てしてはあなた樣に取つてデンマルクは獄舍も同然(手足をのばせぬ); デンマルクなどはとてま狹くてあなた樣の氣魄を容るるに足りますまい。

Tiuj homoj **faras** al si kvazaŭ profesion kaj okupon el admirado de virinoj, admirado platona, kie oni alie ne povis, adminirado ne platona ĉie kie oni povas. (M 186/-2)
此の人達は婦人を嘆美すること、但し止むを得ざる場合は精神的な嘆美、出來さへすればいつも肉慾 に嘆美することをまるで職務かなりはひと心得てゐる。

El la leĝo ĝi **faras** senenhavan vortparadon. (H 104) (神の)御掟をばたわいもない言葉の羅列と化して了ふ。

Okazo **faras** ŝteliston (P 309) 機會は盜人を作(りあげ)る。

Ni scias tre bone, ke la homaranismo ne **faros** el la homoj anĝelon (OV 336/-10; ankaŭ vidu: 370/-9) 何も人類人主義だとて人間を天使に化するものではない事は心得てゐる。

Ĉiuj ĉi tiuj belaj brilaj virtoj **faras** el li ian varmegan amikon por amiko. (Rt 8/17) 此等の美德により此の男はいづれ人の友として熱烈な友たる人となることであらう。

La intuicio, tiu alta kaj malofta naturdono, kiu el homo **faras** duondion, leviĝis el la profundo de la spirito de la juna virino. (M 147/-7) 人間を半神ともなすあの高く稀な天與である直觀が此の婦人の心の奥底から浮び上つて來たのである。

Kapuĉo monaĥon ne **faras**. (P 368) 僧帽を被つたとて僧にはならぬ。

La sorto kredeble volas **fari** el mi grandan homon, ĉar ĝi metas al mi sur la vojo tiom da malhelpoj. (Rt 20/8) 運命は恐くはおれを大偉人に仕立てるつもと見える、吾輩の行路にこう苦難を與へる處を見ると。

Vi estas majstra parolisto, Spiegelberg, se oni bezonas el honesta homo **fari** kanajlon. (Rt 25/-9) 正直者を惡漢に仕立て上げると云ふことなら貴樣中々の辯口達者だ。

Fantomon **faros** mi el ĉiu, kiu kuraĝos min reteni! For! (H 31/10) おれを止めだてする者は何人でもお陀佛にしてくれるわ。どいてくれえ。

Tio estis sufiĉa por la fiera kaj riĉa sinjorino, ke ŝi bonvolu eduki la orfinon en sia domo kaj **fari** el ŝi poste obeulinon aŭ fraŭlinon por kompanio. (M 169/2) ただこれだけの事でも此の氣位の高い富有な夫人にとつては孤兒を引き取つて敎育しそしてあとになつて此の娘を自分の吾儘を通す傀儡、お相手に仕立て上けやうと云ふ思召を起してやるだけの事ではあつたのである。

# Batalo de l' Vivo を讀んで

KAWASAKI-N.

氣のついたことを述べる. Z. の譯したドイツ語譯わ誰のだかしらないが, Seybt 譯 Der Kampf des Lebens (Reclam 960) と Chapman and Hall 版のイギリス語原本とを對照する.

(12 jan. 1936)

## 1. Vestoj

p. 5 Multaj insektoj, kiuj havis sian delikatan koloron de senkulpaj folioj kaj vestoj, en tiu tago nove koloriĝis de mortantaj homoj kaj...

Vestoj とわなにか? (着物) でわなんだが意味がよく通じない. G でわ Kleidern, A でわ herbs. Sanders-Wülfing の辭書にわ der Erde junges Kleid とゆう例があがつている, herbs の意味であろう. Z. わ G を直譯して vestoj としたので, 意味わ(地の衣)すなわち (草) である. (12 jan. 1936)

## 2. Spur

p. 5 Multaj insektoj, ..., lasis per sia rapidega forkuro nenaturan postesignon.

p. 5 ...en la enbataĵoj de piedoj de homoj kaj hufoj de ĉevaloj...

p. 6 postesignoj de tiu batalo

p. 6 postesigno de la batalo

p. 7 postesignojn de la malnova batalo

以上の postesigno(j) と enbataĵoj わ G でわ Spur. 最近わ spuro を人と動物の足跡に使いだしてきた. Figura senco わまだ盛んにわ使われてわいないようだ. batalo の場合わ postesigno のほうがはつきりする. 車のわだちにも Spur わ使われるが, Esp. でわこれにわ用いる人がないようだ. A にわ spoor なる語があるが, Dickens わ使つていない. Spuro なる語根がいつ誰によつて始めて使われたのか, 私にわ調べる材料がないが, 辭典にあらわれたあとをたどつてみよう. Wüster, Z.-Radikaro にあがつていないところをみると, Z. わ使つたことがないのであろう. Boirac, Plena Vortaro にわ spuro を kokosprono の意味でこれが Scienca Revuo にでたことを示している. Verax, Enciklopedia Vortareto, 1910 に signoj, lasitaj poste de homo aŭ de animalo tie, kie ĝi pasis とあるのが始めであろうか? Millidge, EA, Grosjean-Maupin, EF, FE および Grabowski, E Pol, 1916 には採用しない. 新語好きの Long, AE, 1921 にある. ついででた G の辭書達にわ全部載つている, すなわち Bennemann, EG, 1923; Christaller, GE, 1923; Loy, GE, 1923; Minor, EG, 1924; Bennemann, GE, 1926; Degen u. Kötz, GE, 1926 にである. 1931 に大改訂新版のでた Edinburgh, Pocket EAAE わ堅實な立場での progresema なものだが, それについにはいりこんだ. Tellini, E Itala, 1931 と Sutkovoj, ER にあるが, 同じ 1931 の Granda Vortaro RE の след にわ spuro の譯語がない. 新し味をみせびらかす Kalocsay k. Waringhien, Parnasa Gvidlibro, 1932 にわ poezia fakvorto と遠慮してかかげられてあるが, 老大先輩の近著 Nylén, E Sveda にわちやんとおさまつている. すなわち 1920 の以後新にでた各國の辭書にわほとんど spuro がある。だからこそかの博學の Butler わその Plena Vortaro, dua eld., 1934 に對する詳細な recenzo, British Esperantisto, jun., jul., 1935 において spuro のないことに驚いている. 日本でわ Bennemann, EG の體裁を賞賛した岡本, EJ, 1926 にあつて, 岡本, JE, 1935 の足跡, 痕跡にわ portsigno, piedsigno だけ. Long, AE の語根を多く採用された千布, JE, 1924 にわ普通あまり用いられないとのしるしつきで載つている. 石黒, EJ, 1933 にあり. 有島武郎原作, 東宮譯, Senbedaŭre Amo Rabas, p. 77 に En la momento, kiam la postulo de sin-kompletigo erare direktiĝas al kompletigo de parto de si mem, la vojo al sin-kompletigo senspure detruiĝas. 東宮わ G がお得意であつたので spurlos を思い浮べられたのであらう. Christaller, GE にわ spurlos senspure とあり, Bennemann GE にわ spurlos nelasante postsignon ŝi malaperis となつている. (16 jan. 1936)

# Plena Gramatiko 紹介

岡　本　好　次

Kalocsay, Waringhien 兩氏共著の Plena Gramatiko を數回に亘りその要約をここで紹介する。同書各項についての批判は脚註の貌ですることにして同書の本文の要約を主體とする。

## I. Fonetiko

1. **音と文字** (Sonoj kaj literoj):— エス語の母音は a e i o u の 5, 子音は b c ĉ d f g ĝ h ĥ j ĵ k l m n p r s ŝ t v z の 22。この外に半母音 ŭ がある。(これは u を短く發音したもの)。一母音は音節を形成する。(ŭ は例外)。

〔理論的には四種の半母音がある。即ち i 或は u が母音の後にきて、その母音と一音節をなす時。(homoj の j, baldaŭ の ŭ の音) 次は i 或は u が母音の前へ來てその母音と一音節をなす時 (これは普通のエス語にない)。〕*

2. **アクセント** (Akcento):— 最後から二番目の音節にある。故に一音節の語は akcento がないが特に意味をつよめる場合アクントを置く。(例 Mi parolas ne al **vi**, sed al **ŝi**.)

3. **音節** (Silaboj):— 音節を分けると次の二種になる。

1. 長音節 (longaj silaboj) {a. 長母音を含む音節 / b. 一個以上の子音が母音に從ふ音節}

2. 短音節 (mallongaj silaboj) — 短い母音のみをふくむ音節又は短母音に一個の子音が從ふ音節

4. **母音の長さ** (Longeco de vokaloj):— アクセントの有無によつて母音の長短がきまる。といつてもアクセントと母音の長さとを混同してはならぬ。長母音と短母音の差違は大きくない、併しよく感じられる。エス語の發音の基本的原則はアクセントのある音節は一般にアクセントのない音節よりも長く發音するのである。だから母音の後に子音群のない音節に於ては母音を長く發音する。又一方重要でない語に於てはアクセントがあつても別に長く發音する必要を感じない。

もう一つのエスペラントの發音の規則は二つのアクセントが隣り合つて存在しないことである。だから合成語に於ては flakelemento のアクセントは消滅する。もつともそのアクセントのあつた部分の母音が長く發音されてその痕をとどめることはありうる。(長母音を示すため母音の次へ ː をおく。ː がなければ短母音とする。)

よつて次の樣な規則が云へよう。

1. アクセントのある音節は一般に長い。

a) もし母音の次に一個以上の子音が附隨するときはそれだけで音節は長くなるから母音自身は短いままである。(例: granda, sendi, tondro, trunko; laŭdo, poŭpo)

b) もし母音の直後に母音がくるか一個の子音が來る時は母音を長く發音する。(例 aːmi, peːti, fiːno, koːro, kuːri)

注意 I. もし母音の次にくる二個の子音がある時その第二番目の子音が流音 (likvido) r 又 l である時はその母音の發音は一様でない。その時は母音を長くする事もあれば短くする事もある。(patro と paːtro, kadro と kaːdro, febro と feːbro, ebla と eːbla)

注意 II. afrikato dz の前の母音は短く發音する (edzo, adzo)。何となればそれは二つの子音と感ずるからである。同樣に ĝ, c の前の母音を短く發音するのをよくきく (reĝo, kaĝo; beleco, peco)。尤も ĉ は一個の子音として感じられる (kaːĉo, meːĉo)。しかし afrikato は一個の音故すべての afrikato の前の母音は長く發音すべきである。**

注意 III. 語尾 o の省略は母音の長さに影響しない。(aːm', beːl', deziːr', koːr', murmuːr')。

---

*) エス語に於て母音の前へ來た j, ŭ と後へきた j, ŭ とは質がちがつてゐて前者は純然たる子音であり後者は母音のごく短いものであるが本質的には母音と子音との區別といふものも不十分であるからエス語ではむしろ母音とは音節を形成するもの子音とは音節を形成せぬものと定義し j, ŭ は子音としその母音の前後による差違は varieco と考へればよい。

**) dz を afrikato c の濁音と考へることはよくないと思ふ。(之について子音の項でのべる)。又エス語では c, ĉ, ĝ はすべて一個の子音と考へるべき故 reĝo, kaĝo; peco 等は reːĝo, kaːĝo, peːco と發音する方がよいと思ふ。

2. 代名詞、數詞、前置詞、相關詞は最後から二番目の母音も長くない。尤もアクセントはある。(例: ili, oni, mia, via, ilia, unu, dua, tria, sesa, preter, apud, super, kiu, tio, ia, ĉies, kiam, tiom, ie, ĉial, nenial, nenio.)

注意 IV. この類推から kria, fia の如く二音節語でアクセントのある i を短く發音する傾向がある。又興味のあるのは deka, sesa は短く kva:ra, mi:la は長く發音されてゐることである。

3. 一音節語 (jam, tuj, ĵus, nun, tre, de, sen, per, mem, tri, kvar, pli, plej) は短い母音をもつ。又特に意味を强めない限りアクセントがない。意味をつよめるため單音節語にアクセントをおく時は ho:, ve:, do: と長くなる。

注意 V. 一音節語も語尾をとるとアクセントをとる。その長さについては定則がない。(例: jama と ja:ma, troa と tro:a)。長い方がよいと思ふ。

注意 VI. 韻文では脚韻をふんだ語の母音は長い。

4. 二つのアクセントが隣接して在在しない。語の合成の際二つのアクセントが並ぶ時は前のものが消滅し又はその前の音節へ移轉することもある。そのアクセントの消滅した母音の長さについては次の規則による。

a) 第二の elemento が sufikso 又は sufiksoido ならば前の語根の母音は短くなる。(例: ama:ta, dome:to, bati:ta, banu:jo)

b) 第二の elemento が眞の語根であればアクセントの消滅した母音の長さは合成の習慣に從ふ。常に慣れた合成に於ては母音は短い。その前に母音があればそれが副アクセント(斜體で示す)をうける。(*a*lilo:ke, ĉ*i*eli:ro, m*i*liti:ro, v*a*porŝi:po, verdi:re, verŝajne)。あまり慣れておらぬ合成に於てはその合成語の意味をハッキリ示すためにその母音を長くする。もつともアクセントはない。(ko:rba:to, fe:rĉe:no, o:rĉe:no, vi:rvesto, pu:trando, a:mvi:vo)

c) 第一の elemento のアクセントのある母音の直後に第二の elemento のアクセントのある母音が來ない時はそれは名詞的の機能を發揮してもとの長さを保つ (m*i*li:tprepa:ro, v*a*po:rbane:jo, ŝ*i*:p-asoci:o)。併しその elemento が名詞的の機能を示さぬ時は母音は短い。(b*o*neduke:co, f*a*cilani:ma, b*e*laspekta)。*

5. **母音の廣狹** (Vasteco de vokaloj):— a i u 三母音に廣狹の區別のある言語が少いからエス語に於ても區別する必要がない。故にエス語に於ては a i u 三母音には長短のみを論じ廣狹は問題でない。

併し e と o に於ては廣狹を區別できる。狹い o と廣い o のちがひは廣い o と a とのちがひほど大きい。次に狹い e を é で廣い e を è で狹い o を ó で廣い o を ô で示す。

この四種の母音についてはエス語に於ては之迄屢々論議された。ザメンホフはこれらの音を廣狹にわけずにその中間の廣さで發音せよとすすめた。併しこの konsilo は實際上應用できない。といふのはこういつた中間の廣さの母音が大抵の國語にないからである。

Ĉefeĉ は之について次の三つの規則をたてた。

1. 母音は獨立に發音する時は狹く長くなる。
2. 閉音節 (母音で終る音節) の母音は狹く發音される。

---

*) こういつた區別は必要がないと思ふ。

3. 閉音節（子音で終る音節）の母音は廣く發音される。

Wüster はエスペラントに è（短）、éː（長）、ò（短）óː（長）を區別し èː（長）、é（短）、òː（長）、ó（短）の音はないと云ふ。而してアクセントのある開音節は長く（éː, óː）閉音節は短い（è, ò）といふ。ところでこの音節の開閉といふことであるがこれは silabado（音節の切り方）の問題であるが母音の後の一子音は次の音節へゆくからそれは開音節であるし（pé-ti, kó-ro）母音の後に澤山の子音がある時は少くとも一つの子音がのこるから閉音節となる（dèks-tra, mòns-tro）。

上の Wüster の意見は一般の發音の習慣に近い。併し我々はエス語には Wüster の示した è, éː, ò, óː の四つの外に èː と òː があると考へる。（即ち 6種）

而して我々はこれらの音の區別については次の規則が最も適當と思ふ。

1. アクセントのない音節では è（短）、ò（短）（例 sènprètènda, bònanima, kè, dè, pòr, fòr）

注意 I. これらの母音は短いから目立たぬ故 é（短）、ó（短）と發音してもかまはぬ。

注意 II. Ho と ve は長いから狹い。（hóː, véː）

2. アクセントのある音節で一個以下の子音（開音節）が次に來る場合は常に狹い長母音を用ひよ。（pːéːti, déːvas, bóːna, sóːla）

3. アクセントのある音節で一個以上の子音（閉音節）が次に來る場合は常に廣い短母音を用ひよ。（sèndi, vèsto, mònstro, pòrdo）

4. 合成語における flankelemento の元アクセントのあつた音節は廣い長母音を用ひよ（libèːrtempo, fèːrĉéːno, òːrĉéːno, kòːrbaːto）

これらの規則に反した發音があるが之等は民族差や個人差によるものであつて上の規則が一般性のあるものと考へる。*

之を要するに「アクセントのない音節についてはさほど意を用ひずともよく、アクセントのある母音に終る音節ではその母音を長く狹く發音し、子音又は半母音で終るアクセントのある音節の母音は短く廣く發音すること。語尾の發音を明瞭にすること」等である。

6. 子音 (Konsonantoj):— 子音を分類表解すると**

| | 脣音 (labialoj) | 舌音 (dentaloj) | 齒齦音 (gingivaloj) | 硬口蓋音 (palataloj) | 軟口蓋音 (velaroj) | 喉頭音 (laringalo) |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 破發音 (plozivoj) | p, b | t, d | —, — | —, — | k, g | —, — |
| 摩擦音 (frikativoj) | f, v | s, z | ŝ, ĵ | —, j | ĥ, — | h, — |
| 破裂摩擦音 (afrikatoj) | —, — | c, dz | ĉ, ĝ | —, — | —, — | —, — |
| 鼻音 (nazaloj) | —, m | —, n | —, — | —, nj | —, n | —, — |
| 流音 (likvidoj) | —, — | —, {r, l} | —, — | —, — | —, — | —, — |

上の表の一對づつの二音中右が有聲音左が無聲音である。—はそれに對する音がエス語に存在せぬことを示す。

*) o, e 兩母音の廣狹は日本語に於ては區別しない。もつとも實際には種々の varieco があつて新潟や東北の i の如きや江戸っ子のエの如き大分ちがつたものもあるが一般にはザメンホフの云ふ中間的の廣さの音であるようだ。だからこれらの規則は日本人には無關係である。

**) dz を c の濁音の如く發音することは理論的にはよくないと思ふ。c の音も t と s との音が渾然と一つになつた音であつて c=t+s ではない。だから citsigno を cicigno と發音しては誤りである。それと同樣に dz も c の濁音に發音するのは理論的にはよくない。併

し實際上 edzo を ed-zo と發音せずに eːdzo（但しここの dz は c の濁音とす）と發音してもやむをえないが。同様に硬口蓋音の nj（發音記號：ɲ）も軟口蓋音 n（發音記號：ŋ）も實際上許容される音で理論的には nj は n+j で二音であるべきであり n は舌音の n でなければならない。ĥ の音は理論的には發音記號の x であるが i e 等の音の前へきた時は ç（これは j の無聲音）の音で發音されるのが普通である。

# Jane Eyre の戀

## エスペラント譯泰西文學鑑賞・1

萬澤まき子

エスペラントに移し植えられた泰西文學は數多い。それら數多い作品の中から世間であまりしられてゐないしかも内容もよく且 ampleksa な作品をよりぬいてその梗概を紹介してもらひたいといふ編輯部の御依頼をうけた。

まつ先に頭に浮んだのは四六倍判五百頁といふ尨大な "Jane Eyre"（ジェン・エア）である。

"Jane Eyre" は美しくはないが聰明にして誠實な女 Jane Eyre の一生をえがいたものである。高潔な心と正しい信念とそれを貫き通す勇氣を持つた女性の物語である。出來る限り短められたこの skizo の中に充分盛ることは出來なかつたが、特殊な性格やはつきりした個性の鮮やかな描寫、着實な筆致巧みな會話等、大衆文學の中の優れたものであらうと思ふ。

原作者 Charlotte Brontë は 1816 年に生れ 1855 年に死んだが、その短い生涯に英國の優れた女流作家として輝かしい文名をはせた。"Jane Eyre" は彼女の處女作で 31 歳の時の作品である。後、各國語に翻譯され、又劇化されて上演された。

譯者 Bulthuis はエス飜譯界一方の雄で大作のエス譯を幾つも發表してゐる。猶 Idoj de Orfeo, Vila Mano 等の原作もある。彼は 1927 年にこの Jane Eyre の第一章第二章に對して英國エス協會の散文文學飜譯賞を授けられてゐる。彼は卷頭に於てこの優れた女性の物語を三十年間彼のエスペラントの仕事を助けてくれた彼の妻に捧げてゐる。

*　　*　　*

私の幼い日——それは暗い苦々しい思ひ出の連續である。私がもすこし綺麗で可愛いかつたら……と私は幼い頃屢々思つた。瘦つぽちの醜い子供だつたので兩親のない私を誰も愛してくれなかつた。孤兒になつた私を引取つて實子以上に愛してくれた伯父がなくなつてからは廣い Gateshead の邸の中にしみじみと孤獨を味ひつつ、迫害にいぢけて細々と成長した。然しその小さな存在すらも伯母にとつては煩はしいものであり、實子同様に面倒を見よといふ亡父の遺言は限りない心の負擔であつた。

遂に私は 10 歳の時、冷たい併し住みなれた邸から遠く離れた孤兒の學校に追はれた。其處にも冷たい不潔な孤兒達の生活があつたが、私はそれを宏壯な Gateshead の邸の生活より百倍も樂しく思つた。私は其處で初めて愛されることを知り愛する事を知つた。私は熱心に勉強した。その人達の愛と信頼を裏切らない爲に。

8 年の月日が流れて、私は旣にその學校の教師であつた。併し私の愛する人達を次々と學校から失つてから、私は私の知らない別な世界を求め始めた。餘りにも靜かな、人生から切り離された世界。其處には私の欲する何者もない。私はもつと激しい波浪の中で人生と鬪ひたいと思つた。

新聞廣告で得た家庭教師の口がうまく運んで、10 月のある日、私は 8 年間の淋しい學問の巣を出て見知らぬ社會への第一歩を踏み出した。それは私が 18 歳の時。

美しい山水に圍まれた Thornfield と呼ばれる宏壯な邸宅には老家政婦の S-ino Fairfax と小さな少女 Adéle とが保姆や召使達と靜かに生活してゐた。私は Adéle の家庭教師として呼ばれたのである。S-ino Fairfax は善良なやさしい老人であつた。Adéle は平凡ではあるが素直な子供ですぐに私を愛し始めたし、召使達も皆氣立がよかつた。私がこの靜かな家を自分の家庭の如く愛し始めたことは勿論である。主人の S-ro Rochester に就いては私は多くを知らなかつた。見たこともなかつた。何故なら彼は年中旅行を續けてこの邸に居なかつたから。少女 Adéle の經歴に就いて誰も知らなかつた。人々が知つてゐるのは S-ro Rochester がフランスから連れて來て世話をしてゐるといふ事だけであつた。彼女は英語が話せず、私が行くまではフランス人の保姆とたつた二人きりで毎日を送つてゐたのである。この氣持ちのいい人達の中にたつた一人私の心を曇らせる者が居た。Grace Poole といふお針女がそれである。私は彼女が四階の自分の部屋で悪魔の様な笑聲をたるのを聞いたことがことがある。それは私の心の底まで凍らせる樣であつた。

一月のある夕暮。私は散歩がてら Hay まで手紙を投函しに邸を出た。美しい夕暮であつた路傍の石に腰を下してうつとりと眺め入つてゐる私の前を突然夕方の通魔の樣に駈けぬけな黒い影があつた。それは私から少し離れた處で激しい音をたてて倒れた。馬が道の氷に滑つたのだ投げだされた騎手は足の痛みに顏を顰めながら立上つた。鷲の樣な精悍な顏をした肩幅の廣い中脊の男であつた。歳は 35 歳位かと思はれた。私は無愛想な男がニベもなく私の申出を拒むのを押返して、彼が再び馬に乘るのを手傳つてやつた。そして別れた。

手紙を投函して歸ると邸は常に似ず明るかつた。何時も暗く閉ぢられてゐる部屋々々に明々と灯がともつてゐた。主人の S-ro Rochester が突然歸宅したといふ。そして私はその人が先刻道であつた馬上の男だといふことを知つた。私の胸にも灯がともつた。私は微かな期待に胸を躍らせたのである。

然し彼は怪我の爲に早く床についてその夜は遂に姿を見せなかつた。次の日も一日中忙しそうであつたがやつと夜のお茶の時間に彼は私を客間によんだ。無愛想な沈默の後私は彼の射る樣な視線を浴びて鋭い質問の數々に答へねばならなかつか。廣い額、鷲の鼻、輝いた眼、迫つた太い眉その險しい怒つた樣な面差の中には勿論美はなかつたが何かしら人に迫る强さがあつた。

それから暫くの間は彼と話す機會はなかつた。彼は毎日忙しうであつた。

或る夜、私は再び彼の前によばれて彼の鋭い會話の相手をした。私も私の氣性をさらけ出して怯めず臆せず云ひたいだけを云つた。それはこの傲岸な主人を少なからず樂しませた樣であつた。その間に私は誰も知らない彼の過去が、殊に Adéle の母に關する思ひ出が樂しいものでないことを察することが出來た。そして後日私はその詳細を知る機會を持つた。山毛欅の並木路へ私を散歩にさそつて彼は誰にももらしたことのない過去の一頁を私に語つた。如何に彼がフランスのダンサー Céline を熱愛しそして裏切られたかといふことを。彼の手に殘された Adéle を彼は自分の子供だと信じても居ず、罪惡の幹に咲いたこの花を愛しても居ない。併し彼の善良な心は母に棄てられた娘を悲慘の中に放置することが出來なかつたのだ。

その夜私は床の中で彼の物語を繰返し考へてみた。物語は何等特殊なものではなかつたが、私はその中に彼の良さを發見した。運命の打撃が彼に與へた表面的な粗野や無愛想の底に生來

の良さがひそんでゐる。しかも彼の不屈な氣性と私の強い性格の中には多分に相通ずるものがあつた。私は私の心が急激に彼に傾いて行くのを感じた。假睡んだかと思ふと急に私は恐怖に打たれて眼をさました。私の枕元に何時かの悪魔の様な笑聲と足音を聞いたのである。急いで廊下へ出てみた。廊下は S-ro Rochester の寢室から出て來る煙で一杯だつた。私は彼の部屋へとびこんだ。寢臺の垂幕が焔をあげてゐる中で彼は眠つてゐる。私はその部屋と私の部屋の水鉢の水を全部彼の上に浴せかけた火は間もなく消え S-ro Rochester は驚いて眼をさました。私の說明を聞いてから彼は三階へ調べに行き蒼ざめて歸つて來た。陰謀の主は Grace Poole に違ひないと私は主張した。彼もそれを肯定したが何故か彼はこの出來事を誰にも口外しないことを私に約束させた。命の恩人だと感謝し、私の手を自分の手から離さない S-ro Rochester から逃れて私は自分の室へ歸つたが、私の心は搖れに搖れて一目も眠らずに夜明を待つた。

翌朝、水びたりになつた彼の寢室を掃除してゐる人々の中にカーテンを縫つてゐる Grace Poole の冷靜な顏をみた。私の鋭い探索の言葉に眉も動かさぬ女。私は彼女と S-ro Rochester の關係に疑惑を持ち始めた。彼は自分の命を狙つた女を責めもせず法にも問はないのだ。私はそれに彼を問ひ正したいと思つてその日中彼を待つたが、夕方になつて彼がその朝早く旅に出たことを知つた。そして彼が多分訪れたであらうと思はれる才色優れた男爵令孃 Ingram の存在を始めて知つた。昨日から急速に彼へ傾きかけてゐた私の心は、それだけの强さで元の位置に跳ね返つた。身分高いすばらしい女性と貧しい醜い家庭敎師。その比較は寧ろ滑稽にすら思はれる。私はその夜床の中で彼への關心の全部を捨てることを固く心に誓つた。

二週間目に私達は S-ro Rochester が三日後に歸宅するといふ報せを受取り、三日目にはその地方の社交界の人々と、その召使達の大人數な一團を伴つて彼は歸宅した。勿論その中には F-ino Ingram も居たし、彼女と S-ro Rochester とがこの社交團の花形であつた。私に關係のない賑やかな日が續いた。S-ro Rochester の希望で私は每夕眼もまばゆい大廣間の片隅で紳士淑女達の遊戯を默つて見守らねばならなかつた。何故それを S-ro Rochester が希望したか私にはわからなかつた。噂の通り、又私が想像した通り、F-ino Ingram は狩獵の女神 Diano の様な女性であつた。堂々たる體軀、誇りに滿ちた顏。併しその思ひ上つた態度は敎養の深さにも似ず精神的なものの貧しさを私に感じさせた。誰の目にも軈ての結婚を豫想させる様な彼女と S-ro Rochester の振舞ひそれは私の心を悲しませた。私の酬ひられない愛の爲ではなく、私の愛する彼の爲に彼女が優れた女性であれば私は心から彼の爲に喜んだに違ひない。併し彼女は私の嫉妬にも値しない女である。二人の間には愛情のかけらすらなく單に政略の爲の結婚であるらしいことが私を限りなく悲しませたのである。

賑やかな日々の中の或る日、印度から Mason といふ男が訪れた。彼の來訪が S-ro Rochester に快くないらしいことを見て私はこの男の出現に興味を持つた。その夜私は再び恐しい叫聲と物音に眠りを破られた。斷末魔の聲。それが私の上の部屋から聞えて來る。突然の物音に邸内は沸き返る様な騒ぎになつた。S-ro Rochester は立騒ぐ客達を極力靜めて寢室に追込み、邸内が元の靜けさに返つてから秘かに私の扉を叩いた。彼に伴はれてはいつた四階の一室に血みどろになつて橫たはつてゐる Mason をみて私は失心しそうになつた。S-ro Rochester は私に彼の看護を委ねて自ら醫師をよびに秘かに邸をぬけ出た。刻々に衰へて行く怪我人の溢れ出る血を拭き取りながら灯もない室に恐怖と解き難い謎とに苦しめられつつ彼の足音を待ち侘びた。醫師が來、手當がすんで、怪我人が人知れず運び出された時恐怖の一夜が明けて淸々しい朝が來た。果樹園で朝の空氣を吸ひながら彼は私の助力に感謝を述べた。私は恐るべき Grace

Poole に對する彼の處置を非難したが彼はそれに氣もとめなかつた。併し私は彼がもらした言葉の中に彼の過去の過失が今尙彼を苦しめてゐることを知つた。

一週間に亙つて私を苦しめた夢の豫感が適中して私は S-ino Reed 危篤の報せを受取つた。彼女が私の名を呼び續けてゐるといふ。永い間憎しみ續けて來た伯母ではあるがその最後の聲を聞くべく、主人に一週間の暇をもらつて五月一日の午後、思ひ出多い Gateshead に到着した。私の期待や希望に反して伯母は遂に私と仲直りもせず冷たい心のまま眼をつぶつた。私が彼女の口から聞き得たことは私の亡き父の弟が印度で成功してその財產の相續者として私の所在を探し求めてゐるといふことだけであつた。

S-ro Rochester の邸を出てから一ケ月目、私は躍る胸を抱いて Thornfield に歸り着いた。世界中で一番なつかしい處。それはやはり Thornfield であつた。併しそこに私は何時まで留まるであらうか？ S-ro Rochester の結婚の前に Adéle は學校にあづけられ、私は愛する總ての人々と別れて知らない家庭に生活のたづきを求めなければならない。S-ino Fairfax のやさしい歡迎。小さな Adéle の狂氣の樣な喜び、そして S-ro Rochester の溫い言葉。私はこの幸福に別れる日の出來るだけ晚いことを心に祈つた。

噂に反して結婚の用意も行はれず靜かな日々が過ぎた。婚約が破れたにしては餘りに晴々と樂しげな S-ro Rochester の姿をながめつつ秘かな希望と歎きの交錯した複雜な感情と共に彼に對する愛が一層深まるのを感じた。

六月も半ばのある夕。庭の果樹園の散步の途中私は S-ro Rochester に出逢つた。美しい月の出であつた。木蔭のベンチで彼は自分の結婚に就いて語り、私の爲に新たな職をアイルランドに求めてあるといふ。私の恐れてゐた日が思ひがけなく早く來た。海をへだてた遠いアイルランド其處へ行けば愛するこの人と何時また相見る日があるだらう？私は溢れ出る涙と感情を制することが出來なくなつて激しく吃逆り上げ始めた。彼は私を見つめてそんなに此處から離れるのが辛いかと尋ねた。永い間壓へ壓へて來た私の熱情は一時に爆發した。生れて初めて知つた溫い家庭と誰よりも良く自分を理解してくれた彼から遠く去ることがどんなに辛いか、私はそれを告白した。彼は素早い接吻を私の唇に與へて、何處にも行かず一生涯自分の傍に居で欲しいと私に私語いた。F-ino Ingram など彼にとつて何者でもない。貧しい小さなそれでゐて不思議な魅力を持つ Jane を彼は最初の瞬間からどんなに愛してゐるかといふことを。私はそれを信ずることが出來なかつた。併し月明りは彼の顏に描かれてゐる眞摯な願ひと、熱情とを照し出してゐる。遂に私は感謝と共に彼の申出と彼の心とを受入れた。もう夜半に近かつた月明りが消えて激しい嵐が來た。私達は家へかけこんで夫々の寢室に引とつた。絕望の淵から突然投り上げられた幸福の雲の中で私は靜かな眠りに入つた。永い間の孤獨と不幸から解放された樂しい將來を思ひながら。併し幸福はまだ私のものではなかつた。（次號完結）

---

# 新　刊　紹　介
## BIBLIOGRAFIO

Senditajn po 2 nirecenzas
Unuope ricevitaj estas nur menciataj

◎ 目下現品を取寄中のもの
■ 將來取寄せる見込のもの
▲ 目下學會に在庫あるもの
★ 取次がぬもの及び非賣品

### 文　學

◎ **MAKSIMOJ**, La Rochefoucauld, trad. G. Waringhien, eld. Librairée Félix Alcan, Paris, 1935; 14×22 cm. p. 111, prezo 15 fr. f.

フランス新進の反譯家ヴァレンギエンの譯になるフランス文學の古典、ラロシュフーコーの《語錄》。フランス、ラテン、ギリシアの古典に正確なエスペラント譯おつけて出す新しい叢書の第1册(これにつずいて、ボシューの《演說》(Bastien 譯)、ソフォクレス《エディポ王》(Warienghien 譯) などが出る)。

ラロシュフーコー大公フランスワ 4 世わ 17 世紀中ごろのフランスの貴族。長短 500 餘の maksimo のうちに、利益わ人間の唯一の目的であり、エゴイスモわ人間の唯一の行動の原因だとする哲學お盛りこんだもの。フランス文人のタレントおあくまで發揮して、人間の利己主義に短いが鋭い諷刺の槍お突きさしているなかにわ、300 年ものちのわれわれにも痛いものがある。近ごろもてはやされているモンテーヌなんどの先驅である。

譯文わ的確、重要な esprimo わ索引にまとめられており、對譯書としてわ、まず至れりつくせりの用意が施してある。(Oŝima)

---

Plena Vortaro 以外の radiko わ一つも使わない、ただ orgojlo のみ、malhumilo でわ pasiva な氣分になるからとて。Indekso de la francismoj kaj arkaismoj ありて、例: **Constance** を場合によりて konstanteco と rutino で譯してあることを示してあるのも F esp. 兩語の意味の相違、種々の nuancoj を說いた譯者の良心的なものであり、また譯者わこれによつて譯者の尊敬する Grosjean-Maupin の名著 F-esp. 辭典の suplemento の一部分ともしたいとゆう。日本の飜譯者たちも眞似てよいことだ。なお二例: **inperceptible (-ment)**: apenaŭ rimarkebla, nevidebla, nesenteble, senkonscie; **médiocre**: mezvalora, forteta, mezgranda, ordinaruloj, mezaj. 前者わ neperceptebla とゆうこともできるが、F ほど fleksebla でなく、Esp. 文としてわ上記のごとき表現のほうが klara で落ちつく、また後者にわ一語でこの觀念をあらわすのが Esp. にわない。 (KAWASAKI-N.)

### 宗　教

■ **KVIN PAROLADOJ**, de Henry Drummond, trad. de Arthur T. Maling, eld. de F. H. Hanbury, 132, Slewins Lane, Hornchurch, Romford, Anglujo, 1935; 14×22 cm., 85 p. prezo 2 ŝilingoj, afranko 2 p.

著者は、1851 年スコトランド生れ。はじめグラスゴオで、自然科學の講演家であつたが、後

に神學教授となつた。本書におさめたものは、「靈界における自然法則」とともに、最も廣く知られてゐる La plej granda afero en la mondo をはじめ、Pax Vobiscum, La ŝanĝita vivo, La progrmo de kristanismo, La urbo sen preĝejo. の五篇。いづれも宗教講演錄である。La plej granda afero en la mondo では、「愛」を最高のものとし、La urbo sen preĝejo では、今日のキリスト教徒の重大な任務が、「よき都會」を作りあげることであると言つてゐるなど、きはめて「お說教」風のものであるが、Pax Vobiscum で、この世におこることはすべて偶然のものでない、宗教界のことでも何事もすべて法則に支配されてゐると言つて說いてゐる條はかなりおもしろい。結局は因果應報の說ではあるが、宗教上のそれに、自然法則を適用してゐる。譯はてがたいエス文であるが、印刷がかなりまづいので讀みづらい。 (Miŝo)

## 學　習

M ◎ **FACILAJ ESPERANTAJ LEGAĴOJ**, de Prof. G. Waringhien, eld. de Esperantista Centra Librejo, Parizo, 1935; 11.5×17 cm., 94 p.; Prezo 5 fr. fr. 一卷を二部にわけ、第一部をさらに Ni rakontu, Nun, ni kantu!, Nun, ni instruiĝu! の三つにわけてゐる。Ni rakontu には、多數の笑話やコントを、短いのから、次第に長いのをといふ風におさめ、Nun, ni kantu! には、Por infanoj, Por pli grandaj infanoj, Por tre grandaj infanoj にわけて、童謠と詩歌がおさめてある。Nun, ni instruiĝu! には、長いのや短いのやいろいろな種類の讀物があつめてある。第二部は、ザメンホフ、カーベ、その他の人々の隸譯の拔萃からなりたつてゐる。

大體に、やさしいものから、むづかしいものへうつつてゆくよう按配されてゐる。選擇ぶりもまづ穩かで、古いの、新しいの、いろいろな顏ぶれから選び出したなどもよい。中等程度の講習會、輪講會の材料としてよく、學習かたがたの讀物としても手ごろのもの。 (Miŝo)

---

短い讀物集。始めわなるほど facilaj anekdotoj だが、最後わ Z. のもつとも malfacila な Rabistoj, Revizoro などの fragmentoj だ。編者の註、とくに arkaismo, germanismo を警告したものがある。我等の I. U. の Verda Parnaso から Tagiĝo, Antikva Ĥina Popolkanto, Japanaj Kvaroj が採用せられているのがうれしい。 (KAWASAKI-N.)

M ■ **GVIDLIBRO POR LA EKZAMENOJ DE SFPE** (kolekto de Franca Esp.-Instituto 3) kompilita de Prof. G. Waringhien, eld. de Franca Esp.-Instituto, Pario. 1935. 12×17½ cm. 64 p.

フランスの esperantistoj の受ける Atesto pri Lernado, Atesto pri Kapableco の試驗の問題の標準、採點法などをこの會の prez. が實例で示したもの。Lernado の Esp. 文佛譯問題わ Heroldo その他の雜誌からとつたものが多く、Kapableco の Esp. 文佛譯問題わ Zamenhof, Kabe, Kalocsay などからで、佛文 Esp. 譯わ Dorgetes, Montesquéeu, Renan, Romains, Flaubert... などからである。作文、文法、會話などの問題もある。單語の問題の例 Lernado: dogano, trudo, recepto, freŝa, tavolo, stebi, mato, ŝarĝi, fuŝi, bildo. Kapableco: akselo, didelfo, grumbli, varti, juro, lekcio, rismo, ulmo, citro, punca. Kapableco の F→E, E→F の問題の下にそれに參考になる Plena Gramatiko (彼と Kalocsay 共編) の paragrafoj が註されてある。 (KWASAKI-N.)

# Sinmortigo laŭ la modo.

TABATA-Kisaku

Kiam vi foliumas japanajn literaturaĵojn en Edo-epoko, vi ofte trovas la verkojn, kiuj temas pri la duopa sinmortigo de geamantoj. Tiu ĉi ŝajnas unika formo de sinmortigo nur en Japanujo kaj oni povas almenaŭ diri ke ĝi faris prosperon nur en Japanujo kiel man-en-mana promenado en la okcidenta mondo!

En tiu tempo oni konis tre simplajn metodojn por nuligi sian vivon; ekzemple: sinpendigo, sindronigo, harakiro, kaj aplikado de venenoj, k.t.p.

La du unuaj metodoj estis favorataj de ĝenerala subtenado de japanoj kaj la sekvanta estis precipe flanke de l' samurajoklaso, sed la aplikantoj de venenoj estis malmultaj, ĉar oni havis malmulte da kono rilate al venenoj.

La devenon de harakiro vi trovas remante supren kontraŭ la fluo laŭlonge de l' historio. Hogen-Monogatari rakontas al ni ke Minamoto-Tametomo kun sia dorso ĉe la pilastro tranĉis al si la ventron per glavo kaj trovinte sin nemortinta, li plie tranĉis la spinon kaj falis senviva. Ŝajnas ke de tiu tempo (12-a jarcento) samurajoj enkondukis tiun metodon en la praktikan uzadon por montri al la publiko sian kuraĝon okaze de l' morto.

Poste la ŝtataj aŭtoritatoj aplikis ĝin kontraŭ la mortkondamnitoj el la samurajoj pro la honoro de ties klaso. Tiu ĉi moro daŭris tion longe ĝis la feŭdalisma tempo mallevis sian lastan kurtenon.

Rilate al la venenoj, kiuj sin trovas en la literaturaĵoj de Edo-periodo, mi havas respondecon uzi kelke da vortoj. Vi ofte renkontas en ili frazon: — Kantarido en matena teo, ĉejnveneno* en vespera vino —

Kaj vi certe scivolemas, kion tio signifas. La frazo montras la metodojn, per kiuj oni venenas la malamikojn. Kantarido estas speco de insektoj kaj similas al lampiro laŭaspekte.

Oni traktas ĝin kiel unu el la fortaj medikamentoj kaj enmetas en la farmakopeon en kelkaj landoj.

Oni utiligas ĝin en la formo de tinkturo por harkreskigilo kaj laŭ la famo ĝi estas afrodiziako.

Mi konas unu maljunulon, kiu dozis al si la tinkturon erare anstataŭ tonikon. Li konfesis ál mi kun amara rideto ke ĝia tiel nomata famo trompis lin.

Ĉejnveneno tenas sian ekziston nur en la literaturo. Legendo instruas al ni ke ĝi estas veneno el ĉejno, venera birdo, kiu vivas en la suda parto de Ĉinujo. Tiu ĉi birdo similas al falko en sia formo kaj tenas en si tiel potencan venenon ke eĉ la venena

---

* *Ĉejno estas nomo de venena birdo laŭ ĉina legendo. La radiko "ĉejn" enkondukita de J. Okamoto en Novan Jap.-Esp. Vortaron.*

serpento tuj fandiĝas en la buŝo de tiu birdo. Arboj mortas, apenaŭ ĝi nestas sur ili. Homoj mortas antaŭ ol ili erare manĝas ĝian karnon.

Ĉejnveneno estas preparata, trempante la plumon de l' birdo en la vinon.

Nenia medikamento povas kuraci la veneniton krom la pulvorigita korno de rinocero, kiu estas sola antidoto kontraŭ la veneno.

Mi miras ke la fantazio de Oriento naskas tiun interesan venenon, same kiel Ŝekspiro en Okcidento priskribas pri fortega veneno:

Venenon tian, kia tre rapide
Trakuras tuj la tutan korpon
Kaj kvazaŭ acidaĵo en la lakto.
Momente malbonigas en la korpo
La tutan puran sangon, mi pereis
Kaj lepro mian tutan glatan korpon
Tuj kovris per abomeninda ŝelo.

La ideo de ĉejnveneno ne estas la japana propra sed devenis de Ĉinujo. Ĉinujo — la lando de literoj — etendiĝas, kaŝante en si la misteron de Oriento.

Mi rememoras tiurilate ke en tiu lando regas superstiĉo ke oni mortos se oni englutos pecon da oro. Mi ne scias, ĉu la arĝentnorman monsistemon prenis Ĉinujo pro la timo de l' oro.

Partoprenas ankaŭ aliaj venenoj en la japanaj noveloj kaj dramoj, inter kiuj la plej familiara por ni estas Iŭamiginzan-Nezumitori (ratmortigilo el la minejo en Iŭami) kiun oni nun konas kiel kombinaĵon de arseno.

Oni povas aserti sen granda eraro ke la supre menciitaj metodaj estas la tuto, kiun konis malnovaj japanoj.

Edo-epokon sekvas Meiĵi-epoko, kiun ekbaptis eŭropa civilizacio, dank' al kio Japanujo faris grandan salton en sia historio.

Laŭ la statistiko, la nombro de l' sinmortigintoj depost tiu epoko montras la tendencon plimultiĝi kaj en la procento nia lando sidas la 4-a aŭ 5-a tra la mondo.

Mi ne scias, ĉu bedaŭri, aŭ ne bedaŭri, se sinmortigo estas la unika fenomeno, kiu distingas la homaron de la aliaj animaloj. Cetere la nombro de sinmortigo en civilizita lando estas pli granda ol tiu en malpli civilizita lando kaj en unu lando ju pli evoluiĝas la civilizacio, des pli multiĝas la nombro.

Inter primitivaj gentoj, kiuj vivas ekstere de civilizacio oni apenaŭ trovas la fenomenon de sinmortigo, kaj se neceso urĝas, ili prenas primitivajn metodojn, kiujn ili heredis de l' antaŭuloj, ekzemple: Ainoj utiligas akoniton, konata sagoveneno kontraŭ urso.

Sed estas kia memkontraŭeco ke homoj finas sian vivon per tranĉilo, pafilo, medikomento k.c., kiujn ili faris por plifeliĉigi sian vivon!

En Meiĵi-epoko unuan fojon sin prezentas sur la scenejo sublimato, fenolo, krezolo, sulfaracido, kloracido, hipermanganata kalio, k.t.p. instigitaj de l' progresado de l' industrio. Fervojaj reloj komencis malfermi sian pordon por mortaspirantoj.

Alta konstruaĵo de ĉiovendejo allogas la volontulojn ke ili desaltu de la balkono. Kiu povis imagi en antikva tempo ke oni povas morti nur kun gastubo en la buŝo.

Estas ja tiuj kiuj mortas laŭ primitivaj manieroj; unu prenas la lokon en la fundo de vulkano, alia sin ĵetas en la akvon kaj la tria uzas tranĉilon. Sed en ĝenerala konsidero la metodoj fariĝas pli kaj pli rafinitaj laŭlonge de l' evoluiĝo de scienco.

En Taiŝo-epoko malpliiĝas la aplikantoj de ĥemiaj materialoj kaj ilin anstataŭas la aplikantoj de nova ilo nomata *Nekoirazu*, ratmortigilo enhavanta flavan fosforon. Por la sama celo oni uzas en eksterlandoj la pinton de alumeto, kiu same enhavas flavan fosforon.

Lastatempe dormigiloj ŝajnas esti pli laŭmoda.

*Veronal* fariĝis fama depost la morto de R. Akutagaŭa, unu el la eminentaj verkisto en nia lando.

*Adalin* ne estas fabrikata por sinmortigontoj, sed ĝi havas klientaron inter ili. *Kalmotin* estas vaste konata tiel ke oni kunigas la ideon kun sinmortigo per ĝia nomo.

Foje junulo vizitis min, kiam mi laboris en iu apoteko. Li volis aĉeti Kalmotinon.

— Kiom da tabloidoj mi prenu por dormi profunde? — Li min demandis.

— Kvar aŭ kvin, sinjoro. — Mi respondis.

— Kio okazus al mi, se mi prenus la tuton?

— Nenio okazos, — mi daŭrigis — krom tio ke vi trovos morgaŭ matene ke vi dormis preter la horo.

— Kiom oni devas preni, se oni volas morti?

— Tiom multe kiom via stomako rifuzos per vomado.

Mi admonas al karaj legantoj ke vi prenu la tabloidon nur en la okazo kiam vi bezonas ŝajnigi intencon de sinmortigo, ĉar ili modeste restos nedigestitaj en via stomako. Ĝenerale la problemo de dozo estas malfacila.

Cianata kalio estis ne tre familiara por japanoj ĝis nun, kaj tamen en Eŭropo ĝi havis multe da adorantoj.

La statistiko en Vieno, Aŭstrujo, montras ke en la daŭro de 1869 ĝis 1878 la veneno estis preferita de 44.4 % de sinmortigintoj.

Se oni prenus ĝin, oni tuj eksentas malfacilan spiradon kaj kelkajn minutojn poste oni mortas sufokita.

Ciana gaso funkcias pli magie. Estas ne tre longe kiam iu fama farmaciisto en Germanujo estis trovita senviva en la eksperimentejo. Lia morto ankoraŭ restas enigma, ĉu ĝi estas memvola aŭ neatendita. Mi aŭdis foje ke en certa provinco de Usono oni aplikas la ciangasan metodon por la mortkondamnitoj anstataŭ la elektran, ĉar la lasta donas furiozan impulson al la viktimoj, kies vizaĝoj postmorte montras ne tre agrablan mienon. Ciankombinaĵo efikos centprocente, sed ĝia apliko estas ne oportuna; la ŝtata aŭtoritato severe limigas ĝian vendiĝon.

Resume oni ne trovas idealan metodon en la vera signifo, kvankam la metodo ĉiam iras sur evolua vojo.

Ĉi tie mi rimarkigas al vi interesan fenomenon ke la sindronigintoj senescepte evitas malvarman sezonon, ĉar la akvo estas malvarma kaj ke ili ĉiam preferas belan kaj puran riveron ol la malbelan.

Vi scias ke tiuj kiuj sin ĵetis en la mezon de l' kratero de Monto Mihara kaj trovinte sin nemortinta furioze kriadis por peti la helpon. Oni kun pravo diras ke komedio kaj tragedio estas bonaj najbaroj.

Morto ŝajnas ne tre agrabla. Sinpendigo estas primitiva kaj ne estas etiketaj Revolvero estas doloriga kaj ne estas facile por akiri ĝin.

Por tuŝi la alttensian elektrofadenon vi devas riski la danĝeron grimpi la foston. Fervojaj reloj ne plaĉas al vi, se vi trovas eventuale la mortinton, kies kadavro estas frakasita en mil pecetojn.

Estas feliĉe por la homaro ke la instinkto detenas lin de ruiniĝo.

Se oni povus facile morti, kiu do kuraĝus resti sur la tero, subpremite de severa vento trablovanta tra la tuta mondo?

# TAKETORI-MONOGATARI

(竹 取 物 語)

(5)

Aŭtoro nekonata
Eljapanigis Masami IGARAŜI

## VI. La gemo ĉe la kapo de drako.

La Dainagono (Granda Konsilanto) Ootomo-no-Mijuki kolektigis ĉiujn virojn en sia domo kaj diris al ili: —

"Oni diras, ke kuŝas gemo kvinkolore brilanta ĉe la kapo de drako; kaj al tiu, kiu prenos ĝin por mi, mi plenumos rekompence, kion ajn li deziras."

La servantoj aŭskultis lin kaj murmuris inter si: —

"Respektindaj estas la vortoj de via moŝto, sed ĉar la gemo estas ne facile trovebla, kiel ni povos akiri ĝin de la kapo de drako?"

La dainagono daŭrigis: —

"Se vi konscias vin kiel la servantojn de via mastro, vi ĉiuj devas obei kaj peni laŭ ordonoj de via mastro, eĉ se viaj vivoj perdiĝus pro tio. Se la juvelo estus trovebla nur en Tenĵiku aŭ Morokoŝi, ekskluzive nian landon; tamen la drako flugas supren de la montoj kaj malsupren en la maron apud nia lando. Do, kial vi pensas tion malfacila?"

Ili diris: —

"Nun nenio helpas nin. Ni ekiros por akiri ĝin laŭ via ordono, kvankam tio estas malfacila."

La dainagono rigardis ilin kun rido kaj parolis: —

" Vi ne malhonoru la nomon de via mastro, forlasante vian ĵuron al la ordono."

Kaj li sendis ilin por preni la gemon ĉe la kapo de drako; li donis al ili plej multe da silko, kotono kaj mono, kiujn li rezervis en sia palaco, por aĉeti la manĝaĵojn per ili dum la volaĝo.

Li promesis al ili ĉe la ekveturo: —

" Mi vivos en abstinado, atendante vian revenon. Sed ne revenu sen la gemo."

Ĉiu el ili ekvojaĝis laŭ lia ordono. Kaj ĉar li diris ke ili ne devos reveni sen la gemo ĉe la kapo de drako, el ili ĉiu volis iri laŭplaĉe kien ajn li deziris, riproĉante la mastron pro tia scivolemo. Tial ili dividis inter si la donaĵon, kaj iuj retiris sin en siajn domojn, dum aliaj iris tien, kien ili volis. Oni devas obei al sia mastro aŭ siaj gepatroj, tamen la servantoj kalumniis unu post alia la dainagonon pro lia kaprica postulo, ĉar la afero iris ĉe ili tre malbone.

Dume, la dainagono pensis: —

" Ordinara domo ne plaĉos al Kaguja-hime kiel ŝia loĝejo, pro malbeleco."

Tial li nove konstruis belegan palacon, kiun li ornamis per lako kaj ordesegnaĵoj. Sur la tegmento oni metis tegaĵojn el kolorfadenoj, kaj en ĉiu ĉambro estis pendigita neesprimeble bela brokatoteksaĵo, sur kiu oni pentris bildojn. Kaj firme kredante ke li certe povos edziĝi al Kaguja-hime, li forpelis ĉiujn virinojn por sia mastrumado kaj li sola pasigis tagojn kaj noktojn.

Kompreneble, malgraŭ lia senpacienca atendado ĉiutaga kaj ĉiunokta, la senditoj donis al li neniun raporton, kaj pasis la jaro. Fine, jam teda en atendado, li sekvigis nur du el siaj vasaloj kaj inkognite veturis al Naniŭa kun tre laca mieno. Tie li demandis al ŝipanoj: —

" Ĉu vi ne aŭdis, ke la homoj senditaj de Dainagono Ootomo veturis ŝipe kaj mortigis drakon kaj prenis la gemon ĉe ĝia kapo?"

La ŝipanoj ridis kaj respondis: —

" Sensencaĵo! neniu ŝipo ekveturis por tia laboro!"

Aŭdinte tion, la dainagono pensis, ke la ŝipanoj devis paroli tiel suspekte pro neniom da kono, kaj diris al si: —

" Mi mem prenos arkon kaj pafmortigos la drakon, de kies kapo mi akiros la gemon. Mi jam ne atendos plu la malfruiĝantojn."

Tial li enŝipiĝis kaj veturis for en la oceanon, tiel malproksimen, ke li trovis sin sur la maro en la direkto al Cukuŝi. Tute ne atendite, rapida vento ekblovis kaj mallumo ŝvebiĝis ĉirkaŭe, kaj lia ŝipo forbloviĝis tien kaj reen. Jam la direkto estis ne distingebla, ŝajne la ŝipo ŝoviĝis for en la oceano; ondegoj sinsekve saltadis trans kaj en la ŝipon, dum la fulmotondrado furiozis kvazaŭ ĝi forfalus sur la kapojn. La dainagono tute konsternita kriis: —

" Neniam antaŭe mi spertis tian danĝeron! Kion ni povas fari?"

La direktilisto diris responde: —

" Longe mi vojaĝis tra ĉi tiu maro, sed mi ne renkontis tian danĝeron, kiel nunan,

Se la ŝipo ne subakviĝus ĝis la marfundo, tondro frapus nin, kaj se Dio favorus nin savi el la minacoj, ni forbloviĝus al la Suda Maro. Ho ve, mi mortus vane pro la servo al la mastro kun malbenata sorto!"

Kaj la direktilisto lasis sin en plorado. Aŭdinte lin la dainagono diris: —

"Kiam oni veturas en ŝipo, oni devas fidi la direktiliston, kiu estas firma kvazaŭ alta monto. .Kial vi parolas tiel malespere?"

Li apenaŭ eldiris tion dum vomado, kaj la direktilisto respondis: —

"Nur Dio povas servi en ĉio. La furiozado de ventego, ondegoj kaj tondrado, kvazaŭ falonta surkapen, devas esti kaŭzita pro via malbona intenco mortigi drakon. Kredeble la drako ankaŭ kaŭzis la rapidan venton. Nu, faru preĝon al Dio!"

"Bonega ideo! Nun mi preĝas, la dio de la direktilisto, aŭskultu mian konfeson. Mi intencis mortigi la drakon nur pro mia facilanimo kaj malsaĝeco. De nun mi neniom volos difekti al ĝi eĉ unu hareton, mi ĵuras."

Tiel preĝĵurante, li aŭ staris aŭ sidis ripetante la alvokon kune kun larmoj jam milon da fojoj. Tio eble efikis, la tondrado ĉesis kaj iom lumiĝis, tamen la vento ankoraŭ blovis rapide. Tiam la direktilisto kriis: —

"Trafe, la drako prilaboris pri ĉi tiu minaco. Nun blovas bona vento, sed ne malbona, kaj ĝi kondukas nian ŝipon al bona direkto." Sed la dainagono ne povis kompreni lin.

Post tri aŭ kvar tagoj, la vento blovis returne kaj lando vidiĝis; ili vidis ĝin, ke ĝi estas marbordo de Akaŝi en Harima. Tamen, la dainagono, kiu erare pensis la marbordon por tiu de la Suda Maro, kuŝis preskaŭ sveninta. Pro la anonco de la kunveturantoj de la ŝipo al la gubernioficejo, la guberniestro mem venis vizite lin, kiu ankoraŭ ne povis stari kaj kuŝis sur la fundo de la ŝipo. Sub la pinarboj oni metis maton, sur kiun la dainagono estis portita, kaj tiam li apenaŭ sin levis vidinte, ke ĉi tiu ne estas lando en la Suda Maro. Kiam oni rigardis lin, li aspektis ĝisoste malvarmuminta, kun la ventrtre ŝvelinta kaj kun la okuloj similaj al pruneloj; kio kaŭzis ridon ankaŭ al la gubernio estro. Sed la ordono estis donita al la oficejo de la gubernio kaj estis preparita homportilo, sur kiu la dainagono estis portita malrapide al sia loĝejo. Tiam tiuj el liaj servantoj, kiujn li sendis por la serĉado, iel sciis pri lia reveno kaj prezentis sin antaŭ li, dirante: —

"Ni malsukcesis en la serĉado de la gemo ĉe la kapo de drako, kaj tial ni ne povis viziti ĉi tiun palacon, sed nun estas konate, kiel malfacila estis la tasko al ni trudita, pro tio ni kuraĝis veni al vi, petante ke ni ne estu eksigitaj de la servado."

La dainagono leviĝis, iris akcepti ilin kaj diris: —

"Vi ja revenas bone, eĉ senporte. Kredeble drako havas parencecon kun la tondrodio, Ni intencis preni la gemon, kaj ni apenaŭ savis nin de danĝero. Se mi kaptus la drakon. mi estus tute facile pereigita; mi ĝojas, ke mi ne kaptis ĝin. Rabisto de homaj animoj kaj detruanto de iliaj korpoj estas Kaguja-hime, mi ne paŝos plu eĉ preter ŝia loĝejo, nek vi, servantoj, pretermarŝu tie."

Kaj la dainagono prenis restaĵojn el sia provizo kaj disdonis ilin al tiuj, kiuj malsukcesis

la serĉadon de la gemo. Aŭdinte tion la edzinoj, kiujn li eksigis antaŭe, eksplodis en ridegon. Dume, la fadenoj tegitaj sur la tegmento de la loĝejo ĉiuj estis eluzitaj de korvoj por fari nestojn. Kaj kiam homoj demandis: —

"Dainagono Ootomo prenas la gemon ĉe la kapo de drako, ĉu ne?" kaj ili havis respondon: —

"Ne, sed nur liaj ambaŭ okuloj fariĝis du gemoj kiel paro de pruneloj."

Aŭdinte la respondon ili kriis: —

"*Ana taegata!*[16]"

Tiam oni ekuzis la esprimon "*ana taegata*" por la signifo de "netolerebla."

16) "*taegata*" (netolerebla) similas aspekte al "*tabegata*" (nemanĝebla). La Dainagono havis la okulojn ŝvelintajn kiel pruneloj, kaj ĉi tiuj estis nemanĝeblaj fruktoj por lia penado. Tio ĉi estas unu el la burleskaj vortludoj, kiajn oni ofte trovas en japanaj klasikaj verkoj.

---

(42 頁よりつゞく)

★關西大學新聞 (1 月 1 日)——エス語の將來 (投書)

★北國新聞 (1 月 15 日)——世界の兒童の群べ面白い鄕土童話エス語に飜譯紹介 (記事)

★東京大勢新聞 (1 月 31 日) — 府立第六のエス語課について (ゴシツプ欄記事)

★臨牀藥報 (1 月 10 日)——酒を繞る問題、本誌 1935 年安田氏の記事を田畑喜作氏和譯紹介

★東京朝日新聞 (2 月 19 日) 金子洋文氏の洗濯屋と詩人エス譯より英譯されてラヂオ放送さるの記事

★讀賣新聞 (2 月 19 日) 同上

★なんぷう (1 月號)—— 綠の星はすすみ行く——加藤孝一氏

★國語研究 (1 月號)——エスペラントとはどんな言葉か——菊澤季生氏

★國際佛教通報(2 月號)——Religia Edukado en Japana Lernejo 中西氏

## 地方會機關誌その他

Spaco 節約のため內容中分量多きもの特色あるもの二三を紹介。大さ明記なきは半紙半裁型とす。

★**Specimena Bazaro** (市原氏個人誌) 4 月號 半紙判 4 頁

★**Marŝu** (マルシユ社) 9 號。40 頁。〔マルシユ存在と其意義、國際通信の頁〕

★**Lumo** (名古屋ルーマ) 1 月號。14 頁。〔Irankarapte〕

★**Ĝermo** (五十嵐氏個人誌) 3 號 8 頁〔アイヌ文學のエス譯——金田一博士〕

★**Fenikso** (旭川) 6 號。14 頁。〔Printempo de vivo.「貝合」譯〕

★**Bukedo** (京都婦人) 2 號。46 頁。〔Pri virina grupo, Ŝipo de oranĝo〕

★**Fervojisto** (鐵道聯盟) 12 月號。菊判 16 頁 活版印刷 (ザメンホフの共頌 35 年エス界展望。〕

★**聯盟會報** (北海道) 7 號。6 頁。

★**Libero** (中西氏個人誌) 17 號。12 頁。〔方丈記〕◇18 號。14 頁。〔Mi Budho Vivo〕

★**Historio de Esp-Movado en Hokkaido** (北海道聯盟) 40 頁。

★**Vojo** (熊本) 5 號。22 頁。〔Birdeto, kiu anoncas printempon, 九州大會記〕。

★**Dua batalejo** (浦和高校) 12 號。83 頁。〔Antaŭmezepoka historio de Musaŝino, Saraŝina Nikki〕

★**MER** (盛岡) 12 月號。9 頁。

★**Lumo Orienta** (佛教聯盟) 7–12 月號。菊判 30 頁。活版印刷〔Amitayus-sutropadeŝo, La parabolo de la urbo magie farita〕

★**Norda stelo** (北陸) 26 號。14 頁〔金澤エス運動史〕

★**北陸エス聯盟名簿** 12 頁。

★**FER** (東京鐵道) 1 月號。14 頁〔Marŝu antaŭen〕

★**Vinberbranĉo** (クリスターノ) 1 月號。20 頁〔De nordo al sudo〕

★**Bulteno de KEA** (神戶) 1 月號。16 頁〔Argentina Esp-Asocio の思ひ出、Sento pri dramo Patro Revenas〕

★**Kupolo** (橫濱商業卒業生エス會) 2 月號。8 頁。

★**Verda Haveno** (橫濱) 1 月號。9 頁〔ローマ字と日本語〕

財團法人日本エスペラント學會

# 會　計　報　告

（昭和十年十二月末日現在） 1935

## 〔A〕 財團法人基金會計

| | 円 |
|---|---|
| 基金總額 | 16,896.18 |
| 前年度末現在 | 16,559.22 |
| 本年庶增加額 | 336.96 |
| 內　譯 | |
| ◎（イ） 永代基金總計 | 12,596.18 |
| 前年度末現在 | 12,259.22 |
| 本年度寄附金 | 33.00 |
| 同預金利息 | 303.96 |
| 保管處置 | |
| 三井信託預金（大石） | 10,598.41 |
| 住友銀行預金（大井） | 1,648.51 |
| 安田貯畜預金（三石） | 349.26 |
| 計 | 12,596.18 |
| （ロ） 常用基金總計（增減ナシ） | 4,300.00 |

保管處置

昭和七年理事會ノ承認ヲ經テ全額本會事務所建築費ノ一部ニ融通利用中

## 〔B〕 逕常總經費收支決算

| 費目別 | 收入 | 支出 |
|---|---|---|
| 維持員會計 | 3,401.28 | 3,401.28 |
| エス誌會計 | 3,305.13 | 3,305.13 |
| 事業部會計 | 2,752.77 | 2,752.77 |
| 計 | 9,459.18 | 9,459.18 |

## 〔イ〕 維持員負擔會計

### ★收　入★

| | 円 |
|---|---|
| 普通維持員會費 | 1,230.37 |
| 正維持員會費 | 1,491.00 |
| 賛助維持員會費 | 162,50 |
| 特別維持員會費 | 50.00 |
| R. O. 購讀會費 | 6.86 |
| 前年度旣納諸會費 | 1,156.05 |
| 以上合計 | 4,096.78 |
| 內次年度分前納會費 | 1,237.15 |
| 差引本年度會費實收入 | 2,859.63 |
| レヴォ廣告收入 | 212.80 |
| 雜收入（利子，R. O. 分册，印刷物） | 328.85 |
| 以上本年度總實收入合計 | 3,401.82 |

### ★支　出★

| | |
|---|---|
| レヴォ印刷費 | 1,519.81 |
| 同發送費 | 187.79 |
| 事務費 | 600.00 |
| 宣傳費 | 214.36 |
| 地方會補助費 | 23.20 |
| 維持員總會費（大會寄附） | 60.00 |
| ＵＥＡ 賦課金 | 170.00 |
| 文庫費 | 23.12 |
| 共通負擔費 | 475.51 |
| 1936 年度年鑑發行準備金 | 127.49 |
| 以上支出合計 | 3,401.28 |

收支ノ結果 127.49 圓ノ剩餘金ヲ生ジタルヲ以テ次年度年鑑發行準備金トシテ支出、來年度豫算ニ計上ス

| | |
|---|---|
| ◎次年度維持員會費繰越額 | 1,237.15 |
| 內　譯 | |
| 普通維持員會費 | 437.80 |
| 正維持員會費 | 714.75 |
| 賛助維持員會費 | 58.70 |
| 特別維持員會費 | 25.90 |

## 〔ロ〕 エス誌負擔會計

### ★收　入★

| | 円 |
|---|---|
| 直接購讀料 | 527.74 |
| 各書店賣上 | 1,770.10 |
| 前年度旣納購讀料 | 194.30 |
| 以上合計 | 2,492.14 |
| 內次年度前納購讀料 | 227.31 |
| 差引本年度實收入 | 2,264.83 |
| 廣告收入 | 455.85 |
| 雜收入（分册賣上其他） | 188.38 |
| 事業部剩餘金繰入 | 396.07 |
| 以上本年度總實收入計 | 3,305.13 |

### ★支　出★

| | |
|---|---|
| エス誌印刷費 | 2,270.75 |
| 同發送費 | 50.05 |
| 宣　傳　費 | 28.82 |

| | |
|---|---|
| 事務費 | 480,00 |
| 共通負擔費 | 475.51 |
| 以上支出合計 | 3,305.13 |

收支ノ結果 396.07 圓不足ヲ生ジタルヲ以テ事業部ノ剰餘金ヲ充當補塡セリ

◎次年度エス誌購讀料繰越額 ……… 227.31

## 〔ハ〕 出版,取次事業部負擔會計

### ★收 入★

| | |
|---|---|
| 學會出版物賣上高ヨリ | 2,071.82 |
| 取次和洋書賣上高ヨリ | 680.95 |
| 以上本年度收入合計 | 2,752.77 |

### ★支 出★

| | |
|---|---|
| レヴオ誌廣告費 | 212.00 |
| エス誌廣告費 | 429.75 |
| 其他廣告費 | 216.32 |
| 印刷費(目錄其他) | 109.65 |
| 事務費,給與 | 815.00 |
| 共通負擔費 | 532.82 |
| エス誌會計不足補塡額 | 396.07 |
| 特別積立金繰入 | 41.16 |
| 以上支出合計 | 2752.77 |

收支ノ結果 437.23 圓ノ剰餘金ヲ生ジタルヲ以テ內 396.07 ヲエス誌會計不足補塡ニ當テ殘餘 41.16 圓ハ特別積立金へ支出ス

## 〔ニ〕 共通負擔費內譯

| 費目 | 維持員會計 32% | エス誌會計 〃 | 事業部會計 36% | 總計 円 |
|---|---|---|---|---|
| 通信費 | 112.18 | 〃 | 126.17 | 350.53 |
| 振替貯金料金 | 2.32 | 〃 | 2.66 | 7.30 |
| 備品及設備費 | 46.30 | 〃 | 52.13 | 144.73 |
| 消耗品費 | 48.32 | 〃 | 52.50 | 149.14 |
| 事務所維持費 | 119.04 | 〃 | 133.55 | 371.63 |
| 諸會合費 | 8.54 | 〃 | 9.62 | 26.70 |
| 火災保險費 | 39.45 | 〃 | 44.40 | 123.30 |
| 電話費 | 26.40 | 〃 | 29.68 | 82.48 |
| 諸稅金 | 33.36 | 〃 | 37.55 | 104.27 |
| 臨時費(雜費) | 39.60 | 〃 | 44.56 | 123.76 |
| 計 | 475.51 | 475.51 | 532.82 | 1,483.84 |

## 〔C〕 資産總勘定 (在庫金內譯)

| | |
|---|---|
| 永代基金 | 12,596.18 |
| 常用基金(利用中) | 0 |
| 次年度繰越維持員會計 | 1,237.15 |
| 同 繰越エス誌會計 | 227.31 |
| 年鑑發行準備金 | 127.49 |
| 特別宣傳資金 | 45.95 |
| 出版、取次書籍部積立資金 | 260.18 |
| 教育部積立金 | 300.48 |
| UEA 賦課金積立 | 235.00 |
| 特別積立金 | 241.16 |
| 特別出版資金 | 0 |
| 出版取次書籍部諸預リ金 | 250.00 |
| 以上現金合計 (1) | 15,520.90 |
| 學會出版物在庫見積額 | 15,376. 7 |
| 取次和洋書在庫見積額 | 5,882.18 |
| 不動產評價見積額 | 16,426.95 |
| 以上商品及不動產合計 (2) | 37,685.70 |
| (1), (2) 總合計 | 53,206.60 |

◎不動產內譯

| | |
|---|---|
| 事務所敷地(昭和七年購入價額) | 9,750.00 |
| 家屋及雜作(同建築費額) | 6,676.95 |

## 〔D〕 資産目錄 (保管處置)

| | 円 |
|---|---|
| 三井信託預金 | 10,598.41 |
| 住友銀行預金 | 1,648.51 |
| 安田貯蓄預金 | 2,034.20 |
| 振替及郵便保證金 | 119.00 |
| 東京振替口座 (11325) | 777.70 |
| 同上 (32085) | 79.09 |
| 現金在庫 | 263.99 |
| 以上現金合計 | 15,520.90 |
| 在庫商品圖書見積額 | 21,258.75 |
| 本會用地坪數 | 80坪3合3勺 |
| 建物延坪數(雜作付) | 60坪7合5勺 |
| 電話 | 1 |
| 本會文庫書部數 | 2850 |
| 事務用テーブル類 | 11 |
| 同上 廻轉椅子 | 6 |
| 應接用テーブル | 2 |
| 同上 椅子 | 3 |
| 布張椅子 | 12 |
| 講習用長机 | 14 |
| 同上 木臺椅子 | 30 |
| 集會用藤椅子 | 36 |
| 額類 | 7 |
| 各種書類箱及本箱 | 22 |
| 石炭ストーブ(大小) | 2 |
| 時計 | 1 |
| 謄寫版器 | 1 |
| 秤(大小) | 2 |
| 安全書庫 | 1 |
| タイプライター | 1 |

# 昭和十一年度通常經費豫算

## 〔A〕 維持員負擔會計

### ★收　入★

| | 人　円 | 円 |
|---|---|---|
| 普通維持員會費 | 495×2.40 | 1,088.00 |
| 正維持員會費 | 504×3.00 | 1,512.00 |
| 賛助維持員會費 | 34×5.00 | 170.00 |
| 特別維持員會費 | 5×10.00 | 50.00 |
| 終身維持員會費 | 18×0 | 0 |
| 小　計 | 1056 人 | 2,820.00 |
| R. O. 廣告收入(16.00 圓×12月) | | 216.00 |
| 雜收入(RO分册利子,其他 21圓×12月) | | 250.76 |
| 年鑑發行繰越金（前年度剩餘金） | | 127.49 |
| 小　計 | | 594.25 |
| 以上收入合計 | | 3,414.25 |

### ★支　出★

| | |
|---|---|
| RO 印刷費 | 1,550.00 |
| 同　發送費 | 180.00 |
| 年鑑發行費 | 142.49 |
| 事務給與費 | 600.00 |
| 宣傳費 | 200.00 |
| 地方會補助費 | 26.00 |
| 維持員總會費(大會寄附) | 60.00 |
| UEA 賦課金 | 150.00 |
| 文庫費 | 20.00 |
| 共通負擔費 | 485.76 |
| 以上支出合計 | 3,414.25 |

## 〔B〕 事業部負擔會計

### ★收　入★

| | |
|---|---|
| エス誌直接購讀料 230人×月2.30圓 | 634.80 |
| 同 大取次賣上收入 950部×14.4錢 | 1,641.60 |
| 雜收入分册賣其他（月15圓） | 180.00 |
| 小　計 | 2,456.40 |
| 學會出版物賣上高ヨリ | 1,440.00 |
| 取次和洋書賣上高ヨリ | 930.00 |
| 不足金（積立金ヨリ）補塡 | 400.60 |
| 小　計 | 2,770.60 |
| 以上收入合計 | 5,227.00 |

### ★支　出★

| | |
|---|---|
| エスペラント印刷費 | 2,280.00 |
| 同 發送費（協會費, 返本料等） | 50.00 |
| 宣傳費 | 50.00 |
| 小　計 | 2,380.00 |
| R. O. 廣告費 | 216.00 |
| 其他廣告費 | 30.00 |
| 印刷費(目錄廣告刷其他) | 100.00 |
| 事務給與費 | 1,440.00 |
| 雜經費 | 18.00 |
| 共通負擔費 | 1,043.00 |
| 小　計 | 2,847.00 |
| 以上支出合計 | 5,227.00 |

### 共通負擔費內譯

| 費目 | 維持員會計 32% | 事業部會計 68% | 總計 |
|---|---|---|---|
| 通信費 | 112.00 | 238.00 | 350.00 |
| 振替貯金料金 | 2.56 | 5.44 | 8.00 |
| 備品及設備費 | 64.00 | 136.00 | 200.00 |
| 消耗品費 | 48.00 | 102.00 | 150.00 |
| 事務所維持費 | 121.60 | 258.40 | 380.00 |
| 諸會合費 | 9.60 | 20.40 | 30.00 |
| 火災保險費 | 35.20 | 74.80 | 110.00 |
| 電話費 | 27.20 | 57.80 | 85.00 |
| 諸税金 | 33.60 | 71.40 | 105.00 |
| 臨時費 | 32.00 | 68.00 | 100.00 |
| 計 | 485.76 | 1,032.24 | 1,518.00 |

### 總豫算收支計算

| | 收入 月額 | 收入 年額 | 支出 月額 | 支出 年額 | 差引不足 |
|---|---|---|---|---|---|
| 維持員會計 | 284.52 | 3,414.25 | 284.52 | 3,414,25 | 0 |
| 事業部會計 | 402.20 | 4,826.40 | 435.06 | 5,227.00 | 400.60 |
| 合計 | 686.72 | 8,240.65 | 719.58 | 8,641.25 | 400.60 |

事業部會計收入不足に對しては別途積立金より借入補塡する

---

### 昭和十年度永代基金領收報告

| 円 | |
|---|---|
| 30.00 | 西　成甫氏 |
| 3.00 | 山崎弘幾氏 |
| 33.00 | 以上合計 |

# 財團法人 日本エスペラント學會 昭和十年度 報告

**★役員會報告**: 昭和 10 年 1 月 27 日理事會開催。1. 理事長選擧(大石和三郎氏再選就任)、2. 常務理事選任(美野田、大井、三石氏就任)、3. 前年度事業報告(承認)、4. 前年度會計報告(同)、5. 本年度會計豫算決定、6. 評議員改選、7. 本年度事業並に會務の一般協議。

**★12 月 22 日 理事會及評議員會開催**: 1. 本年度一般會務報告、2. 同會計收支實績報告、3. 11 年度事業方針協議、4. 同豫算編成の對策、5. 11 年度評議員改選の打合、6. 久保特使視察旅行報告の聽取。

**★事業報告概要**: 1. 機關誌レヴオ、並に雜誌エスペラントの月刊定期發行、2. 講習會並に研究會の開催、3. 地方エス會と連絡、講習會展覽會等に對して後援をなす、4. 夏期大學の開催、5. エス語普及狀態視察のため評議員久保貞次郎氏を九州地方に派遣、6. 新刊圖書の發行: 會話、シエイクスピア悲劇篇、新撰和エス辭典、東洋の俠血兒、日本書紀第一編、醫學文範、飜譯實驗室、海神丸、佛敎社會學の基礎概念、其他既版圖書の重版、海外雜誌並に圖書の取次輸入及び我國發行のエス書籍の海外輸出。

**★會計決算報告概要** 計數は會計報告參照。

**★通常經費**: 豫算では收入が 7,794.50 圓だが實績は決算報告に示す通り 9,459.18 圓となつて豫算に比し 1,276.78 圓の增收、これが爲赤字公債の厄介とならず決濟し得た事は偏に維持員諸氏の熱心なる御支持の賜と深く感謝に堪へない。維持員會計に於ては 127.49 圓の剩餘金さへ生じ次年度の年鑑發行準備金として豫算に繰入れ計上し得た。エス誌會計は見込通り 396.07 圓の赤字を生じ事業部の剩餘金を以て補塡、これまた事なきを得た。事業部會計に於ては和エス辭典の發賣及び洋書類の賣上增收とで收支の結果 437.23圓の剩餘金を得前記エス誌會計の不足を補ひ尙殘額の 41.16 圓は特別積立金に繰入れた。**★資產勘定在庫金說明**、現金總額 15,520.90 圓、動產及不動產總額 37,695.70 圓、以上合計 53,206.60 圓で前年度よりは 1,071.60 圓の增加である。此の外電話、家具什器、文庫圖書等現金不換のものは計上せず、項目中自明のものは說明を省略。**特別宣傳資金**、從來より据置。**出版、取次部積立資金**、本年度本會出版物の賣上高は 7,673.42 圓で前年度に比し 3,885.93 圓の增加、これは新撰和エスの發賣によるものである。一方支出は 7,700.65 圓この中 5,934.50 圓は和エス出版費の殘額で他は新刊、再版費である。以上收支の結果 27.23 圓の不足となる。取次和洋書賣上高は 6,809.50 圓で前年度に比し 405.52 圓の增加、一方仕入支出は 5,099.81 圓につき差引 1,709.69 圓の收入となる。以上總賣上高 14,482.46 圓; 總支出 12,800.46 圓; 差引 1,682.46 圓の收入、これに前年度より繰越の積立資金 605.44 圓を加算すれば 2,287.90 圓の積立資金となるのであるが、これは事業經費を支出しない場合の事にて現在の樣な會計組織では前記圖書總賣上高より本會出版物は約三割、取次和洋書はその一割を支出、事業部負擔會計の財源に充てなければならない狀態に在つては出版取次部の資金が如何に涸渴しようと先づ第一に通常經費會計の成立を急務とせねばならぬので本年度の如く大出版をした時は出費が多額の割合に商品の賣上が僅少だと非常に經理は骨が折れる。その上支出の方は天引取られるとなると勢ひ借金政策は不可避となる。多分に漏れず出版部としては資金缺乏の結果下記の通り一時借入金をなし本年度決濟の餘義なきに至つた。**借入金**: 特別出版積立金より 420 圓、特別積立金より 1000 圓、合計 1,420 圓、これを前記出版部總收入金 2,287.90 圓に加算、合計 3,707.90 圓の財源より、支出することと事業部會計へ 2,752.77 圓、出版部編纂事務費 694.95 圓、合計 3,447.72 圓、差引 260.18 圓が會計報告に現れた出版取次部積立資金の次年度繰越金である。

**教育部積立金**; 300.48 圓は講習會費の積立である。前年度に比し 109.06 圓の增加、本年度收入金は 133.50 圓で講師謝禮支出 24.44 圓差引 109.06 圓を前年度繰越の 191.42 圓に加算したのである。

**U. E. A. 賦課金積立**; 235 圓前年度に比し 70 圓增加、豫算の殘額を準備積立としたものである。

**特別積立金**; 241.16 圓 これは功勞慰謝金として積立て來たもので本年度は事業部會計の剩餘金より 41.16 圓を繰入れ累計 1,241.16 圓となつたのであるが出版部資金の缺乏に依りこの內 1000 圓を貸出した故に上記金額となつた。

**特別出版資金**; 某氏の寄附によるもので總

額 1500 圓の内出版部に昭和七年に 1080 圓本年度420圓貸出したる故に積立在庫金なし。

**書籍諸預り金**; 250 圓は前金注文者の諸預り金である。

☆昭和十一年度通常經費豫算

本年度豫算から會計種別を維持員負擔會計と事業部負擔會計とに改めた。今迄はエス誌負擔會計としてエス誌を獨立させて來たが今日までの實績ではまだまだエス誌一人の旅は容易でないのと、同誌發行の目的が事業部(出版、取次)としての普及宣傳及廣告機關として廣く街頭進出が主眼であるから總ての負擔を事業部が負ふ様に改めた。

事業部の財源は前項でも述べた通り圖書賣上高より天引何割かを差引ものであるから若しエス誌の賣上が芳しく無い時はそれだけ書籍を食ふ譯で大なる犧牲を拂ふ事になるのである。さて本年度收入總額 8,240.65 圓は前年度決算に比し約 800 圓餘りの減收である。これは圖書及エス誌の賣上が前年程の好成績を得られないものとして減額計上したからである。支出總額は 8,641.25 圓で結局 400 圓餘りの不足を生ずるがこれは事業部會計の不足で維持員會計は維持員各位の協力で本年度も赤字克服が叶ひ御同慶至極、事業部會計の赤字退治はエス誌購讀者の擴大と本會出版物の多量購買利用によつて、救はれる。

☆昭和 11 年度選出評議員(理事長選任)

| | | |
|---|---|---|
| 安黒才一郎 | 青木武造 | 青島友美 |
| 岩下順太郎 | 伊藤已酉三 | 浦　良治 |
| 大木克己 | 大崎和夫 | 久保貞次郎 |
| 小林東二 | 守隨　一 | 多羅尾一郎 |
| 露木清彦 | 寺　喜久治 | 德田六郎 |
| 馬場清彦 | 福富義雄 | 保坂成之 |
| 萬澤まき子 | (以上十九名再選) | |
| 飯田龜代司 | 酒井　鼎 | 高橋　肇 |
| 原田三馬 | 以上新任總員廿三名 | |

# 内外エス運動展望

## 丁抹は動く

丁抹に Dana Esperanto-Instituto がたてられてからこの Instituto では外國の Ĉe-kurso の先生をよびよせることとエス語試驗をすること等々を目ざしてゐたがこの冬にはドイツ人の Ĉe-instruisto の A. Weide 氏を招聘して 40 ケ所で 50 回の講演をやらせた。4800 人が之に參加した。講演は (1) ツエッペリンで南米迄の旅及び (2) ベルリンのオリンピック大會についての話でエス語を用ひて。眞向からエス語の話をしなかつたがエス語についての話を織込んでしたのでエス語についての質問がでる。彼は又エス語の見本を示したので大いに宣傳に役立つた。

旅行の後 Weide 氏は Vestervig, Bedsted で講習の指導をしてゐる。

又エストニヤから招聘した Ĉe-instruisto Rikando 氏も來て Viborg, Skive, Kjellerup, Silkeborg 等で講習した。

ドイツ人の O. Haar 氏も Hammel, Bjerringbro, Soften, Langaa, Lillering で講習を指導しハンガリー人 J. Wekerle 氏も Mors, Sejerslev, Nykobing で講習を指導してゐる。

インド人 L. Sinha 氏も昨秋 Aarhus, Hinnerup で講習を指導した。

ドイツ人 Riechert 氏も Sjodstrup で講習をした。

和蘭人 E. Mannoury 孃も Vejle で講習を指導。

ロシヤ人 Vasiljef 氏はコペンハーゲンで講習を指導中。

以上外國人の外丁抹人で講習をやつてゐるものも澤山ある。

## ブラジル政府發行エス文入切手

昨秋の Rio de Ĵaneiro で開かれた第十回國際見本市に際してブラジル遞信局では 200 reis の記念切手を發行したがそれにはエス語で Oka Internacia Specimena Foiro, Rio de Janeiro, Brazilo と印刷されてゐる。之を手に入れたい人は Brazila Ligo Esperantista (Av Marechal Floriano, 212, Rio de Janeiro, Brazilo)宛國際通信切手二枚封入申込のこと。

## Foiro de Parizo

例年の如くパリの foiro の紹介の小册子 Franclando dum Printempo が出た。四六版 12 頁二色刷美麗。猶ポスターも出來てゐるとの事である。右見本入用のものは Foire de Paris, 23, Rue N. D. des Victoires 宛請求されよ。

## John Merchant の訃

かつての ICK の prezidanto としてエス

運動に多大の貢獻をした英國の同志 John Merchant 氏がなくなられたことはエス運動にとつて大きな損失であつた。彼は sincera, afabla, bonbumora な性格で誰にも好かれた。彼の譯著書には "Jozefo Rhodes kaj la fruaj tagoj de Esp. en Anglujo", "Kompatinda Klem" "Tri angloj alilande" 等ある。

## 東京府立第六高女エス語科

昨年四月からエス語科を設置して世間の耳目を聳動した東京府立第六高等女學校では今年は大々的にエス語科クラスを募集することになり入學志願者へ渡す印刷物の中にもエス語を教授する理由を明記したものを與へ且入學願書中にも第1希望（英語、エスペラント何レモ希望セズ）第2希望（英語、エスペラント、何レカ希望）とに分け英語希望エス語希望かを願書の中へ記入させる樣にした。

その結果は志望者總數 730 名中英語志 613 名エス語 102 名不明 14 名他 1 名であつた。

猶この女學校エス語科問題は各地新聞にも記載され又いろいろ世間の評判になつてゐる東京日日には 1 月 30 日に家庭欄に出て市河博士のエス語反對があつたので東京の同志は反駁の投書をした。淺田一博士及高橋肇、矢島英男氏等の投書がのつた。常にこういつた機會にはかゝさず投書すべきだ。（別項新聞雜誌とエス欄參照。）

## エス譯から英譯されて上演される「洗濯屋と詩人」

來る 3 月 2 日のロンドンの BBC 放送局主催のラヂオ•ドラマ競演會に應募した C.L. Hinton 氏の率ゐるアマチユア劇團が東宮氏エス譯の「洗濯屋と詩人」を英譯して上演することになつて最近原作者金子洋文氏の許可をたのみにきたとの事。

## お國童話エス譯

石川縣兒童研究會編纂の「ぎんのお山」「こがねの水」の二册のお國童話の中から興味ふかいもの數篇をえらびエス譯して世界に紹介することが石川縣立圖書館長中田邦造氏によつて企てられてゐる。エス譯は金澤エス會の手で目下着々進行中。

## エス語星座名「天界」誌にのる

京大教授山本一淸博士の主宰する東亞天文協會の機關誌「天界」の本年一月號に「新撰和エス辭典」の附錄にのつてゐる「星座名一覽表」が轉載されて紹介された。之を機緣として天文學者の間にもエス語についての關心が深まるであらう。之については尾道の同志松本氏の努力によることが多い。

## 第二回汎太平洋佛教青年會大會記要

一昨年の汎太平洋佛青大會の記要が出た。Eckelmann 氏のエス語講演の速記やエス語に關する議事の記載あり猶小谷德水氏がエス語支持の感想文を書かれたものがのつてゐるとの事。（中西義雄氏報）

## 大空文藝奉仕敎團

「エスペラントを學べ」と書いた襷を肩に首都の街から街を、マンドリンで流して歩く名物男「大空詩人」永井叔氏は、丸山鶴吉氏夫人その他の人々と、不遇の人々を慰めるため敎團を作り、それにエスペラントで Servogrupo (Senpaga) de Grandĉiela Arto (SGA)（大空の文藝〔無料〕奉仕敎團）と名づけられた。そのコミタターノ中には、指笛で知られる田村指聲氏その他數名のエスペランチストが加つてゐる。詳細問合せは、世田ケ谷區太子堂町 116 永井叔氏あてのこと。

## エス語を話す米人僧侶

嘗て四年前京都大德寺に滯在しその後支那ビルマ、印度、西藏を巡歷した米人佛敎僧弧雲、馱齋雨氏は昨年 12 月末突然歸米の途上京都に立より中原氏をとひ更に柴山氏をとふた。そして「近年東洋民族の發展は實にすばらしい。これは西洋語が東洋よりの退歩をも意味するだらう。十年廿年先の英語の運命を思へば英語國民は今よりエス語の必要を知らねばならぬと思ふ。歸米後は大いにエス語の普及につとめたい」と語つてゐた。

## 「現代思潮とエス」座談會

1 月 21 日 19 時半から名古屋ルーマ・クンシード主催で名古屋新聞後援の下に同新聞會議室で「現代思潮とエスペラント」について座談會を開いた。出席者 30 餘名。金子白夢氏を中心として名古屋エス界の權威者により非常に有益な座談會をもつた。

尾崎氏の開會の挨拶についで白木氏司會の下にまづ矢崎氏が醫學方面のこと TEKA, IMR のこと等を語り次で山田弘氏實業家と



しての立場よりエス語をときマヨール氏が歐洲エス運動をのべ天野電話局長が國際電話と言話の問題をとき最後に金子氏が世界文化と國際語の必要について論じた。(寫眞參照)。猶この事につき 22 日の名古屋新聞に記事がでた。

### 新興佛教青年同盟大會

1 月 19 日東京で開かれた新興佛教青年同盟第六回大會に決議の議案中國際主義の精力的高揚といふ問題の中に「エスペラントの普及」といふ項目がある。

# 全國各地報道

投稿注意:

1. 日本文にて・なるべくハガキで・迅速に・簡單に。
2. 締切大體前月 18 日 (但 18 日以後到着のものものせることあり)。
3. 地方會誌を以て報道に代ふるをえず。
4. 寫眞は臺紙なきもの (裏に必ず說明記入の事) 寫眞は返送せず資料として保存す。

**東京** ★中華留日世界語學會——1 月16日から 3 月中旬迄第二期講習を日本エス學會講習室で開催。火木土 16-8 時中等(岡本、中垣兩氏指導) 18.5-20.5 時初等(顧、中垣兩氏指導) 科をやつてゐる。

★アルヂエンタ會——2 月 8 日矢島氏が英國船の電氣技術者 Thomas Mason 氏をともない出席。彼を圍んでいつにない賑かな會であつた。出席二十名。

★クララ會——2 月 10 日大阪の多田孃歡迎



會と京在婦人同志の親睦會とを兼ね新橋胡蝶堂二階に開催。出席 12 名。仙臺島貫孃、横濱村上孃、東京の萬澤、磯部、長谷川孃、池田夫人クラヽ會の 5 名を加へ仲々盛會。 尙席上日本エスペラント婦人聯盟結成の提案あり、種々討議の上可成り具體的に進捗。紀念撮影 20 時散會。多田孃を銀座へ案內、東京驛に見送る。

★ルーマ・ロンド——2 月 8 日夜エス文學を語る夕をもち三宅氏のエス文學概論中垣氏は自作の創作發表ある。

★ニホンバシ・クンシード——1 月 24 日創立。毎火曜 18-20 時。江戸橋際風月喫茶店にて。

★アサクサ・クンシード——2 月 21 日創立。雷門前明治製菓二階で。當日は十數名出席。毎金曜 19-21 時にやる。

### Restoracio Parizano

東京の新橋驛前のレストラン・パリジアンの kelnero として秋田縣の秋北エス會を主宰してゐた村上孝夫氏がゐる。 そこの mastro はフランス人でとても古い esp-isto (大分單語を忘れかけてゐる) である。お客も外人が多いそうだがエス語黨はゐないとか。ぜひ東京の同志諸君もそこへ出掛けて外人を片つぱしから綠化してはいかゞですか。(電話は銀座 339 番)

### Ne-katolikaj Kristanoj!

Se vi deziras informojn pri la katolika religio, vi povas ricevi ilin *senpage* de la Sekretario de l' *Internacia Katolika Informejo.*

Skribu al: Fratulo M. Monulfus, ĉe la Instituto Sankta Nikolao, Oss, Nederlando.

### 木全少將の訃

我が熱心な古い同志陸軍少將木全多見氏は去る 2 月 7 日 81 歲の長壽を終へられた。同氏は大正十年六十六歲でエス語を學ばれ大正十一年一月以來今日迄學會々員で長く小田原町に居住されたが近年東京市へ轉往された同氏の今年の年賀狀中にもエス語に言及されてゐるのを見て如何に熱心だつたかわかると思ふ。猶令息白羊氏も我々の同志である。ここに御遺族の方々に深く哀悼の意を表します

**橫濱** ★Verda Jupitaro——木曜例會 1 月 16 日 R.O. 誌の增頁計畫と J.E.I. 會

員募集の件に就き協議。出席 11 名。◇23 日間投詞に就いて（鈴木靜雄氏）出席 11 名。◇30 日自由會話。出席 5 名。◇2 月 6 日自由會話。Fabeloj III の輪讀を開始。19 時半より約 40 分。出席 8 名。◇13 日輪讀後飜譯研究（田山花袋——再び草の野に）出題佐久間氏。出席 10 名。

★ **Rondo Amikino**——新年相談會を 1 月26 日 14 時半森永キャンデーストアに持つ。出席 6 名。輪讀會の變更。用書の相談。16 時散會。輪讀會——毎木曜 17-19 時。メッセンヂャーボーイ事務所階上。用書 Historio de la lingvo Esperanta. 現在會員數 11 名（內學會々員 5 名）（會計）坂本春枝（例會）坂本忠子（記錄）吉川節。

**★英國同志の來訪**——2月上旬入港の P.O. 汽船 Cathay 號に同志の上船して居ることを矢島氏より知らせあり U.E.A. の富盛氏 2 月 7 日同船を訪れる。Thomas Mason と云ふ青年電氣技手だ。歡光局へ "Japanujo" を申込んで來たので判る。B.E.A. と U.E.A. の會員だ。この日吉田鹽川氏等と歡談。◇11 日は Elektra-Esp-Grupo の同志數名同船を見學。なほ同氏は再會を約し、12 日神戶へ向け出帆。

**★藤棚ロンド**——會場の都合により一時休講

## 今夏の日本エス大會

目下東京及名古屋の同志の參加者の便宜を計り鐵道及歡光協會と相談の上大カラバーノを計畫中。日本大會についての意見御しらせ下さい。3 月末日迄に。參加受付は旣に開始中。なるべく參加費 50 錢を早く拂込れたし參加章は 7 月中旬お送りする。

第 24 回日本エス大會準備委員會
札幌市南四條西十四丁目相澤治雄方

### 札幌

**★札幌エス會**——1 月 15 日初例會を開く。◇29 日出席 8 名、內婦人 5 名。◇2 月 5 日日本大會に備へてテキストを用ひず會話練習。◇6 日代議士候補者へエス語の意見を問ふ。◇會員增加運動は好成績で 17 日まで 9 名である。

### 小樽

**★小樽エス協會**——2 月 15 日福田方に總會を開く。事務所は從前通り綠町 4 ノ 1 坂下方。新役員、會長坂下淸一幹事、邊見敏男、高橋要一、藤川哲藏、小安秀桐野興太郎、江口晉吉、福田仁一の諸氏。◇この總會後小樽エス聯盟創立委員會を持つ。現存小樽に分立せる佛教、海事、會話の諸團體の團結を計り一致協力わがエス運動に盡瘁せんが爲めに。

**★小樽エス會話會**——會場を稻穗十字街 Olimpic 喫茶室に變更、毎月、第二、第四の水曜 19 時から。

**★小樽佛敎エス會**——今回札幌刑務所敎務課の希望に依り同所に就役中の esp-istoj の爲に La Lumo Orienta を今後引續き寄贈することゝなつた。◇例會は毎月 7, 14, 21, 28 日 19 時より量德寺書院に持つ。毎回出席者約 10 名。◇小樽エス文庫の設立——2 月 15 日より福田氏宅に。收容册數 37 册。1 册 1 週間 3 錢の講讀料。料金は新本の購入費に。同志諸君の後援を望む。

### 苫小牧

**★苫小牧エス會**——1 月 11 日 19 時岡垣氏宅に本年度第一回月例會を持つ。出席者 4 名。最近に於ける各會員の不振打開方法。學會よりの問合せに就き協議。尙工業生指導は今後鈴木春吉氏が擔當。◇1 月 18-25 日初等講習。1 月 19-28 日中等講習。◇2 月 7 日議員候補者へ質問書發送。◇1 月 9 日岡垣氏札鐵エス會の阿部、村山、太丸三孃と共に志文の岡本氏を訪ひ、來る日本大會に備へるべく會話練習並びに同大會に關し懇談。

### 帶廣

**★帶廣エス會**——1 月 31 日大吹雪にも狗らず塚田會長宅へ參集。フランス篇輪讀。文庫圖書 50 册突破祝賀會開催聽て設立さるべき圖書室の爲祝ふ。◇2 月 2 日全帶廣スケート大會にわが ĉampioninoj の堀中孃を先頭に黑澤、紺野兩孃はいずれも綠星旗ひらめかし、本會婦人部の意氣を示し、人々の注目の的となつた。◇11日我々一同は片手にスキーを、片手に綠星旗を打ち振り、驛頭へ集合、佐幌丘綠化の征途についた。車中では大いに氣焰を上げる。一同 Espero を合唱しつゝ頂上を征服、タギージョを合唱しつゝ歸途につく。（佐藤松男記）

### 金澤

**★金澤エス會**——1 月 16 日本年最初の例會を石浦町石川貯蓄に持つ。猛吹雪、出席 5 名。中川純次氏久振りの出席。伊藤春夫氏、東京より歸へられて始めて出席。一年振り。◇23 日例會出席 3 名。◇1 月 30 日夕東京矢島氏來澤、公用にて會員へ知らせる暇もなく由比、田中、坪田、松田の諸氏と丸越食堂に於て歡談、2 時間にして歸京さる。後、石川貯蓄に例會を持ち fabeloj の飜譯の割當その他協議。出席 4 名。◇2月 6 日例會出席 7 名。近藤孃、永島氏初出席。通譯の練習、色々面白い esprimo が飛出し爆

笑。◇13 日例會出席 8 名。◇桝野、清水、松田、長谷川の諸氏元旦早々フランスパーにて金澤醫大病院長石川博士、林北國新聞社長と額を合せ、エス論にメートルを上げる。尙石川博士は元同志でInernacia medicina revuoの名付親。

富山 **★富山エス會**——Vendreda kunsidoは最近至極振はず遂に暫時休止。その代り今後毎月 15 日 19 時より西町大丸食堂部に總會を持つ筈。◇2 月 15 日第 1 回會合を持つ、出席 9 名。主として本年北陸大會のことに就き協議。◇代議士候補者への質問狀は發送したが現在迄一通の返事もなし。總選擧後他の人達にも同樣の質問狀を發送の豫定。◇Marda Kunsido——エゾーボを使用中。この kunsido は昨年メソヂスト敎會主催の講習會以來のもの。本會はこの成績に鑑み近々日本キリスト敎會へも働きかけ出來れば同敎會主催の講習會を開き度い考へである。

---

### 第十回北陸エスペラント大會豫報

期日——5 月上旬(日滿博開催期間中)
場所——富山市にて
詳細は逐次發表、大會に對する勸告その他を希望す◇通信は富山局私書函第二十八號富山エス會宛のこと

---

名古屋 **★名古屋エス聯盟**——1 月 17 日19時半東新町角サンポウロ喫茶店に委員會を持つ。代表出席者は醫大及ルーマの二會の爲懇談にとゞめ、エス語放送、オリムピツク大會エス採用の件に就き協議。

**★名古屋エス會**——每火曜夜、中區鐵砲町 2 丁目白木氏方で輪讀會。2 月 4 日から«イワンの馬鹿» をよむ。出席每回數名。◇15日事務所を中區鐵砲町 2 の 25 白木欽松方へ移す。尙編輯部用の赤塚郵便局私書函は廢止。

**★ルーマ・クンシード**——1 月28日よりHeroeca Junulo en Oriento を使用。◇名古屋新聞販賣部階上に於ける會合は初・中等講習を主とし、同書を引續き使用中。◇10日創立四周年紀念茶話會を名古屋プレイガイド集會室にもつ。黑田氏司會 (1) Espero (2) 挨拶 (3) 經過報告 (4) 今年度役員決定 (5) 餘興。23時半散會。出席 18 名。尙名古屋新聞記者大石、井伊兩氏來賓として出席。

桑名 **★桑名エス・クンシード**——1 月 19 日 19 時新年第一回會合を持つ。四日市より福田、吉岡兩氏來會。出席 7 名。講習會開催、機關誌發行、雜誌回覽の件に就き協議。次に北勢の同志の團結を計り北勢エスペランチスト聯盟を結成の件可決。今春四日市大博覽會開催中に第一回總會を持つ豫定。後例會に入り、會話練習。京大の同志松岡君寄贈の京都コスモのチヨコレートに一同喜ぶ◇ 2 月 2 日 19 時五井氏宅。出席 3 名。會話練習。四月開催の豫定の講習會に就き協議。

奈良 **★奈良エス會**——奈良エス運動も昭和 7 年の事件以來さつぱり振はず現在 3 名。而し每金曜宮武氏宅に「中等讀本」の輪讀會あり。



京都エス聯盟 1 月例會 (西村氏撮影)

大阪 **★大阪エス會**——1 月 28 日上海 Jardine, Matheson 會社船舶部に勤め、上海 Esp. Ligo に屬する墺國同志 F. W. Ebner 氏來訪。舊知兒島他 7 名晚餐を共にし、例會に案內。日程の通り先づ Interpopola Konduto 輪讀の後 Ebner 氏の saluto あり。珍客を逸せず二次會を持つ主客交歡。會話にも油が乘る。前回來朝の時より東洋人の影響によりドイツ語流惡癖淸濁音の混合が餘程少くなつたのは更に愉快。◇2 月 4 日總選擧候補者に對する文書發送に大雪の一夜を過す。◇2 月 11 日新刊 AELA の Plena Gramatiko 第壹部 Kaloscay の發音篇に就き進藤 Collinson 並に Passy の著書に基き批評を發表、川崎と大いに論を鬪はす。出席者も多く賑ふ。

**3 月豫告** ◇3 月 17 日 18 時第三火曜日北濱野村ビル如水館にて Komuna Vespermanĝo. 後、平野町 La Trapezo で會話會、其他每火曜19時天六市民館に例會 (Interpopola Konduto 輪讀他) 但 10 日 O.E.S. 總會。

**★新星會**——久しく休んで居た週例會は今年 1 月から復活。每週土曜日 19 時用書の «Al Torento» 鑑賞、目下出席者 4-5 名。月例會は每月 20 日 19 時櫻橋農園フルーツパーラー二階に於て會話を主とする集ひ。會員の確立と會費領收を兼ねての會員證を目下製作中

本年度の役員、會計山口氏例會編輯竹內氏通信兒島氏。

神戶 **★神戶エス協會**——12月19日例會出席7名。宮本氏ザ祭會計報告。ザ祭の批評等雜談。新年初例會1月9日。◇1月3日會長月本氏宅に新年宴會を持つ。大阪、進藤、川崎、桑原、福原嬢諸氏。神戶、月本、安田、宮本の諸氏16名。新春に輝く吾等の運動は開始さる。◇1月9日例會出席7名。◇16日例會出席4名。◇23日例會出席9名。◇講習會開催、講師中村氏。3月10日より2ヶ月、毎火•金曜19-21時。當協會に於て。費、教材共2圓。◇25日上海より來朝のEbner氏を會長宅へ迎へる。最近の上海のエス運動を聽く。出席4名。◇30日例會出席7名。◇13日例會出席9名。Ebner氏も見える。同日9時入港の汽船Cathay號のMason氏を訪れ19時當協會來訪の約を得て、Ebner氏等と待つたが來なかつた。

戶畑 **★戶畑エス會**——北九州の同志の2月例會は八幡市通町11八幡エス會岩崎氏方に16日19時より開く。學會々員の充實に就き協議。後、會話練習。研究等あり。出席八幡3名、小倉1名、折尾1名、戶畑2名。

吳 **★吳エス會**——例會、毎土曜19-22時東畑町1矢野氏方、輪講(La Fundo de l' mizero)◇1月19日出席8名。◇26日出席3名。◇2月1日出席4名。◇8日出席5名。◇15日出席5名。◇今回會長に福島信後氏、副會長に高橋彰三氏就任され、兩氏の奔走により顧問に、市長松本勝太郎氏貴族院議員水野甚次郎氏、前代議士渡邊佐氏外20名の名士を推戴。新會長の下に近く活動を開始。

高知 **★高知エスクラブ**——1月26日14時中島町カフエーブラジル特別室に懇談會を持つ。須崎、赤岡より同志集る。(1) Etimologio研究——estro, precipe 藤田會長(2)大阪エス界現狀、辻氏(3)國際通信、橋田氏(4)躍進日本とエスペラント、井澤氏(5)內外エス界の前途、松本氏。縣立圖書館へエス書籍購入のpetskriboにsubskribiする。記念撮影。17時散會。

熊本 **★熊本エス會**——2月10日神尾氏宅に懇談會。出席10名。協議事項——(1) adresaroに就き(2)支部設立規約(3)機關紙《La Vojo》に關しイ、La Vojoは四季に發行。ロ、不定期にinformilo發行。ハ、本會正會員に無料配布。ニ、年額1圓を納むるを準會員。ホ、希望する地方會へ1部配布。ヘ、他會と新聞雜誌交換。(4)日本ペンクラブの飜譯にエス語採用を要請する事。



熊本工業の同志(右端坂崎氏)

大連 **★大連エス會**——會場の都合に依り目下輪讀會休止。近く再會の豫定。尙1月末淸津より同志大谷正一氏を當地に迎へたことは本會の輝かしい前途を思はせる。

---

## 第八回滿洲エス聯盟總會

時日——3月21日(土)春季皇靈祭
所——奉天、富士町、滿洲醫科大學內
催——午後2時より總會、後餘興、晩餐會あり、費二圓の豫定
週信は奉天、滿洲醫大、安部淺吉氣付
大會準備係宛

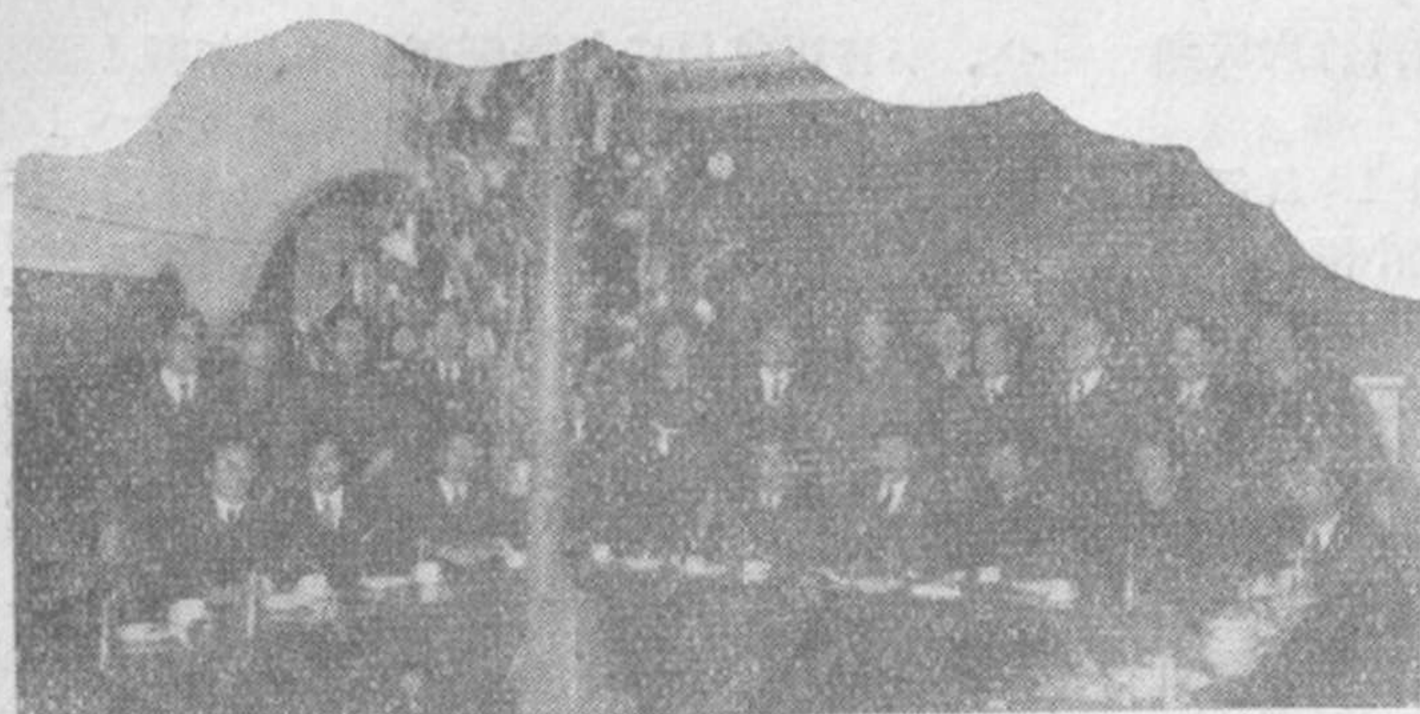
---

## ザメンホフ祭

整理の手ちがひその他郵便事故のため掲載のおくれたことをおわびします。

桑名 **★桑名エス・クシード**——12月15日19時旭ビルにザ祭開催。出席12名。四日市より福田、吉岡、山本、佐久間の諸氏一週間前東京より來られたS-ino松本、桑名中學より後藤、松本の兩君。(1) Espero (2)自己紹介(3)挨拶 加藤氏(4)ザメンホフに就いて 福田氏(5)エス文通に就いて 吉岡氏(6)餘興(7) Tagiĝo

廣島 **★廣島エス會**——(1)ザ祭(2)J.E.I.特使久保貞次郎氏歡迎會(3)「星影」編輯長奧村林藏氏幹事瀨尾正三氏入營祝賀會以上の會を、吳エス會と合同、12月14日19時金座街大隅洋行喫茶部に於て開催。偶商用で來合せたO.E.S.の進藤靜太郎氏の出席を得て、圖らずも吾國エス運動第一線の東西の兩雄を迎へ稀に見る盛會であつた。(1)會



右より〔前列〕小林、瀬尾、奥村、久保、進藤、星加、近藤、黒田。〔後列〕佐々木、野村、藤井、高橋、大島、矢野、村上、加藤、小田、玉井、池田の諸氏。

長高橋博士の開會の辭 (2) Espero (3) 黒田幹事の朗讀 «Preĝo sub la verda standardo» (4) 吳エス會矢野泰氏、ミサヽロンド小田信三氏、奥村氏の挨拶 (5) 村上氏の parolado (6) 記念撮影。次いで進藤氏エス語にて Esp-istoj の進むべき道を Zamenhofaĵoj の精讀を强調。最後に久保特使エス語にて挨拶。後邦語を以つて J.E.I. の運動方針、地方會との連絡等に就き說明と希望を述べ、深更に及び野村幹事の閉會の辭。進藤、久保兩氏を奥村野村氏本會を代表し見送る。(上揭寫眞參照)。

宮崎 ★宮崎エス會——12月15日19時半郡司氏宅に、第5回總會を兼ね、本年は modeste にザ祭開催。出席 19 名。司會崎村氏。(1) Espero (2) 開會の辭 杉田氏 (3) 總會決議事項可決。役員選定、(會計)渡部 (庶務) 川野、菊地 (機關誌) 山下 (文庫) 杉田 (4) ザメホフ漫談、杉田氏 (在獨の會長日野博士の親友北尾敎授來賓としてお話 (6) 自己紹介 (7) 外國文通經驗談、杉田孃 (8) 閉會の辭、杉田氏。



旭川エス會ザメンホフ祭

長崎 ★長崎エスクラブ——12月15日17時成隣會館にて。久保特使の來崎の後とて豫想外の盛會。40名。數名の會員が徹夜でつくつたリテラ塔 (Litera turo) を立て晩餐。19時高原會長の挨拶植田氏のザ博士略傳田中氏詩朗讀次いで 10 年度中の功勞者として田中、後藤、岡村、西、轟、佐藤、中川、藤原、井手尾、松尾の十氏の表彰式をなす。續いて數氏の感想談あり餘興に興じ2時散會。(前號寫眞參照)

## 街のエス語

★千駄ケ谷シンガーミシン營業所 (澁谷區千駄ケ谷町3の491) の「基督敎新聞」の廣告に "Singer serving machine" estas la plej bona sewanto en ĉiu hejmo とエス文が入つてゐて仲々面白い。

★鮮文「三千里」のエス欄——既報の如く「三千里」2月號からエス欄ができた。卷末12頁である。同誌は菊版300頁の大册ですべて鮮文で書いたもの。エス欄は對譯になつてゐる。その內容は編輯部のエス欄の辯及歐洲各國の同志よりの手紙。外に金東仁原作全億氏エス譯 Batato あり。(價30錢、〒2錢。發行所京城府鐘路二丁目九一三千里社)。

## 新聞雜誌とエス語

～本欄宛の材料御送付を乞ふ～

★河北新報(1月31日)——エス語を正科に (東京府立第六高女の事) (記事)

★東京日日新聞 (1月30日) —— 同上記事——中に市河三喜氏の意見發表あり。

★東京日日新聞 (2月6日)——エス語——淺田博士投書。

★東京日日新聞 (2月11日城北版——女學校の外國語 (投書)

★醫藥新報 (2月1日)——國際醫學雜誌日本で出る事 (記事)

★北海タイムス (2月13-14日)——正課になつたエスペラント (寄稿)

★サンデー每日 (2月9日號)——女學校と世界語 (阿部眞之助氏)

★南國日報 (1月24日, 2月1日)——エスペラント及その實際について——ユスツーロ・ウー氏

★大阪每日新聞 (2月12日三河版)——世界卅五ケ國にニッポン紹介——小林淸氏についての記事

(以下31頁へ)

# 感　　謝

本誌増頁の爲新維持員御勸誘下さいました下記の地方會の方々と維持員の方々に誌上を以て厚く感謝致します。お蔭をもつて豫定の百名を突破し百四十五名（外に未定3名）となりました。それで本誌も本年中は本文40頁を持續することができます。

財團法人日本エスペラント學會 R. O. 編輯部

＊ 印は正維持員

**東京** ★東京鐵道エスペラント會（大島完一*、高橋菊藏*、鎌田秀治*、百瀨博*、林秋雄、藤田春雄、野上道子、橋本壽治の８氏）

★クララ會:—(井田千枝子、加藤孝一の２氏）

★エスクラピーダ・クルーボ（篠田榮通氏）

★慶應醫學部エス會（川上理一*、都川正の２氏）

★三家三雄氏（深川武夫氏）

**横濱** ★横濱エス協會（三橋專藏、吉川節、澁谷富子、坂本春枝、宮崎二郎*、佐々木幸太郎、石井道男*、並木竹次の７氏）協會の中の YMCA エス會及アミキーノ會が努力されたことを感謝します。

**館野** ★日本エス學會館野支部（飯塚道弘、石井顯治、梅村基、大久保章、眞田幸雄、杉浦政一、矢部了、山本巖一の８氏）

**仙臺** ★島貫清子孃（2名）

**盛岡** ★盛岡エス會（小原小二、安本靜江、伊藤敏夫、脇坂圭治の４氏）

**札幌** ★札幌エス會（東隆、木村喜任治、佐藤德治の３氏）

★札鐵エス會 小森政雄、仁岸睦夫、太丸マツ、後藤喜六の４氏）

**小樽** ★小樽エス協會（小安秀、高橋要一、岡崎英治、本間源吾の４氏）

**苫小牧** ★苫小牧エス會（川原田彌一郎、村山白助の２氏）

**帶廣** ★帶廣エス會（長谷川守、菅沼寛、黑澤正子、佐藤松男の４氏）

**秋田** ★秋田エス會（根本穆氏）

**新潟** ★新潟醫大エス會（帆刈喜四男、鈴木信一、渡邊宏の３氏）

★北越エス會（宮島桃助氏）

**城端** ★城端エス會（野村誠四郎氏）

**靜岡** ★靜岡綠星クラブ（岡部源吉、飯塚傳太郎の２氏）

**金澤** ★金澤エス會（大崎一郎*、永島松太郎、相坂成盛、山田外吉の諸氏——未確定)。

**七尾** ★七尾エス會（松任幾久郎氏*）

**名古屋** ★名古屋エス會（鈴木宗彥、熊守湖の２氏）

★名古屋醫大エス會（福慶逸郎、立松進の２氏）

**四日市** ★四日市エス會（吉岡トラオ、神尾秋三、山本周太郎、稻垣奉吉、井上政太郎の５氏）

**桑名** ★桑名エスクンシード（伊藤貞三氏）

**京都** ★京都エス聯盟（中原修司、赤田熊義の２氏）

**大阪** ★新星會（原正三、中本賢司、北村翠紅*、山本義郎*、山口榮之助*、竹田潮の６氏）

★大阪鐵道エス會（小宮知司、松木孝太郎、今澤武人の３氏）

**岸和田** 岸和田エス會（西田亮哉氏）

**神戶** ★神戶エス協會（前田健一*、和田俊彥*、上妻武治*の３氏）

**廣島** ★廣島エス會（高橋謙、加藤博治、佐々木忠の３氏）

**吳** ★吳エス會（村上芳樹、應和進、星加矛、平川壽、近藤正二、大澤一人の６氏）

**高松** ★高松エスクラブ（平良文太郎、廣瀨清人、浮田勝造の３氏）

**松山** ★松山エス會（村上シズ子氏）

**高知** ★高知エスクラブ（藤田穗ニ氏）

**久留米** ★九州醫專エス會（磯部幸一氏）

**飯塚** 飯塚エス會（都甲國久、小島德三郎、片山政子*、高取春子、武內敏治、渡邊一の６氏）

**行橋** ★行橋エス會（豐守親、笹原大乘の２氏）

**大牟田**　★大牟田エス會（中川年男、白濱益夫、今里忠、今村芳雄、井上守、坂本春義、內村義雄、梅崎村夫、石橋茂、田中忠義の 10 氏）
**熊本**　★熊本エス會（大谷傳三郎、長崎たき、廣岡美智子、鶴野六良、井上靜、藤芳文子、三浦隆、玉城清子、河村光城、濱本和男*、本田正男*の 11 氏）
**宇土**　★宇土エス會（江田威臣氏）
**長崎**　★植田高三氏（河野吉男、岡村豪二、西仁壽、後藤正彥、末次逸馬の 5 氏）
**宮崎**　★宮崎エス會（杉田笑子、菊池イネ子、本部令宣、川野繁男、兒玉安男の 5 氏）
**大津**　★大連エス會（森原奎二氏）
**奉天**　★長坂雄二郎氏（山本朝造、上野潔士、小宮山正已、達井貞雄の 4 氏）。

# 新維持員氏名紹介

## 第二回發表

——1月15日から2月15日までの會費拂込濟みの新入會者——

〔普〕とあるは普通維持員、他は正維推員、括弧內ば紹介者。誌面の節約上、敬稱省略。

**東京**　大島完一、小林胖、蒲生英男、史文煜、島貫きよ子、柴田省三
〔普〕阿万惣次郎（水口俊明）、樋口幸吉
**横濱**　宮崎二郎（石黒捷三郎）、石井通男
〔普〕佐々木幸太郎、坂本春江、澁谷富子、並木竹治、三橋専藏
**吳**　〔普〕大澤一人、應和進、近藤正二、平川壽、星加勇、村上芳樹
**名古屋**　板津修二、立松進
〔普〕福慶逸郎、山崎佐一
**神戸**　和田俊次
〔普〕柳喜太郎、小林可也
**南洋**　中山長正、東秀雄
**廣島**　高橋謹
〔普〕加藤博治
**兵庫**　松田小三郎
〔普〕龜谷幾重
**長崎**　古屋野宏平
〔普〕佐藤靜子
**苫小牧**　〔普〕川原田彌一郎、村上自助
**京都**　〔普〕赤田熊義、中原脩二
**高松**　浮田勝造
**久留米**　磯部幸一
**北海道**　根本穆
**千葉**　水口俊明
**鹿兒島**　渡邊太郎
**大連**　吉村千代子
**宮城**　〔普〕大泉八郎
**德島縣**　〔普〕大栗清實
**三重縣**　〔普〕伊藤貞二
**飯塚**　〔普〕片山政子
**宮崎**　〔普〕川野繁男
**帶廣**　〔普〕佐藤松男
**福岡縣**　〔普〕田中顯道
**富山縣**　〔普〕野村誠四郎
**香川縣**　〔普〕松原金次郎
**佐賀縣**　〔普〕山崎彥一
**群馬縣**　〔普〕彌勤寺清
**四日市**　〔普〕吉岡登良夫

# 新入會員地方別

「正」は正維持員、「普」は普通維持員、括弧內の數字は一月からの通計

〔都市〕（人口十萬以上の都市、人口順）**東京**正 6 普 2 計 8（19）；**大阪** 0（4）；**名古屋**正 2 普 2 計 4（6）；**神戸**正 1 普 2 計 3（4）；**京都**普 2（3）；**横濱**正 2 普 5 計 7（8）；**廣島**正 1 普 1 計 2（4）；**福岡** 0（1）；**長崎**正 1 普 1 計 2（2）；**函館** 0（1）；**吳**普 6（6）；**仙臺** 0（1）；**札幌** 0（2）；**鹿兒島**正 1（1）

〔道府縣〕 **北海道**正 1 普 3 計 4（5）；**岩手** 0（1）；**宮城**普 1（1）；**群馬**普 1（2）；**千葉**正 1（3）；**神奈川** 0（1）；**富山**普 1（1）；**石川** 0（1）；**山梨** 0（1）；**長野** 0（1）；**靜岡** 0（1）；**三重**普 2（2）；**京都** 0（1）；**兵庫**正 1 普 1 計 2（2）；**德島** 普 1（1）；**香川**正 1 普 1 計 2（2）；**愛媛** 0（1）；**福岡**正 1 普 2 計 3（5）；**佐賀**普 1（1）；**大分** 0（1）；**宮崎**普 1（1）；**鹿兒島**正 1（2）

〔鮮臺滿その他〕 **奉天** 0（2）；**大連**正 1（1）；**臺南** 0（1）；**朝鮮** 0（1）；**滿洲** 0（1）；**南洋**正 2（2）

**合計**　正 22（49）　普 36（57）　**總計**　58（106）

# 衆議院議員立候補者のエス語に關する意見

今回の衆議院議員總選擧に際し立候補者に對し次の様な質問を各地方會及會員の方々にお願ひして發送した。

一、 貴下は國際交通、運輸、商業、通信、學術、文化交換、外交その他國際生活の分野における國際語エスペラントの必要を御認めになりますか

二、 貴下は我が國の中等學校の外國語授業の全部又は一部を割いてエスペラントを課することに賛成なさいますか。

三、 其他エスペラントに關する貴下の御考へ

まだ全部回答が集つてをらないが之迄に學會へ送附された回答(猶一通も回答に接せざる旨の御通知も二三參つてゐます)につき中間報告をします。(2月25日現在)

**財團法人日本エスペラント學會宣傳部**

回答をよこされた候補者氏名を賛否により分類次に記載します。(委しい理由その他は別にまとめて發表します。)(氏名の下殿を省略)

**賛成** 〔東京1區〕鈴木梅四郎、藤原俊雄〔2區〕安部磯雄、森脇源三郎、長濱繁、長野高一〔3區〕遠藤千元、田川大吉郎、安藤正純〔4區〕眞鍋儀十、淺沼稻次郎〔5區〕期波貞吉、三上英雄、加藤勘十〔6區〕中村繼男、佐藤正、鈴木文治〔7區〕中村高一〔神奈川1區〕津久井龍雄、岡崎憲〔千葉2區〕今井健彥〔茨城1區〕豐田豐吉〔3區〕風見章、山本粂吉、海老澤爲次郎〔栃木2區〕木村淺七〔宮城1區〕菊地養之輔〔北海道1區〕岡田伊太郎〔新潟1區〕松井郡治〔富山2區〕山田毅一、島田七郎右衛門〔石川1區〕永井柳太郎〔長野3區〕小擨完次〔愛知4區〕小笠原三九郎〔三重1區〕伊坂秀五郎、服部米次郎〔大阪3區〕山根敏三、池崎忠孝〔4區〕手島剛毅〔6區〕松田竹千代〔兵庫4區〕清瀨一郎〔廣島1區〕高橋武夫〔高知1區〕池田頼信〔福岡1區〕松本治一郎、前田幸作〔2區〕田島勝太郎〔熊本2區〕上塚司、中野猛雄

**反對** 〔東京第1區〕横井春野

**將來エス語研究したし** 〔北海道1區〕木下三四彥

**未だ研究せざるにつき解答しえず** 〔神奈川3區〕鈴木英雄〔栃木1區〕磯瀨一〔廣島1區〕荒川五郎

候補者不在につき回答不能との代人よりの返事 〔和歌山2區〕角猪之助

白紙無署名 〔茨城1區 葉梨氏へ出したもの〕

---

上記立候補者に問合せを出していたゞくため次の如き地方會及學會會員各位の御助力をお願ひしました。こゝに厚く感謝致します。

〔東京〕學會〔京都〕京都エス聯盟〔大阪1-4〕大阪支部〔5〕吹田鐵道エス會〔6〕岸和田エス會〔神奈川1〕横濱エス協會〔2〕林學氏〔3〕鈴木清氏〔兵庫1〕神戸エス協會〔2〕尼崎エス會〔3〕多木燐太郎氏〔4〕姫路エス會〔長崎1〕長崎エス會〔2〕野田駿太郎氏〔新潟1〕北越エス會〔2〕川又憲治氏〔3〕關克己氏〔埼玉1〕浦高エス會〔3〕石川瑞技氏〔群馬1〕前原準一郎氏〔2〕村上孝子氏〔千葉1,3〕千葉エス會〔2〕高橋太一氏〔茨城1〕林傳平氏〔3〕館野支部〔栃木1,2〕宇都宮エス會〔奈良〕宮武正造氏〔三重1〕四日市エス會〔2〕神都エス會〔愛知1〕名古屋エス會〔2〕山口竹千代氏〔3〕黒宮孝壽氏〔4〕大野弘得氏〔5〕小林清氏〔靜岡1〕靜岡綠星クラブ〔3〕龜山脩平氏〔山梨〕甲府エス協會〔滋賀〕滋賀エス聯盟〔岐阜1〕岐阜エス會〔2〕新井憲一氏〔長野1〕長野エス會〔2〕松代エス會〔3〕飯島道夫氏〔4〕松本エス會〔宮城1〕仙臺支部〔2〕南八郎氏〔福島1〕郡山エス會〔2〕五十嵐正己氏〔3〕中井俊基氏〔岩手1〕盛岡エス會〔2〕熊谷冷光氏〔青森1〕三田智大氏〔2〕谷山弘藏氏〔山形1〕篠田秀男氏〔秋田1〕秋田エス會〔2〕横手エス會〔福井〕敦賀エス會〔石川1〕金澤エス會〔2〕七尾エス會〔富山1〕富山エス會〔2〕城端エス會〔鳥取〕横山重次氏〔島根1〕松澤省一氏〔2〕田部信氏〔岡山1〕岡山エス會〔2〕桃川勘治氏〔廣島1〕廣島エス會〔2〕呉エス會〔3〕尾道エス會〔山口1〕野原休一氏〔2〕町田弘繼氏〔和歌山1〕小笠原譽至夫氏〔2〕田中正美氏〔德島1〕大栗清實氏〔2〕内田譽氏〔香川1〕高松エスクラブ〔2〕木村童本氏〔愛媛1〕松山エス會〔2〕松本冷鹿氏〔3〕北脇保喜氏〔高知1〕高知エス會〔2〕松本冷鹿氏〔福岡1〕福岡支部〔2〕飯塚エス會〔3〕大牟田エス會〔4〕行橋エス會〔大分1〕大分エス會〔2〕別府エス會〔佐賀1〕菊地行藏氏〔2〕久住久氏〔熊本1〕熊本エス會〔2〕宇土エス會〔宮崎〕宮崎エス會〔鹿児島1〕重松達一郎氏〔北海道1〕札幌エス會〔2〕旭川エス會〔3〕函館エス會〔4〕室蘭鐵道エス會〔5〕帶廣エス會

以上の外にもいろいろ助力を願つた地方會もあります。戸畑エス會では候補者田島氏の好意的回答をえて早速同氏推薦のハガキを印刷、關係者へ配布されました。旭川エス會は學會宛手紙類を返送して來られた。(理由不明。)

# 新着再着洋書

Rolf Nordenstreng:

## LA HOMAJ RASOJ DE LA MONDO

四六判二百十二頁・用紙上等・印刷鮮明
寫眞版數百個入・定價**二圓十錢**・送料**六錢**

エスペラントで出るべくして出なかつた原作の人種學の文獻。平易にして卑俗に墮ちず，科學的にして生硬に失せない，良心的な一般向き科學書である。相貌，體格等肉體的方面から地上のあらゆる人種の特徴を說き，これを說明するに貴重な寫眞版數百個を收めてある。

---

K. Kalocsay — Waringhien:

## LA PLENA GRAMATIKO

**改正定價三圓十錢・送料十五錢**

第一回入荷四十五部を忽ち賣りつくし暫く品切れのところ第二回入荷。定價は別項廣告のとほり新爲替政策により價下げされたため，前回の特價と殆んど大差ないことになりました。またも賣切れぬうち至急註文を。今回の入荷は僅かに二十三部です

---

Fructier Grenkamp:

## KOMPLETA GRAMATIKO

### KAJ VORTFARADO (特價提供)

**定價二圓・特價一圓五十錢・送料六錢**

本書の聲價についてはすでに定評のあるところ，Plena Gramatiko と併せ讀むことをおすすめする。特價は今回入荷の三十部限り。

---

## ENCIKLOPEDIO DE ESPERANTO I-II

**改正定價九圓十五錢・送料三十三錢**

エスペランチストの必ず備へおくべき本書が驚くべき廉價となりました。この機を逸せず，ぜひ，あなたの書架をお飾りください。

---

東京本鄉元町・一　財團法人　**日本エスペラント學會**　振替東京 11325 番　電話小石川 5415 番

# LA XXIII-A KONGRESO

DE

# JAPANAJ ESPERANTISTOJ

---

## OFICIALA PROTOKOLO

---

NAGOJA

La 22–24-an de Septembro, 1935

# PREPARADO

Ĉe la XXI-a Kongreso en Kioto, Nagoja Esperanto-Ligo proponis inviton de la sekvanta kongreso al nia urbo. Samtempe Kiuŝuu Esp.-Ligo ankaŭ proponis inviton, kaj ni konkuris. Ili havis pli bonan kondiĉon ol ni por okazigi kongreson, t. e. Nagasaki havos en aprilo de sekvanta jaro Internacian Ekspozicion de Industrio kaj Turismo, kiu donos bonan ŝancon propagandi nian lingvon. Ni decidis cedi al ili por komuna prospero de nia movado.

Ĉe la XXII-a Kongreso en Nagasaki, ni refoje proponis kaj akiris unuaniman akcepton de la ĉeestantoj.

En la lasta jaro S-ro M. Inoue, S-ro K. Ossaka kaj eksterlanda samideano S-ro J. Major translokiĝis al nia urbo kaj donis bonajn konsilojn al ni, kiuj penadis prepari la kongreson. Stimulite de ili, kun freŝa kuraĝo ni plie koncentrigis nian energion. Tamen ve, tuj poste unue S-ro Inoue foriris de nia urbo, kaj poste S-ro Ossaka ankaŭ pro oficŝanĝo. Krom tio S-ro Ŝibata, ĉefredaktoro de Nagoja ĵurnalo kaj kiu estis ankaŭ unu el energiaj komitatanoj por la preparado, eksiĝis kaj transloĝiĝis al malproksima kamparo pro malsano.

Ni perdis iom da kuraĝo, sed ni daŭre kaj konkorde antaŭenmarŝis por sukcesigi la celitan kongreson kaj la kongrestagoj fine venis.

## PREPARA KOMITATO

Prezidanto: S-ro H. Jazaki.

Kaso, Informado kaj Korespondado: S-roj H. H. Yamada, Ĝ. Takenaka kaj G. Izaŭa.

Informilo kaj Kongresa ĵurnalo: S-ro M. Tanimura.

Kunloĝejo: S-ro K. Siraki.

Akcepto ĉe stacidomo: Societanoj de Nagoja Medicina Fakultato.

Kongresejo (Dekoracio kaj aliaj aranĝoj): S-ro K. Siraki kaj anoj de Nagoja Luma Kunsido.

Fakkunsidejo: S-roj T. Asano kaj Ŝ. Hajasi.

Ekskurso: S-ro S. Macumoto kaj societanoj de N. M. F.

Publika Propaganda Kunveno: S-ro J. Miŭa.

Komuna Vespermanĝo: S-roj T. Naitoo kaj J. Miŭa.

Memorfotografado kaj Ilustritaj poŝtkartoj: S-roj K. Hajaŝi kaj K. Ikeda.

Insignoj kaj Sigelmarkoj: S-ro Ĝ. Takenaka.

Oratora Kunsido: S-ro T. Ueĵima.

## PROGRAMO

**LA UNUA TAGO**: la 22-an de Septembro, Dimanĉo.

Kongresejo: Urba Publika Kunvenejo

8.00 Malfermo de la akceptejo

9.00—10.30 Malferma Soleno

1. Ĥoro de "Kimigajo"
2. Saluto de Prezidento de Prepara Komitato
3. Nomado de Estraro de la Kongreso
4. Saluto de Honora Prezidanto de la Kongreso
5. Saluto de Prezidanto de la Kongreso
6. Ĥoro de "Espero"
7. Salutoj de Reprezentantoj de lokaj kaj fakaj grupoj
8. Laŭtlego de Gratulaj Telegramoj kaj Leteroj
9. Ĥoro de "Tagiĝo"

10.30—11.30 Ĝenerala Kunsido de Japana Esperanto-Instituto

11.30—12.50 Fotografado

Komuna Tagmanĝo regalita de la Urbestro

13.00—17.00 Laborkunsido

18.00—22.00 Interkonatiĝa Vespermanĝo kaj amuzaĵoj

**LA DUA TAGO**: la 23-an de Septembro, Lundo.
Kunsidejo: YMCA-domo

9.00—12.00 Fakkunsidoj

1. Literatura F. K. 2. F. K. pri "Enkonduko de Esperanto en mezgradajn lernejojn"
3. Kristana F. K. 4. Scienca F. K. 5. Studenta F. K. 6. Farmacia F. K.
7. Budaisma F. K. 8. Fervojista F. K. 9. Medicina F. K,

14.00—17.00 Daŭrigo de Ĝenerala Kunveno de JEI (anstataŭ Oratora Kunsido)

**LA TRIA TAGO**: la 24-an de Septembro, Nacia Festotago
Ekskurso al ĴOOKOOĴI

8.00 Kolektiĝo je la Stacidomo Ĉikusa

8.30 Ekveturo al Ĵôkôji

9.00 Alveno al Ĵôkôji kaj al la Restoracio "Senzai-Rô"

9.30 Raportoj de Fakkunsidoj

Tagmanĝo kaj amuzaĵo

Ferma soleno

# LA UNUA TAGO

*La 22-an de Septembro*

## MALFERMA SOLENO

Jam je la oka horo antaŭ la akceptejo de la kongreso tumultas multaj gesamideanoj el diversaj lokoj en nia lando. Laŭlonge de la koridoro, aŭ sur la verando antaŭ kongresĉambro pleniĝas gaja babilado.

Grandaj "Verdaj Standardoj" antaŭ la verando kaj malantaŭ la estrado; verdaj freŝaj pinarboj antaŭ la estrado.

Ĉe enirejo de la kongresĉambro, ĉarmaj infanoj disdonis al ĉiuj gepartoprenantoj la memoraĵojn ("Japanujo", gvidlibro eldonita de de Japana Turisma Oficejo, subtasoj donacitaj de S-ro K. Siraki, k. a.), dirante en Esperanto "Bonvenon" aŭ "Bonvole". Melodioj, kiujn gramfono senĉese forsendadis, al verda atmosfero en la kongresejo aldonis pli freŝan harmoniecon.

S-ro Ooiŭa, Uurbestro, kaj S-ro J. Sakamoto, ĉefo de eduka fako de la urbo, ankaŭ alvenis.

La malferma soleno komenciĝis de ĥoro de "Kimigajo".

## Saluto de prezidanto de la Prepara Komitato.

Estimataj Gesamideanoj!

Mi havas honoron saluti al vi reprezentante Preparan Komitaton. Elkore mi esprimas "Bonvenon" al ĉiuj gepartoprenantoj.

Post kiam ni formis Preparan Komitaton sufiĉe longa tempo fluis, tamen rezultita nuna Kongreso estas difektoplena kaj nekontentiga.

Ĝenerale esperantistoj estas neriĉaj. Kvankam ni havas interne pasion flamiĝantan, nia malforta ekonomio ne tiel bone konkordas kun ĝi. Plie ni ĉiuj estis okupataj pro siaj okupoj. Ni ardadis, sed bedaŭrinde ni nur povis efektivigi ne ĉion. La ĝenerala al skalo de la nuna Kongreso estas malgranda, tamen ni celis aperigi intiman atmosferon. Estimataj gepartoprenantoj, bonvole akceptu nian sincerecon por komuna bono.

Due ni eprimas koran dankon al proponintoj, kiuj prezentis seriozajn temojn diskutotajn en laborkunsido. Unuj el ili certe ĵetos grandan influon al tutmonda esperantujo; la aliaj malfermos novan fronton sur nia komuna movado.

Trie ni esprimas dankon al gesinjoroj, kiuj donis al ni favoran subtenon spirite aŭ materie, per kio ni apenaŭ plenumis nian taskon.

Permesu al mi nomi estraron de la Kongreso:

kiel Honoran Prezidanton, Urbestron S-ron Ooiŭa,
„ Prezidanton, S-ron H. H. Yamada,
„ Sekretariojn, S-rojn K. Siraki, Ĉ. Jui, S. Macumoto, M. Ozaki, M. Tanimura, T. Asano kaj Ĝ. Takenaka

Ĉiuj ĉeestantoj! Mi petas vian aprobon. (aplaŭdo)

## Saluto de la Honora Prezidanto.

祝　　辭

ザメンホフ博士ノ創案セル國際語ハ未ダ五十年ナラズシテ幾多同種ノ考案ヲ一蹴シ今ヤ全世界ニ普及シテ其ノ使命ヲ達成シツツアリマスコトハ誠ニ偉大ナル功業ト敬服スル次第デアリマス我國ニ於キマシテモ旣ニ今回ガ第二十三回ノ大會ヲ迎ヘラレマシテ全國ヨリ其ノ道ノ權威

者ガ御參集ニナリ種々御研究ノ上氣勢ヲ揚ゲラレマスコトハ斯界ノ爲メ御同慶ニ堪ヘヌ所デ頗ル欣快ニ存ジマス

抑々國家ニトリマシテ國語ノ重要ナルコトハ申スマデモアリマセン卽チ古來ノ歴史ニ依ツテ培養セラレマシタル其國民精神ノ表徵トシテ其國ニ發達致シマシタ言葉ハ決シテ失ツテハナラヌモノデアリマス世界各國ノ言葉ガ皆サウイフ生命ヲモツテ居リマスノニ科學ノ發達ハ日ニ月ニ世界ノ距離ヲ縮少セシメ國際ノ關係ハ時々刻々交渉ヲ深ウシテ參リマス卽チ人類ノ意志疏通ハ決シテ限ラレタル一國語ヲ以テ完全ニ果サルベキモノトモ覺エマセン玆ニ世界語國際補助語ノ意義ガ成立スルト存ジマス各位ノ熱心ニ唱導セラレツツアル「エスペラント」ハ實ニ此ノ間ニ活躍スベキ領野ヲ有シ然カモ語ノ成立文法ノ組織ガ極メテ簡易デアリマスル所ヨリ今日デハ旣ニ各方面ノ實用ニ供セラレテ居リ世界文化ニ貢獻セル功績頗ル甚大ナルモノガアリマス

今ヤ我國ハ政治ニ學問ニ藝術ニ世界ノ文化ニ伍シテ毫モ遜色ナキノミカ正ニ世界ヲ敎エ世界ヲ導カントスルノ槪ガアリマス之レ等思想ノ普及ハ實ニ「エスペラント」ニ依ルヲ最モ捷徑ト致シマス曩ニ國際聯盟・萬國赤十字會議・萬國商業會議等ニ於イテ「エスペラント」使用ヲ奬メテ居リマスノヲ觀マシテモ如何ニ其ノ勢力ヲ認メラレツツアルカガ能ク判ルノデアリマス

各位ハ此ノ希望ノ光リヲ綠色ニ表現シテ綠化運動ヲ標榜シテオキデニナリマスガ愈々其ノ普遍徹底ニ邁進セラレンコトヲ望ンテ止ミマセン

所感ノ一端ヲ述ベテ祝辭ト致シマス

昭和十年九月二十二日

名古屋市長 大岩勇夫

## Saluto de la prezidanto.

Estimataj Gesinjoroj! Laŭ la voĉdono mi nun havas honoron preni la prezidantecon de tiu ĉi kongreso. Mi kredas, ke oni metis min en tian honoran rolon nur tial, ke mi iom longe laboradis por nia movado kiel servisto de nia kara lingvo, kvankam mi ne kapablis doni notindan bonon al la movado.

Antaŭ ĉio, kiel prezidanto, mi volas esprimi elkorajn dankojn al vi, ĉiuj ĉeestantoj, en la nomo de la kongreso kaj samtempe de la prepara komitato, ĉar la kongreso estas honorigita pro bonkora ĉeesto de niaj karaj samideanoj, precipe de tiel multe da eminentuloj en nia Esperantujo. Dank' al tio nia 23-a kongreso povis esti malfermata en tiel brila sukceso.

Ni, ĉiuj, hodiaŭ kolektiĝis el lokoj proksimaj kaj malproksimaj sub la sankta standardo en la kongresejo. Tiun renkontiĝon, kiom longe ni ja atendis! Mi kredas, ke certe tiu ĉi urbo estas la plej konvena loko por Esp.-kongreso, ĉar en la urbo iam naskiĝis Hidejoŝi, kiu estas plej potenca heroo kaj batalis por ordigi nian tutan landon. Ni esperantistoj estas ankaŭ senlacaj batalantoj por la sankta celo helpi la tutan homaron el la lingva ĥaoso.

Estimataj Gesinjoroj! Nagoja Kastelo mondfama pro sia glora imponeco silente staras en nia urbo, kiel vi jam vidis ĝin el la fenestro de la kuranta vagonaro, aŭ vi certe vidos dum la restado en nia kongresa urbo.

Mi kredas, ke eĉ la kastelo ĝojas pro la vizito de vi, kiuj celante la bonon de la

homaro senĉese laboradas por konstrui pli grandiozan porhomaran konstruaĵon ol la kastelon en nia urbo.

Oni ne nur kontentu nek fieru pro la jam konstruita kastelo aŭ pro la nun bonorde farata porhomara konstruaĵo, kiu estas nomata Esp.-movado, sed memoru la jam oferitajn laborojn por ili.

Okaze de tiu ĉi malferma soleno, mi petas de vi permeson saluti al la animo de nia genia majstro, Zamenhof, kaj samtempe al la animoj de la sennombre multaj samideanoj, kiuj iam sindone bataladis kaj jam ne vivas.

Elkoran dankon al vi, ĉiuj ĉeestantoj, kiuj al la kongreso donis subtenon spiritan aŭ materian. Tutkoran deziron al vi, ke bonvole en kongresa atmosfero ĝuu plej varmegan amikecon kaj fratecon kun la ideo, kiu nin ĉiujn ligas. Tiel, kun altrespekto mi finas mian saluton.

## SALUTINTOJ REPREZENTANTE FAKAJN AŬ LOKAJN GRUPOJN.

S-ro Kenĵi Ossaka de Japana Esperanto-Instituto, Fondacio Jure Personigita.

S-ro Takezô Aoki el Japana Esperantista Ligo Fervojista, Tokio.

F-ino Miĉi Nogami el Tokio Fervojista Esperanto-Rondo.

F-ino Maki Manzaŭa el Tokia Esperanto-Klubo.

S-ro Oosaki el Universala Homama Asocio, Kameoka.

S-ro Kiŝô Kamimura el Esperanto-Propaganda Asocio, Kameoka.

S-ro Hideiĉi Cuĉija el Nova Stelo-Societo, Oosaka.

S-ro Ĵiniĉi Hukuta el Otaru Esp.-Societo.

S-ro Kazuma Harada el Ligo de Tokiaj Esperantaj Kunsidoj.

S-ro Jukio Onoda el Societo de Orienta Kulturo.

S-ro Mikizô Sugijama el Jokohama Esp.-Asocio.

S-ro Haruo Aizaŭa el Hokkaidô Esp.-Ligo.

S-ro Sukeharu Sugano el Kanazaŭa Esp.-Grupo.

S-ro Ĉûnoŝin Jui el Elektro Esp.-Grupo.

S-ro Takaŝi Tateiŝi el Kôhu Esp.-Asocio.

*S-ro Toŝihide Kuŭahara el Oosaka Esp.-Societo.

F-ino Humiko Hukuhara el Orkidaro-Grupo, Oosaka.

S-ro Kaiĵô Nagai el Kôbe Esp.-Asocio.

**S-ro Kenrjô Kanemacu el Esp-Grupo de Ootani Universitato.

S-ro Kei Sibajama el Japana Budhana Ligo Esperantista, Kioto.

S-ro Masao Hukuta el Jokkaiĉi Esp.-Societo.

S-ro Saburobei Ŝiho el Takaoka Esp.-Societo.

S-ro Tôru Hattori el Kioto Esp.-Ligo.

---

De signo * al ** estis farataj en la tagkunmanĝo, kaj de signo ** al la fino estis farataj en la vesperkunmanĝo.

S-ro Joŝimi Hajaŝi el Iĉiŝi Esp.-Societo.
S-ro Akio Ooba el Hokuriku Esp.-Ligo.
S-ro Kumajoŝi Akata el Heian Esp.-Societo.
S-ro Ukiĉi Nakamura el Ŝigaken Esp.-Ligo.
S-ro Sazô Jamamoto el Seisan-Gakuen, Kioto.

## GRATULAJ TELEGRAMOJ KAJ LETEROJ.

S-ro M. Inoue, Tokio. S-ro O. Isiguro, Tokio. S-ro W. Ooishi, Tateno. S-ro K. Tanaka, Osaka. S-ro Itoi, Kioto. S-ro T. Kuribajaŝi, Macuŝiro, S-ro Okagaki, Tomakomai, S-roj C. Huĵisaŭa, G. Kaŭahara, R. Taki, Kobe. S-ro Masuno, Kanazaŭa kaj Patrino de S-ro H. Yamada el Tokio sur la vojaĝo. Instiga gratulletero de S-ro K. Takahaŝi.

Nagasaki Esp.-Societo. Manĉuria Esp.-Ligo, Hôten. Morioka Esp.-Societo. Esperanta Societo en Niigata Medicina Fakultato. Jokohama YMCA Esperanto-Grupo. Naoecu Esp.-Societo. Nanao Esp.-Societo. Tomakomai Esp.-Societo. Ucunomija Esp-Societo. Kanazaŭa Ina Rondo. Kanazaŭa Esp.-Grupo. Klara-Rondo. Mijazaki Esp.-Societo. Obihiro Esp-Societo.

## KOMUNA TAGMANĜO REGALITA DE URBESTRO.

En ĉi-tiu mateno ĉe akceptejo ĉiuj partoprenantoj ricevis komplezan invitokarton de la urbestro.

Post kiam ni estis fotografita antaŭ vestiblego de la publika halo, ni refoje kolektiĝis al la manĝohalo en la tria etaĝo de l' sama konstruaĵo.

La manĝo estis sufiĉe luksa.

En la deserto S-ro J. Sakamoto, ĉefo de urba edukad-fako, salutis anstataŭ la urbestro, kiu bedaŭrinde jam foriris pro deviga afero. Li parolis la ĝojon, ke juna Komerca Urbo Nagoja ekpaŝis lastatempe ankaŭ al "Kultura Urbo", havante kongresojn de diversaj kulturaj movadoj. Plue li volis favoran helpon de esperantistoj en la okazo de Tut-Pacifika Ekspozicio, kiu estos okazigata en la postsekvanta jaro en Nagoja.

S-ro K. Siraki esperante faris dankosaluton reprezentante ĉiujn invititojn.

S-ro K. Ossaka ankaŭ esprimis dankon al S-ro Sakamoto kaj petis favoran helpon por nia movado, rakontante sian antaŭan intimecon kun li.

S-ro Sakamoto refoje parolis la memoron, ke li ankaŭ ete lernis Esperanton, tamen pro okupateco li interrompis lernadon.

Post tio sub la prezido de S-ro J. Miŭa, estis okazigita salutoj de reprezentantoj de lokaj grupoj kaj deklamado de gratultelegramoj.

## LABROKUNSIDO.

Prezidanto: S-ro H. Jazaki

13.00–17.00

**RAPORTO I-a:** Raporto de la Komitato "por studi pri enkonduko de Esp. en mez-

gradajn lernejojn kaj kolekti materialojn por la afero".

S-ro Ŝ. Inoue (Kameoka) raportis (vidu pĝ. 10)

S-ro T. Haĵi (Oosaka) demandis, ĉu la lasta kongreso komisiis enketon de enkonduka metodo, kaj protestis, ĉu tio estas ne superrajta, ke la komitato jam decidis metodon eĉ pri lernolibro.

S-ro S. Ŝindo (Oosaka) esperis atentemna agon, notante malbonan onidiron pri kompilado de lernolibro, kaj plue esperis apartigi privatajn aferojn de la oficialaj, fine konsilis disigon de la komitato, ĉar libera ago estas pli efika. Li proponis du metodojn: limigi rajton de komitato, aŭ libere agi, disignante la nunan komitaton. Li rekomendis la lastan metodon, ĉar disigo de la komitato donos liberecon ĉe agado.

S-ro Prezidanto interkonsiliĝis kun la raportinto pri la disigo de la komitato kaj pri la plua favora daŭrigo de la movado.

S-ro Ŝ. Inoue (Kameoka) klarigis, ke rapide interkomuniki estis malfacile, ĉar ne ĉiuj respondis tuj. Li opiniis, ke pri iuj aferoj oni devas interkonsiliĝi, kaj pri aliaj estas permesata propra decido.

S-ro Prezidanto raportis: Kvankam Hokkaidô Esp-Ligo antaŭe prezentis al la Propara Komitato la proponon, ke ni petu al la ministrejo de edukado pri enkonduko de Esp. kiel laŭvola kurso en mezgradajn lernejojn, tamen H.E.L. detiris la proponon aŭdinte ke la temata komitato agadas jam aktive kaj konkrete. La Komitato estas petata ke ĝi pli energie klopodu.

S-ro J. Okamoto (Tokio) diris: interkomuniko inter komitatanoj estas vere malfacila, tamen iuj komitatanoj agi arbitree stas malbone. Unue enkonduko, due lernolibro. Se oni sukcesos enkonduki, kompilado de lernolibroj facile sekvos.

S-ro Ĉ. Jui (Kanazaŭa) opiniis ke la komitatanoj ankaŭ havas respondecon kaj oni ne povas riproĉi nur la iniciatintojn.

S-ro S. Ŝindô (Osaka) volis voĉdonon, ĉu la komitato estas disigota aŭ decidi klare sian rajton.

S-ro Ŝ. Inoue (Kameoka) klarigis pli detale iradon de la laboro, laŭte legante leterojn koncernitajn.

S-ro K. Ossaka (Tokio) esperis ke la komitato limigu sian rajton kaj daŭrigu plue.

S-ro U. Mijazaki (Tokio) volis reorganizon de la komitato.

Per voĉdono "la komitato daŭrigu kaj limigu sian rajton", estis decidita de la plimulto de la ĉeestantoj.

**RAPORTO II-a**: Raporto de "Speciala Komitato por alprnei projekton de Kongresa Regularo".

S-ro S. Sindô (Osaka) raportis. (vidu pĝ. 11)

S-ro K. Kondô. (Kioto) prezentis demandon pri la klarigo, tamen S-ro T. Kuŭabara rekomendis prokrasti ĝin ĝis la komuna vespermanĝo. Neniaj aliaj opinioj aŭ demandoj. Ĉiuj ĉeestantoj akceptis la raporton kaj daŭrigon de la laboro.

**PROJEKTO I-a**: proponita de Hokkaidô Esp-Ligo.

"Hokkaidô Esp-Ligo deziras inviti la 24-an Japanan Esp-Kongreson al Sapporo".

S-ro S. Aizaŭa (Sapporo) klarigis la proponon kaj ĝi estis akceptita kun granda aplaŭdo.

S-ro Aizaŭa refoje stariĝis kaj dankis la unuaniman subtenon.

S-ro T. Tateiŝi (Kôhu) esperis ke oni okazigu la kongreson en somera libertempo.

S-ro Ĵ. Hukuta (Otaru) respondis ke oni jam havas planon okazigi ĝin en la komenco de Aŭgusto.

**PROJEKTO II-a**: proponita de Tokia Esp-Klubo.

"T.E.K. deziras inviti la 25-an Japanan Esp-Kongreaon al Tokio".

S-ro H. Jaĵima (Tokio) klarigis, ke post du jaroj estas la 25-jara jubila kongreso kaj samtempe ni havas la 50-jaran datrevenon de la publikigo de nia lingvo, kaj petis subtenon, kvakam estas kontraŭakutime, ke oni proponas kongreson antaŭ du jaroj.

S-ro K. Itô (Osaka) diris, ke Tokio okzigis kongreson antaŭ du jaroj kaj ne necesas havi kongreson post du jaroj, ĉar aliaj entuziasmaj urboj eble volos inviti ĝin.

S-ro K. Akata (Kioto) subtenis inviton de Tokio.

Nagoja Kongreso estis preparita du jarojn kaj akiris ĉi tiun sukceson. Li opiniis, ke estas pli dezirinde, se pli estontaj kongresoj povus esti invititaj.

S-ro J. Okamoto (Tokio) diris, subtenante la proponon, ke mono por la kongreso estas jam deponita pli ol 130 enojn,

Per voĉdono la propono estis akceptita kun preskaŭ unuanima aprobo.

**PROJEKTO III-a**: proponita de Kanazaŭa Esp-Grupo.

"Instigo pri enkonduko de Esp. en Olimpian Konkurson kiel oficiala lingvo".

S-ro Ĉ. Jui (Kanazaŭa) klarigis la proponon.

S-ro K. Ossaka (Tokio) demandis procedon de la movado kaj proponis, ke oni faru tion per la kunlaboro de Nagoja Esp-Ligo kaj Kanazaŭa Esp-Grupo.

S-ro U. Mijazaki (Tokio) proponis ke J.E.I. devas fari aranĝon.

S-ro Ĉ. Jui (Kanazaŭa) opiniis ke J.E.I. kompreneble helpos la laboron. Ni faros fundamentan laboron, kaj poste petos helpon al ĉiuj grupoj en nia lando.

Per voĉdono la propono kaj samtempe procedo de la laboro estis akceptitaj.

**PROJEKTO IV-a**: proponita de Kanazaŭa Esp-Grupo.

"Instigo de uzado de Esp. al la astronomoj, kiuj vizitos Hokkaidôn por observi eklipson de la suno".

S-ro Ĉ. Jui (Kanazaŭa) klarigis la proponon.

S-ro K. Ossaka (Tokio) prezentis opinion, ke oni komisiu la praktikan laboron al Nagoja Esp-Ligo.

S-ro K. Siraki (Nagoja) diris, ke por NEL fari ankaŭ ĉi tiun laboron estas tro granda ŝarĝo, ĉar Nagojanoj havas diversajn aferojn post la Kongreso.

S-ro J. Hajaŝi (Mie) opiniis ke li volas komisii la laboron al la proponintoj.

S-ro Ĉ. Jui (Kanazaŭa) respondis ke KEG prenos la praktikan laboron sur sin. Per voĉdono la propono estis akceptita.

**PROJEKTO V-a:** proponita de Hokuriku Esp-Ligo.

"Organizi la Esperantistojn en tuta Japanujo; formi federaciojn starigante 13 distriktojn:—Hokkaidô, Tôhoku, Kantô, Tôkai, Sin'ecu, Hokuriku, Kinki' Ĉugoku. Ŝikoku, Kiuŝû, Ĉôsen kaj Manĉurio; interŝanĝi inter si adresaron".

S-ro H. Kakuo (Takaoka) klarigis la proponon.

S-ro Ŝ. Hukuta (Otaru) postulis pli detalan klarigon, dirante ke la celo de la propono estas ne klara plie li diris ke la propono ŝajnigas, kvazaŭ nenia organizo ekzistas en nia lando.

S-ro H. Kakuo volis formi federaciojn kiel Hokkaidô, Hokuriku aŭ Kiuŝû, kaj volas aligi izolitajn esperantistojn al la organizo.

S-ro J. Hajaŝi (Mie) diris, ke la principo estas aprobebla, sed la efektivigo estas malfacila.

S-ro K. Ossaka (Tokio) klarigis, ke ni povas klasigi la izolitajn esperantistojn al du specoj: tiuj, kiuj ne scias pri organizo: tiuj, kiuj ne volas aliĝi, kvankam ili scias pri ĝi.

S-ro H. Kakuo volas formi ligon tie, kie ĝi facile formiĝas.

S-ro U. Mijazaki (Tokio) opiniis, ke formi ligon distrikte estas ebla afero, do li volis amendi la proponon, ke rekomendi tion en la nomo de la Kongreso.

S-ro Ĵ. Hukuta (Otaru) diris, ke jam ni havas filiojn de JEI en iuj distriktoj, sekve ni ne bezonas tian organizon.

S-ro K. Maeda (Kôbe) opiniis, ke rezolcii tian aferon estas ne konforme al la eco de kongreso. Li volis aprobi, se la propono estas ŝanĝita, ke oni volas formi ligon en la distriktoj, kiuj bezonas ĝin, tamen li prefere rekomendis al la proponintoj detiron de la propono.

S-ro S. Sindô (Oosaka) subtenis la proponon de S-ro Mijazaki.

Per voĉdono la amendita propono de S-ro Mijazaki estis akceptita.

**PROJEKTO VI-a:** proponita de samideanoj en Nagoja.

"Instigi Akademion, Lingvan Komitaton, UEA k. a. pri kompilado de plena vortarego, detala gramatiko kaj internacia stilistiko."

S-ro N. Tanimura klarigis la proponon.

S-ro J. Major klarigis pli detale.

S-ro T. Kuŭahara (Oosaka) demandis, kial la vorto "oficiala", kiu estis antaŭe surmetita, estas nun forigita.

S-ro J. Major respondis, ke li volis studi la proponon kiel eble kolektive, kaj detiris la vorton "oficiala" per ies konsilo.

S-ro J. Hajaŝi (Mie) opiniis, ke tia propono estas ne bezonata, ĉar Esperanto en sia nuna

formo jam sufiĉas por interbabili, ktp.

S-ro K. Ossaka (Tokio) diris, ke li intencis kontraŭstari la proponon, ĉar fari ńomatajn aferojn oficiale kaj devigi tion estas malbone. Tamen la vorto "oficiala" estas jam detirita, do li volis aprobi ĝin en principo.

S-ro S. Sindô (Oosaka) rimarkigis, en laborkunsido trakti malsaman proponon al tiu, kiu estis prezentita al la Prepara Komitato, estas malbona ekzemplo, kaj li volis, ke oni neniam sekvu ĉi tiun ekzemplon.

S-ro N. Kaŭasaki (Oosaka) klarigis, ke li konsilis al S-ro Major el tute persona vidpunkto, kaj ne kiel lingva-komitatano.

Per voĉdono la propono estis akceptita de la granda plimulto da ĉeestantoj. La teksto de l' rezolucio aperis sur la paĝo 299 de la Revuo Orienta, 1935 kaj aperis ankaŭ en diversaj gazetoj esp-aj en la tuta mondo.

## RAPORTO DE LA KOMITATO

### "por studi pri enkonduko de Esp. en mezgradajn lernejojn kaj kolekti materialojn por la afero"

〔一〕 中等學校教員エスペランチストの名簿作成の件。

〔二〕 中等學生5ケ年課程の教科書編纂を實現せしむべく適當な人に依頼する事。

〔三〕 UEA 及び Ĉe-Instituto, Internacia Pedagogia Asocio にエス語採用中の或は嘗つて採用せし學校の照會を依頼する事。

△これに就いては次の如き5項目を照會した。

1. Kiuj lernejoj de la mondo jam enkondukis Esperanton kaj de kiam?
2. Kiajn tekstlibrojn ili uzas? (Ĉu nia komitato ne povus ricevi iliajn ekzemplerojn senpage aŭ kiom kostas?)
3. El kiom da klasoj konsistas la esperanta lernado?
4. Ĉu la lernado estas deviga aŭ libera?
5. Kia estas le rezultato en tiuj aŭ aliaj lernejoj?

以上の問に對してそれぞれ返事が來てゐる。

〔四〕 我が國の中等學校にして既にエス語を正課又は隨意科として教授せる學校を調査し教授の期間、教科書、教授法等參考事項を照會する事。

〔五〕 なるべく地方の中等學校長職員等を訪問してエスペラントに關する理解を與ふる事。

〔六〕 文部省を動かす政治的工作の前提として先づ新聞、雜誌、講演等凡そあらゆる言論機關を利用して大いに輿論を喚起する事。

△これも能ふる限りやつて來た。そして學會發行の「中等學校英語科問題とエス語」も學會に相談して利用した。そして今後も有效に使ふ。

〔七〕 エスペラント採用の曉に於ける對內對外の諸方針を盛りたるパンフレツトを出版する事。

## RAPORTO DE LA SPECIALA KOMISIONO DE KONGRESA REGULARO

(I). Preparaj laboroj ĉe la Kongresa Komitato en Nagasaki kaj ĉe la sekretario.

La 21-an de Majo, 1934, la Kongresa Komitato ekspedis per la rekomendita poŝto kun atesto de livero la organizan cirkuleron al ĉiuj koncernataj lokaj grupoj rilate al elekto de la reprezentantoj. Ĝis la komenco de Julio ĉiuj grupoj krom tiu de Kioto nomis siajn reprezentantojn.

(II). Labormetodo: diskutoj pri ĝi; kaj la rezultato; nia principo.

Unue prezentiĝis propono, denove elekti inter la komisionanoj kelkajn redaktontojn de regularprojekto prezentota al la definitiva decido de la tuta komisiono.

(III). Efektivaj Laboroj jam Plenumitaj: Pri nia laborado super la regularo por la Kunsidoj de la Kongreso; la ciferoj de niaj korespondaĵoj: — La cirkuleroj: 8, la leteroj de sekretario: 23, la leteroj de komisionanoj: 45.

## INTERAMIKIĜA VESPERMANĜO

De la 18.30

En la kongresa ĉambro en Urba Publika Kunvenejo.

Tuj post finiĝo de l' laborkunsido okazis la kongresa interamikiĝa vespermanĝo kun 129 ĉeestantoj. Kiam la stomakoj, kiuj estas ege malsatigitaj pro longa diskutado de l' laborkunsido, iom satiĝis, post la saluto de l' prezidanto S-ro H. Yamada, kiel prezidanto de l' kunsido S-ro Joŝiaki Miŭa petis unue al reprezentantoj de l' lokaj grupoj fari salutojn, kiuj ĉe la malferma soleno estis prokrastitaj pro manko de l' tempo, kaj poste unu post alia al ok-naŭ samideanoj fari tabloparoladojn. Ĉiu aŭ humorplene aŭ elokvente ĉarmis la ĉeestantojn. Precipe el ili jenaj estis distingiĝaj;

S-ro Eiĵuuroo Amano, la estro de Nagoja Centra Telefona Oficejo: Pri urĝa neceso de alkonduko de Esperanto en la internacia telefonado kiel oficiala lingvo.

S-ro Takeo Koozuma, kiu lastatempe revenis al Japanujo el Argentino: Pri admiro de argentinanoj al multaj gazetoj tre regule eldonataj en Japanujo, k. a.

S-ro Masutoŝi Kidosaki: Bonhumora saluto.

S-ro Joŝicugu Okamoto: Pri detalaj raportoj de l' praktiko de esperanta leciono en la Sesa Knabina Liceo en Tokio.

S-ro Kenĵi Ossaka; Tre bonega kantado: Luno super ruino.

Sekvante Nagojaj Esperanto-Societanoj (S-ro Miĉio Tanimura ĉefe ludis kun helpoj de S-ro Joŝio Kaneko k. Ĝisuke Taenaka) prezentis duaktan pupoteatraĵon "Ŝitakiri-Suzume" (Langotranĉita Pasero). Dum ĝia preparado la helpanto S-ro Ĝ. Takenaka, utiligante mallongan intertempon, ankaŭ prezentis kantadon de l' Nagoja-Ondo (Kanto de urbo Nagoja, esperantigita). Ambaŭ prezentoj ricevis grandan aplaŭdon.

Kiam ĉiuj en ekstazo forgesis la tempon S-ro J. Kaneko faris la ferman saluton de l' kunsido.

Poste en la komuna kunloĝejo, S-ro H. H. Yamada prezentis filmon "Portanto de Sankta Standardo", por kiu li dum kelkaj jaroj penadis ŝparante grandan sumon da mono kaj tempo. La filmo temis sinceran esperantistan vivon celantan gloran finan venkon. Ne nur ĝia fotografado kaj kompilado ambaŭ estis tiel lerte faritaj kiel ĉe profesiulo, sed ĝi donis al ĉiuj rigardantoj grandan kortuŝon kaj freŝan instigon batali por komuna bono. Ekstere ankoraŭ pli forte pluvadis.

## ĜENERALA KUNVENO DE JAPANA ESPERANTO-INSTITUTO

Je 10.45 h. oni ekhavis la ĝeneralan kunvenon de JEI, landa asocio sub la prezido de S-ro K. Ossaka, direktoro.

S-ro J. Okamoto, ĝenerala sekretario de JEI, raportis pri la aktivecon kaj disdonis kasraporton de JEI.

La raportoj estis aprobitaj.

Poste oni havis la interkonsiliĝon pri la movado.

S-ro S. Ŝindo esprimis sian deziron ke ni membroj bone utiligu la ĝeneralan kunvenon, ĉar ĝi okazas nur unu fojon ĉiujare.

S-ro K. Ito deziras, ke JEI eldonu propagandajn broŝurojn.

S-ro J. Okamoto respondis ke JEI antaŭe intencis eldoni tiajn libretojn laŭ la instigo de S-ro Kaŭahara kaj komisiis al li la kompiladon, sed bedaŭrinde la eminentuloj, kiuj estis komisiitaj fari manuskripton por la libretoj, ne skribis kaj la afero ne iris bone.

S-ro T. Kuŭahara proponis ke kvankam la programo montras ke ni finu la kunvenon je 11.30 h., ni havu la kunvenon ankoraŭfoje morgaŭ post la oratora kunsido, kaj ke la direktoroj interkonsiliĝu kun la prepara komitato de l' Kongreso pri la aranĝo. La propono unuanime estis akceptita. Kaj poste la Komitato deklaris ke oni ne havos la oratoran kunsidon, ĉar mankas al ni parolontoj kaj ke ĝi disponas la tutan posttagmezon al la ĝenerala kunveno de JEI.

Kaj tiamaniere oni havis la duan parton de l' kunveno de la 14-a h. ĝis la 17-a h. en la II-a tago. Ankaŭ s-ro K. Ossaka prezidis.

Oni diskutis pri la maniero de la redaktado de la Revuo Orienta, la organo, kaj Esperanto-Lernanto.

S-ro S. Ŝindo proponis ke JEI fondu novan komisionon por la propagando.

Kun modifo la propono estis akceptita kaj la aranĝo estis komisiita al S-roj Ŝindo Okamoto kaj Mijake.

S-ro T. Kuŭahara demandis, kiel iras la reorganizo de JEI. S-ro J. Okamoto detale respondas.

S-ro H. Yamada esprimis sian opinion ke JEI kolektu monoferon.

S-ro J. Ŝibata esprimis sian opinion ke nia movado en nia lando progresis dum la lastaj dekkelkaj jaroj.

S-ro J. Kaneko demandis pri la problemo de filioj de JEI.

S-ro I. Micuiŝi petis ke la membroj subtenu JEI por la prospero de l' kaso de JEI.

S-ro Ĉ. Jui esprimis sian deziron pri la gazetoj.

S-ro T. Ikoma proponis ke JEI kolektu monoferon. Pli detale legu sur la paĝoj 318-321 de la Revuo Orienta, 1935.

# LA DUA TAGO

*La 23-an de Septembro*

9.00—12.00 h. oni havis **FAKKUNSIDOJN** (Kies raportoj estas forlasitaj pro la manko de spaco).

14.00—17.00 h. oni havis la **2-an parton** de la **ĜENERALA KUNVENO de JEI**, pri kiu vi legu ĉi-supran raporton.

## PROPAGANDA PAROLADO-KUNVENO

Ĉe Kjôka-Kaikan,

19.00—22.00, en la II-a tago.

Sub la komuna aranĝo de Nagoja Esp-Ligo kaj Nagoja Junula Budaista Ligo, la propaganda paroladokunveno temis precipe limokampon inter Esperanto kaj Budaismo.

Sub la prezido de S-ro J. Miŭa la paroladoj sekvis unu la alian laŭ jena programo.

| | |
|---|---|
| Malferma saluto. | S-ro J. Miŭa. |
| Mahajaneco de Esperanto. | 〃 T. Jamaguĉi |
| Ĝuste uzu objektojn! | 〃 K. Ŝibajama. |
| Kelkaj plendoj. | 〃 J. Nakaniŝi. |
| Religiorevivigo kaj kredo de Esperanto. | 〃 J. Ŝibata. |
| Esperanto kaj Budaisto. | 〃 K. Assano. |
| Budaismo kaj Japana Kulturo. | 〃 J. Okamoto. |

Kvankam aŭdantoj estis nemultaj malhelpite de pluvo malagrabla, ĉiuj parolantoj donis al ili grandan kortuŝon.

# LA TRIA TAGO

*La 24-an de Septembro*

## KONGRESA EKSKURSO

Bedaŭrinde ankaŭ hodiaŭ pluva vetero....!

Malgraŭ la malbona vetero, ĉ. 60 gesamideanoj partoprenis la ekskurson. Per vagonaro de 8.34 al Ĝôkôĵi el Ĉikusa-stacidomo.

Elirante la vagonaron, ĉi tiu verda ombrela grupo rapidis al restoracio "Senzairô" apud Ĝôkôĵi-stacidomo. Ekstere rekte ĉe la kunsidejo pluva torento de rivero "Tamanogaŭa" faris bruegon, tamen interne en la kunsidejo regis milda atmosfero esperanta.

La hodiaŭa malferma saluto estis farata de s-ro Ŝ. Macumoto, ano de Kôzôĵi. Sekvante laŭ la prezido de s-ro H. Jazaki, 8 gesamideanoj raportis pri la rezultatoj de la fakaj kunsidoj.

La raportantoj estis:

1. Literatura fakkunsido ·····················S-ro Ŝ. Mijake
2. Kristana fakkunsido ·························S-ro K. Itô.
3. Fakkunsido pri la enkonduko de Esperanto
   en mezgradajn lernejojn················S-ro Ŝ. Inoue.
4. Budaista fakkunsido ·························S-ro Ĝ. Takenaka.
5. Sciencista fakkunsido ······················S-ro T. Hattori.
6. Medicina fakkunsido·························S-ro H. Jazaki.
7. Studenta fakkunsido ·······················S-ro T. Ueĵima.
8. Fervojista fakkunsido ······················F-ino M. Manzaŭa.

Post la oficialaj salutoj komenciĝis amuza parto, anstataŭ ekskurso pro pluvo.

Unue s-ro J. Hasegaŭa, pri arkeologio komisiito de Aiĉi gubernio, faris interesan paroladon en japana lingvo dum duonhoro, kies temo estas "antikva kulturo kaj Oŭari-provinco". S-ro Ossaka, tuj post la parolado, tradukis ĝin en Esperanton por manifestacii Esperanton al la ĵusparolinto.

Manĝante la lunĉon, laŭ alvoko de s-ro T. Ueĵima, kelkaj gesamideanoj faris amuzaĵojn unu post la alia. Estis tre ĝoja kaj gaja horo.

Post la amuzaĵoj, s-ro H. Yamada, prezidanto de la kongreso, faris konsciencan ferman saluton de memorplena XXIII-a Kongreso de Japanaj Esperantistoj en Nagoja. Kiam oni ĥorkantadis la "Tagiĝo"-n, mildaj aŭtunaj sunradioj ekvenis sur freŝan teron, kaj tio montras nian estontecan feliĉon. Iuj vizitis templon kaj tombejon de Ĵôkôji. Aliaj babiladis en la restoracio.

Ĉiuj kongresanoj disvojaĝis kun varma koro, interŝanĝante inter si "Ĝis la revido" aŭ "Ĝis la venonta Kongreso".

## Kasraporto

# 第 23 回日本エスペラント大會會計報告書

大會々計部 山田弘、竹中治助・會計秘書井澤義一

## ★一 般 會 計★

### 收 入

大會參加費 0.50×192 名……………………96.00
寄附金 詳細別表…… ……………………264.83
雜收入 手巾賣上利益利子其他………2.04

收入合計……………………362.87

### 支 出

會場費……………………………………85.80
內譯 公會堂使用料…………50.00
Y.M.C.A. 會館使用料……24.00
同 小使心付………1.00
裝飾用大綠星旗 2…………6.00
同 紙綠星旗…………1.80
會場立看板…………3.00
印刷費……………………………………29.44
內譯 インフオルミーロ印刷代……………19.00
參加申込書 …………5.50
振替用紙及印刷代…………1.10
參加章印刷代…………1.80
大會新聞用紙代…………2.04
大會徽章費……………………………7.11
內譯 一般徽章…………6.76
委員徽章…………0.35
宣傳費……………………………………16.48
內譯 記念スタンプ印………1.80
宣傳用エハガキ…………0.30
宣傳用冊子(中等校英語とエス語) 14.38
宿舍費……………………………………5.00
合宿所心付…………5.00
通信費……………………………………24.18
通信費及送料…………24.18
事務費……………………………………7.80
內譯 諸帳簿…………0.33
封筒及用箋…………1.49
スタンプ塞印判代…………2.10
受付係事務費…………2.80
其他事務費…………1.08
エスペラント普及講演會補助…………5.00
エクスクルソ補助……………………6.58
プロトコーロ費………………………63.00
雜 費 ……………………………10.70
內譯 運搬費…………1.00
寄贈寫眞代…………5.50
同 エハガキ代…………4.20

支出合計…………………261.09
差引剩餘金…………………101.78

### 剩 餘 金 處 分

寄附者ニ謝意…………………………15.48
(記念出版「東洋ノ俠血兒」1 冊宛)
日本科學者同盟ヘ寄附……………10.00
日本醫學エス聯盟ヘ寄附…………10.00
日本キリスト敎エスペランチスト聯盟ヘ寄附……………10.00
エスペラント文學研究會ヘ寄附………10.00
日本佛教エスペラント聯盟ヘ寄附……10.00
大會規約制定委員會ヘ寄附…………5.00
エス文法文體辭典ニ關スル決議實行委員會ヘ寄附…………6.30
オリンピツクニ**エス**語採用勸告決議實行委員會ヘ寄附…………10.00
第24回日本エスペラント大會ヘ寄附…15.00

合 計…………………101.78

## ★特 別 會 計★

### 晩 餐 會

#### 收 入

晩餐會費 1.30×129 名…………………167.70

#### 支 出

食事費………………………………140.80
會場設備費…………………………7.70
繪葉書代……………………………19.20

支出計…………………167.70

### 繪 葉 書

#### 收 入

賣店賣上高…………………………40.80
大會用買入高………………………4.20

收入計…………………45.00

#### 支 出

原板製作代…………………………9.60
袋代印刷代…………………………6.00
繪面印刷代…………………………23.40

| | |
|---|---|
| 宛名面印刷代 | 3.00 |
| 圖案費 | 3.00 |
| 支出計 | 45.00 |

### エクスクルソ

#### 收入

| | |
|---|---|
| 會費 A. 0.90×34名 | 30.60 |
| 會費 B.（辨當ノミ）0.30×29名 | 8.70 |
| 大會一般會計ヨリ補助 | 6.58 |
| 收入計 | 45.88 |

#### 支出

| | |
|---|---|
| 汽車賃 0.66×32名 | 21.12 |
| 辨當代 0.30×61名 | 18.30 |
| 講師謝禮 | 1.00 |
| 講師辨當代 | 0.30 |
| 菓子代 | 2.16 |
| 女中心付 | 3.00 |
| 支出計 | 45.88 |

### 寄附金明細

| | | |
|---|---|---|
| 財團法人日本エスペラント學會 | | 60.00 |
| 第22回日本エスペラント大會 | | 20.00 |
| 飯塚エスペラント會 | | 0.50 |
| 名古屋 | 白木欽松 | 31.00 |
| 同 | 山田弘 | 20.00 |
| 同 | 西岡直一郎 | 20.00 |
| 東京 | 小坂狷二 | 20.00 |
| 名古屋 | 矢崎富美人 | 15.00 |
| 同 | ヨセフ・マヨール | 10.00 |
| 同 | 三輪義明 | 10.00 |
| 同 | 齋藤最 | 10.00 |
| 同 | 竹中治助 | 6.00 |
| 金澤 | 由比忠之進 | 5.00 |
| 山口 | 野原休一 | 5.00 |
| 愛知 | 和田米三郎 | 5.00 |
| 滿洲國 | 渡邊行孝 | 5.00 |
| 愛知 | 神谷芳根 | 2.00 |
| 金澤 | 松田周次 | 2.00 |
| 名古屋 | 福慶逸郎 | 1.50 |
| 三重 | 五井義雄 | 1.20 |
| 愛知 | 黒宮孝壽 | 1.20 |
| 同 | 畔柳賢治 | 1.00 |
| 大阪 | 福原扶美子 | 1.00 |
| 東京 | 福富義雄 | 1.00 |
| 神戸 | 生駒篤郎 | 1.00 |
| 名古屋 | 井澤義一 | 1.00 |
| 愛知 | 神谷四郎 | 1.00 |
| 大阪 | 松原雪江 | 1.00 |
| 愛知 | 松本重一 | 1.00 |
| 名古屋 | 三宅直一郎 | 1.00 |
| 小倉 | 豐島龍象 | 1.00 |
| 會津 | 五十嵐正巳 | 0.63 |
| 京都 | 木村金松 | 0.50 |
| 名古屋 | 鈴木益太郎 | 0.50 |
| 岐阜 | 浦野由市 | 0.50 |
| 名古屋 | 天野榮十郎 | 0.30 |
| 岐阜 | 長谷川丈夫 | 0.20 |
| 愛知 | 橋本春一 | 0.20 |
| 名古屋 | 池野靜夫 | 0.20 |
| 滋賀 | 山本佐三 | 0.20 |
| 愛知 | 小林清 | 0.20 |
| 古名屋 | 宮田龍雄 | 0.20 |
| 大津 | 中野壽一 | 0.20 |
| 横濱 | 杉山幹三 | 0.20 |
| 名古屋 | 田中六藏 | 0.20 |
| 同 | 上島武 | 0.20 |
| | 合計 | 264.83 |
| | 團體寄附 | 80.50 |
| | 大別、個人寄附（愛知縣下） | 138.70 |
| | 個人寄附（愛知縣以外） | 45.63 |

以上ノ外山田弘（名古屋）絹手巾10枚、白木欽松（名古屋）綠星コツプ臺200箱、盛岡エス會ザ博士浮彫額1枚

## Nomaro de la partoprenantoj

1. 岡本好次（東京）
2. 由比忠之進（金澤）
3. 福田正男（三重）
4. 加藤隆通（同）
5. 野原休一（山口）
6. 吉岡登良夫（三重）
7. 山田明（岐阜）
8. 矢崎富美人（名古屋）
9. 白木欽松（同）
10. 竹中治助（名古屋）
11. 山田弘（同）
12. 井澤義一（同）
13. 三浦富治（愛知）
14. 福田仁一（小樽）
15. 川崎直一（大阪）
16. 城戸崎益敏（同）
17. *城戸崎ひな子（同）
18. 岡本滿（名古屋）
19. 林一雄（名古屋）
20. 高橋章（同）
21. 尾崎元親（同）
22. 黒田昌雄（同）
23. 田中鈴子（同）
24. 中川鐵三郎（同）
25. 池田勝三郎（同）
26. 原田三馬（東京）
27. 土屋秀一（大阪）

28. 三根隆雄（名古屋）
29. 黒宮孝壽（愛知）
30. 桑原利秀（大阪）
31. 進藤靜太郎（同）
32. 伊藤幸一（同）
33. *松田勝彦（同）
34. 小坂狷二（東京）
35. 三宅史平（同）
36. 三石五六（同）
37. 松原雪江（島根）
38. 菅野祐治（金澤）
39. 中野壽一（大津）
40. 戸田忠夫（名古屋）
41. 谷村道夫（同）
42. 金松賢諒（京都）
43. 上島　武（名古屋）
44. 内藤爲一（同）
45. 前野勝一（岐阜）
46. 中西義雄（岸和田）
47. 杉山幹三（横濱）
48. 浦野由市（岐阜）
49. 生駒篤郎（神戸）
50. 生駒捷伍（同）
51. 河田よし子（名古屋）
52. 山内美知子（同）
53. 村瀬松枝（同）
54. 林　修二（同）
55. 丹羽正久（同）
56. 淺野　孝（同）
57. 村上澤子（横濱）
58. Jozefo Major（名古屋）
59. *田中淑子（石川）
60. 天野榮十郎（名古屋）
61. 堀田新三（同）
62. 中野昇一（同）
63. 宮田あい子（同）
64. 佐藤仁子（同）
65. 鈴木治郎（同）
66. 大橋玉三郎（同）
67. 加藤家江（同）
68. 伊藤太郎（同）
69. 田中六藏（同）
70. 大場秋雄（福井）
71. 鈴木益太郎（名古屋）
72. 齋藤　最（同）
73. 宮田龍雄（同）
74. 高木鉦一（一宮）
75. 鬼頭　豐（愛知）
76. 田中秀郎（名古屋）
77. 木村金松（京都）
78. 伊藤文夫（名古屋）
79. 永桶きよ（同）
80. 相澤治雄（札幌）
81. 林　秋雄（東京）
82. 伊藤武雄（同）
83. 鎌田秀治（同）
84. 中山知雄（同）
85. 立石　武（同）
86. 岩月賢一（同）
87. 小野田幸雄（同）
88. 青木武造（同）
89. 萬澤まき子（同）
90. 野上道子（同）
91. 矢島英男（同）
92. 酒井　鼎（同）
93. 沓木威夫（同）
94, 栗山和子（同）
95. 豐野　令（同）
96. 宮崎珠太郎（同）
97. 山口茂由（同）
98. 鶴田茂明（横濱）
99. 高橋菊藏（川崎）
100. 立石　隆（甲府）
101. 八代英藏（同）
102. 淸村藏吉（名古屋）
103. 足立直次（同）
104. 大平勇吉（同）
105. 田中義男（同）
106. 水谷　孝（同）
107. 山田三郎（同）
108. 若山和照（同）
109. 渡邊時雄（同）
110. 中井保造（同）
111. 白山榮次郎（同）
112. 成田常次郎（同）
113. 齋藤芳子（同）
114. 三浦重雄（同）
115. 山田隆子（同）
116. 佐藤三郎（同）
117. 村田光雄（同）
118. 西田英夫（同）
119. 杉下春夫（同）
120. 河合直次郎（同）
121. 福慶逸郎（同）
122. 山田昌男（同）
123. 岩田八重（同）
124. 三輪義明（同）
125. 山中弘江（同）
126. 伊藤　胖（同）
127. 池野靜夫（同）
128. 金子美雄（名古屋）
129. 畔柳賢治（愛知）
130. 神谷芳根（同）
131. 安井治雄（同）
132. 野口信幸（同）
133. 松本重一（同）
134. 小林　淸（同）
135. 本多正一（同）
136. 菅　正典（同）
137. 橋本春一（同）
138. 岡本義雄（同）
139. 柴田義勝（同）
140. 間瀬伊八（同）
141. 伊藤虔三（瀬戸）
142. 杉山新一（一宮）
143. 長谷川武夫（岐阜）
144. 生田利幸（同）
145. 水野輝義（同）
146. 柳原　記（同）
147. 森　政男（同）
148. 板橋藤吉（同）
149. 五井義雄（三重）
150. 後藤三男（同）
151. 林　好美（同）
152. 角尾芳風（高岡）
153. 志甫三郎平（同）
154. 渡部隆志（富山）
155. 中村卯三（滋賀）
156. 井上照月（京都）
157. 大崎勝夫（同）
158. 上村貴照（同）
159. 柴山　慶（同）
160. 服部　亨（同）
161. 杉村千代（同）
162. 近藤國臣（同）
163. 赤田熊義（同）
164. 西村　勇（同）
165. 大宰不二丸（同）
166. 杜多碩悦（同）
167. 木村千江子（同）
168. 中原脩司（同）
169. 山本佐三（同）
170. 川村清治郎（同）
171. 福原扶美子（大阪）
172. 多田つや（同）
173. 松本孝太郎（同）
174. 兒島壯一（同）
175. 寺田治二（同）
176. 伊藤孫次（同）
177. 佐々木祐正（同）

178. 土師孝三郎 (尼　崎)
179. 田上秀治 (岸和田)
180. 福地須磨子 (神　戸)
181. 林田幸子 (　同　)
182. 笠井田根子 (　同　)
183. 永井海乗 (　同　)
184. 湯川良彦 (兵　庫)
185. 中村　智 (　同　)
186. 澁江淳宏 (神　戸)
187. 坂内正二 (　同　)
188. 前田健一 (　同　)
189. 宮本新治 (兵　庫)
190. 月本喜多治 (　同　)
191. 上妻武次 (神　戸)
192. 黒田利弘 (廣　島)

以上 192 名

* 印ハ不參者

---

出席者府縣別

愛知 86, 東京 22, 大阪 17, 京都 17, 兵庫 15, 岐阜 9, 三重 6, 神奈川 4, 石川 3, 富山 3, 北海道, 滋賀, 山梨各 2, 山口, 島根. 福井, 廣島各 1.

## POST LA KOMPILADO

☆ Vere Nagoja Kongreso estis kovrita de pluvo. Iu ĉeestinto prave nomis ĝin Pluva Kongreso, sed ni kredas pro tio la kongreso fariĝis memoriga kaj samteme tiel intima. Tamen pro pluvo ni ne povis gvidi partoprenantojn por rigardi vidindaĵojn en la urbo, pri tio ni ankoraŭ sentas profundan bedaŭron.

☆ Ni tre bedaŭras, ke ni ne povis bone akcepti la partoprenantojn ĉe la stacidomo. Pro tio ni petas ilian grandaniman pardonon.

☆ Ni devis dividi salutojn en tri partojn. Tio devenas de nia sensperteco, sed ankaŭ estis kaŭzo de tio, ke iuj salutoj estis tro longaj kaj tro multaj reprezentantoj salutis.

☆ Ni povas fieri pri la ĉeesto kaj la regalo de S-ro Urbestro, kiuj donas bonan impreson pri nia movado al ĝeneralaj urbanoj.

☆ En la fino de la protokolo, en la nomo de Kongresa Komitato ni esprimas tutkoran dankon al ĉiuj samideanoj, kiuj donis subtenon spiritan aŭ materian al la Kongreso.

# 良書驚異的大價下

さきに本會が Literatura Mondo 社出版物の日本獨占取次權を引受けた際その條件として同社出版物の大々的價下げをいたしましたことは御記憶に新らしいと存じますが，このたびハンガリ國立銀行が積極的な爲替政策を行ふことになつた結果，同社出版物は，さらに驚くべき價下げを行ふことになりました。爲替關係の變動のめまぐるしい今日のことですから，この際あなたの書架を大いに充實させてください。LM 社出版書はいづれも定評ある良書です。

---

**Julio Baghy 著書**

DANCU MARIONETOJ　短篇小說集……………上 0.90（6）　並 0.65（4）
VIKTIMOJ　シベリアにおける捕虜生活……………上 1.60（6）　並 1.30（6）
HURA　バギの最大力作……………上 3.70（21）　並 3.10（20）
PRETER LA VIVO　詩集……………上 1.15（6）　並 0.80（4）
PILGRIMO　詩集……………上 1.10（4）　並 0.80（2）

**K. Kalocsay 著譯書**

LINGVO STILO FORMO　造語論，韻律論等 ··上 1.00（4）　並 0.55（4）
STREĈITA KORDO　詩集……………1.25（6）
RIMPORTRETOJ　エス界花形の肖像を描く詩集……………0.45（4）
ETERNA BUKEDO　各國詩人名作集··特 3.60（10）　上 3.10（10）　並 2.60（8）
Madách：TRAGEDIO DE L'HOMO　名畫入大抒事詩……………1.05（6）
Goethe：ROMAJ ELEGIOJ　愛慾抒情詩……………0.80（2）
Dante：INFERO　ダンテ「神曲」第一篇……………上 2.90（10）　並 2.50（10）
Hekler：ARTHISTORIO I　上古からルネサンスまで……………3.10（21）
Mussolini：VIVO DE ARNALDO　ファショの御大愛弟の追憶……………0.65（2）

**K. Kalocsay-Waringhien 共著**

PARNASA GVIDLIBRO　作詩法……………上 1.40（8）　並 1.05（6）
PLENA GRAMATIKO DE ESP.……………3.10（15）

HUNGARA ANTOLOGIO……………上 4.10（21）　並 3.60（21）
ENCIKLOPEDIO DE ESP.　全二冊……………上 10.50（33）　並 9.15（33）

Asch: SORĈISTINO EL KASTILIO ユダヤ民族迫害史 ………… 1.05（6）

Brzekowski: PRI L'MODERNA ARTO （目下品切） ………… 1.05（6）

J. Forge: Mr. TOT AĈETAS MIL OKULOJN ‥ 上 1.75（6） 並 1.30（6）

**F. Szilzágyi 著譯書**

TRANS LA FABELOCEANO 大人の童話 …… 上 1.40（6） 並 1.05（6）

Genthon: LA PENTROARTO DE LA MALNOVA HUNGARUJO
大判寫眞 96 個入 ………………………… 豪華版 5.00（21）

**Totsche 著譯書**

DE PAĜO AL PAĜO 原作界花形の作品批評 ………………… 0.95（4）

DEKDU POETOJ 十二人詩集 ………………………… 0.80（4）

Karinthy: VOJAĜO EN FAREMIDON ………………… 0.40（4）

**St. Engholm 著書**

HOMOJ SUR LA TERO 北歐に生れた土の小説 ………… 1.15（6）

INFANOJ EN TORENTO 兒童の生活を描く ………………… 0.65（4）

Weinhengst: TURSTRATO 4 社會小説 ………………… 1.15（6）

Aisberg: FINE MI KOMPRENIS LA RADION ………………… 1.45（4）

Sturmer: EL LA NOTLIBRO DE PRAKTIKA ESPERANTISTO 隨筆集‥
……………………………………………… 0.80（6）

Kikuĉi: AMO DE TOOĴUUROO 下村氏譯「藤十郎の戀」……… 0.40（2）

T. Herzl: LA JUDA ŜTATO ユダヤ國建設計劃書 ………………… 0.95（4）

Slominski: MIA VOJAĜO EN SOVETIO 辛辣な見物記 ………… 0.80（4）

Jelušič: CEZARO 波瀾重疊の英雄の生涯 ………………… 2.75（14）

Adamson: AULI 原作少年物語 ………………………… 0.50（4）

Privat: INTERPOPOLA KONDUTO ………………………… 0.95（4）

Jerome: TRI HOMOJ EN BOATO （目下品切） ………………… 1.45（6）

---

## AELA 會員の特典

さきに AELA 1935 年度會員へ配布した割引特價表は廢止し，上記定價の二割引で提供します。ただし，1935年度 AELA 會員である旨お申出でないかぎり割引きいたしません。

---

東京本郷元町・一 財團法人 日本エスペラント學會 振替東京 11325 番 電話小石川 5415 番

昭和十一年二月二十五日印刷納本
昭和十一年三月一日發行（毎月一回一日發行）
ラ・レヴオ・オリエンタ（エスペラント研究）第十七年第三號

定價廿錢（送料二錢）

編輯印刷兼發行人 財團法人 日本エスペラント學會 右代表 大井 學